

栄町大畑 I - 2 遺跡

— 県単道路成田安食線埋蔵文化財調査報告書 —

1 9 8 5

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

栄町大畑 I - 2 遺跡

— 県単道路成田安食線埋蔵文化財調査報告書 —

1 9 8 5

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県北部に広大な広がりをもつ下総台地は、県内でも数多くの遺跡が所在し、歴史的文化的遺産の多いことで知られています。

大畑Ⅰ—Ⅱ遺跡の所在する印旛郡栄町は、近年、隣接する成田市を中心として新東京国際空港や成田ニュータウンなどが建設され、東京のベッド・タウンとして都市化の様相を示しています。このような状況に対応するため、千葉県土木部では成田ニュータウンへの交通量緩和と新東京国際空港への交通路を確保するため、成田市街地と栄町を結ぶバイパスを計画しました。

千葉県教育委員会は、道路建設に係る用地に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土木部道路建設課をはじめ、関係諸機関と協議を重ねた結果、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが昭和55年度から58年度にかけて実施しました。

今年度、栄町に所在する10遺跡の整理が終了し、その成果として大畑Ⅰ遺跡を中心とした9遺跡を「主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅宅地関連事業）地内埋蔵文化財調査報告書」として刊行し、今回残りの1遺跡として大畑Ⅰ—Ⅱ遺跡の報告書を刊行する運びとなりました。

本遺跡は、印旛沼に南面する標高約30mの台地上に立地し、古墳時代後期の住居跡41軒以上、掘立柱建物跡19棟以上が検出されました。出土遺物は、土師器（鬼高～国分）、須恵器、土製品、瓦などがあり、なかでも「厨」と墨書された須恵器、「玉作」とヘラ書きされた文字瓦など貴重な資料が出土しています。これらの遺構、遺物からみて、先に報告した大畑Ⅰ遺跡に関連する官衙跡の一部と考えられ、古代下総国を解明していく上で重要な資料となるものです。

この報告書が、学術的な資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史に対する理解を深めるために広く活用されることを望んでやみません。

最後に地元関係者、千葉県土木部、県印旛土木事務所、千葉県教育委員会、栄町教育委員会の御協力、御指導に深く御礼を申し上げますとともに、協力された多くの調査補助員の皆様に対して、心から謝意を表します。

昭和60年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 今井 正

例 言

1. 本書は、県単道路改良事業の実施に伴い調査した印旛郡栄町に所在する大畑^{おおぼたけ} 1—2 遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘作業及び整理作業は、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉県土木部道路建設課との委託契約に基づき、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、昭和57年12月15日から昭和58年2月28日まで、調査部長 白石竹雄、部長補佐 岡川宏道、班長 高橋賢一の指導のもとに調査研究員 岩井正が担当して行なった。
4. 整理作業は、昭和59年10月1日から同年12月31日まで、調査部長 鈴木道之助、部長補佐 根本弘、班長 鈴木定明の指導のもとに調査研究員 小林清隆が担当して行なった。
5. 本書の執筆は、1—1が県教育庁文化課になるほかは小林がこれにあたった。
6. 遺跡コードは329（市町村コード）— 013（遺跡コード）とした。
7. 本書に使用している図面の方位は、すべて座標北を指している。
8. 本書に使用した地形図は、以下のとおりである。

第1図 国土地理院著作発行

1：25,000 成 田（N I—54—19—10—3）

1：25,000 下総滑川（N I—54—19—9—4）

第2図 千葉県教育庁文化課作成

1：2,500 「風土記及竜角寺古墳群地形図」を再トレースして使用

9. 本書に使用した空中写真のうち、図版1・2は京葉測量(株)の提供になるもので、図版3については(有)エアー・フォト・サービスに委託したものである。
10. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏の御指導・御協力を賜りました。ここに謝意を表します。

千葉県土木部道路建設課、県印旛土木事務所、千葉県教育庁文化課、栄町教育委員会
石戸啓夫氏、我孫子市布佐、成田市大竹・上福田、栄町竜角寺地区の調査補助員の方々

本文目次

序 文

例 言

I 序 章

- 1 調査に至る経過…………… (文化課) …… 1
- 2 遺跡の位置と環境…………… 1
- 3 調査の概要…………… 5

II 遺 構

- 1 A地点…………… 9
- 2 B地点…………… 11
- 3 トレンチによる確認調査…………… 27

III 遺 物

- 1 住居跡から出土した遺物…………… 35
- 2 土坑から出土した遺物…………… 50
- 3 グリッド及びトレンチから出土した遺物…………… 51

IV ま と め…………… 63

付 出土土器観察表…………… 67

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺地形 (1/25,000)	3
第2図	調査区と遺跡地形図 (1/2,500)	6
第3図	調査区全測図	7
第4図	調査区土層柱状図	8
第5図	501号跡実測図	10
第6図	A地点検出溝状遺構実測図	11
第7図	B地点遺構検出状況	12
第8図	506号跡カマド実測図	16
第9図	507号跡カマド実測図	17
第10図	B地点掘立柱建物跡配置図	23
第11図	602号跡南側柱穴断面図	24
第12図	D501号跡実測図	27
第13図	トレンチ設定図	27
第14図	遺構確認状況図①	28
第15図	溝状遺構実測図	29
第16図	遺構確認状況図②	30
第17図	遺構確認状況図③	32
第18図	遺構確認状況図④	34
第19図	501号跡出土遺物実測図	35
第20図	503号跡出土遺物実測図	36
第21図	505号跡出土遺物実測図	37
第22図	506号跡遺物出土状況	39
第23図	506号跡出土遺物実測図①	40
第24図	506号跡出土遺物実測図②	42
第25図	507号跡遺物出土状況	43
第26図	507号跡出土遺物実測図	44
第27図	508号跡出土遺物実測図	45
第28図	509号跡出土遺物実測図	46
第29図	510号跡出土遺物実測図	47
第30図	511号跡出土遺物実測図	48

第31図	512号跡出土遺物実測図	48
第32図	513号跡出土遺物実測図	49
第33図	514号跡出土遺物実測図	49
第34図	D501号跡出土遺物実測図	50
第35図	グリッド及びトレンチ出土土師器実測図①	52
第36図	グリッド及びトレンチ出土土師器実測図②	53
第37図	グリッド及びトレンチ出土須恵器実測図	54
第38図	墨書土器実測図	55
第39図	グリッド及びトレンチ出土瓦拓影図	57
第40図	文字瓦	58
第41図	トレンチ出土土製品実測図	59
第42図	グリッド及びトレンチ出土縄文式土器・弥生式土器拓影図	60
第43図	グリッド及びトレンチ出土石器実測図	62
第44図	古墳時代遺構配置図 (1/2,000)	65
第45図	奈良・平安時代遺構配置図 (1/2,000)	66

付 図

- 付図1 B地点検出住居跡実測図
 付図2 大畑I遺跡及び大畑I—2遺跡全体図

図 版 目 次

図版1	大畑遺跡と周辺の航空写真	2. B地点全景 (北東から)
図版2	大畑遺跡群の航空写真	図版6
図版3	1. 大畑I—2遺跡の航空写真 (南西上空から)	1. 503・505号跡全景 (北西から)
	2. 大畑I—2遺跡の航空写真 (東上空から)	2. 506号跡全景 (北西から)
		3. 512・514号跡全景 (北東から)
		図版7
		1. D501号跡全景 (西から)
図版4	1. 遺跡遠景 (北から)	2. 505号跡遺物出土状況 (東から)
	2. A地点全景 (南西から)	3. 505号跡遺物出土状況 (東から)
	3. 501号跡全景 (南東から)	4. 506号跡遺物出土状況 (南東から)
図版5	1. B地点全景 (北西から)	5. D501号跡遺物出土状況 (西から)
		6. 文字瓦出土状況

- | | | | |
|------|------------------------|------|-------------------------------------|
| 図版 8 | 1. Z 8・9—Nトレンチ全景(西から) | 図版12 | 507・508・509・510号跡出土土器 |
| | 2. Y10—Wトレンチ全景(南から) | 図版13 | 510・511・513・514・D501号跡出土土器、グリッド出土土器 |
| | 3. Z10—Wトレンチ全景(北から) | 図版14 | グリッド出土土器 |
| | 4. Z11—Wトレンチ全景(北から) | 図版15 | 墨書土器 |
| 図版 9 | 1. Z 9—Wトレンチ全景(南から) | 図版16 | グリッド出土の瓦 |
| | 2. Z10・11—Nトレンチ全景(西から) | 図版17 | 瓦の調整痕、石製品、土製品 |
| | 3. Z12—Nトレンチ全景(東から) | 図版18 | 土製品、鉄製品、耳環 |
| 図版10 | 501・503・505号跡出土土器 | 図版19 | 縄文式土器・弥生式土器 |
| 図版11 | 506・507号跡出土土器 | 図版20 | 石器 |

I 序 章

1 調査に至る経過

本事業は、県道成田安食線道路改良事業の一環として千葉県知事より依頼を受け実施されたものである。

昭和57年11月10日、県印旛土木事務所は栄町竜角寺地先に成田安食線道路改良事業代替地の計画を立て、千葉県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについて」照会をした。千葉県教育庁文化課では、11月24日付けで土師器散布地1カ所の旨回答した。これを受けて県土木部長は、11月25日当代替地の記録保存として、昭和57年度内の発掘調査を千葉県教育委員会教育長あてに依頼した。県教育庁文化課及び県土木部道路建設課は、代替地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて幾度となく慎重な協議を重ねた。その結果、やむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議が整い、11月30日に県教育委員会教育長は、県土木部長および財団法人千葉県文化財センターあてにその旨通知した。

財団法人千葉県文化財センターではこれを受けて、昭和57年12月15日から昭和58年2月28日まで発掘調査を実施する運びとなった。

(文化課)

2 遺跡の位置と環境

遺跡は印旛郡栄町大字竜角寺字台内71他に所在する。竜角寺地域は下総台地の北側にあたり、現在の利根川と印旛沼の間に半島状に突き出した台地の一画に位置している。下総台地は、そのいたる所で浅い谷が入り込み、その開析によって複雑な樹枝状台地が各所で形作られていることはよく知られている。栄町周辺の半島状の台地は多少趣が異なり、印旛沼側の北西方面から南にかけては谷が形成されず、断崖状となる景観を呈し、谷は北の利根川側で発達をみせている。国鉄成田線の下総松崎から安食駅間が、ちょうど台地の縁に沿って敷設されている。また、栄町酒直近辺が利根川側からの沖積地が開け、台地の幅が最も狭くなっている。こうした地形は、現在の利根川が形成される過程で変化してきたわけで、今回の調査で明らかになった先土器時代から歴史時代にいたる長期の間にも様々な地形的変遷があったと思われる。調査成果と考え合わせると、この景観の移り変わりのなかでもいわゆる古鬼怒湾が退いた時期は、生産基盤などとの係わりから重要な画期の一つであったといえる。そうした地理的状況のなかで、

I 序 章

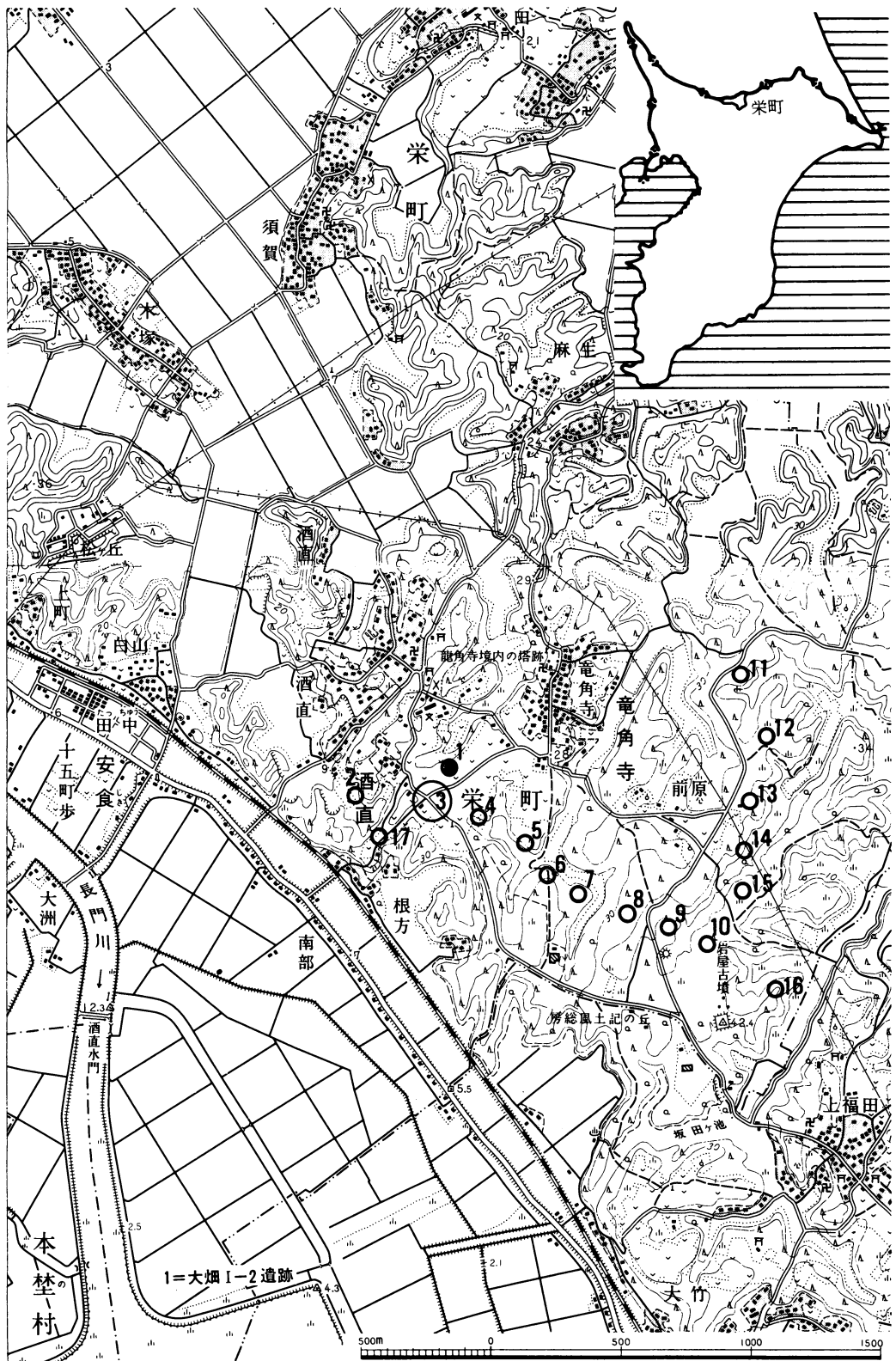
今回調査を実施した大畑Ⅰ—Ⅱ遺跡は、東に標高30m前後の平坦部が広がり、北西側には利根川に向かう谷が進入してきて、それによって遺跡の西端部が確定されるという位置に占地している。

本遺跡が所在する印旛沼東岸は埋蔵文化財の宝庫としても知られる地域である。特に、遺跡から北東に500mの位置に所在する竜角寺は、白鳳様式の薬師如来坐像が現存していることで有名である。また、この一帯は古くから竜角寺古墳群として関東地方の代表的後期古墳群として知られている。竜角寺古墳群は、方墳としては最大級の岩屋古墳を含む大小112基の古墳が現在確認されており、千葉県立房総風土記の丘として保存・活用されている。房総風土記の丘の安食側入口が、大畑遺跡Ⅰ遺跡の東端である。

この文化財の宝庫で緑を多く残す竜角寺周辺にも最近に至り開発の手が伸び始め、今日ではそれに伴って調査された遺跡が新たな事実を明らかにしている。次にそうした調査された遺跡について一瞥しておきたい。

まず本遺跡の南から南東方向にかけての地域で、主要地方道成田安食線の建設工事に先立って、路線内に所在する9遺跡が発掘調査されている。この調査成果の詳細については、本書と前後して報告書(注1)が刊行される予定である。調査した遺跡は、第1図の2から南東方向の10の方へ順に向台遺跡、大畑Ⅰ遺跡、大畑Ⅱ遺跡、大畑Ⅲ遺跡、池上Ⅱ遺跡、池上Ⅰ遺跡、五丹歩遺跡、前原Ⅰ遺跡、前原Ⅱ遺跡である。以上9遺跡で大畑Ⅰ—Ⅱ遺跡と特に深い係わりを有するのは、大畑Ⅰ遺跡と向台遺跡である。大畑Ⅰ遺跡では古墳時代後期の竪穴住居跡群が検出され、その住居跡群がある時期を境に全く姿を消し、それに代わって大規模な掘立柱建物群が出現し、しかも数回の建て替えが行なわれていることが判明した。また向台遺跡は、台地上に古墳時代後期から平安時代までの竪穴住居跡27軒と、奈良・平安時代の掘立柱建物跡5棟が検出された。向台遺跡で殊に注目されるのは、大畑Ⅰ遺跡に直面するゆるい谷の斜面から出土した大量の遺物である。遺物のなかには唐三彩、畿内産土師器、多量の羽口などが含まれ、須恵器は整理箱で200箱の量が出土した。須恵器も下総地方の集落遺跡から出土する杯・甕などの日用品のほか、硯や合子がこれまでにないほどの出土をみた。こうした特殊な遺物が一般の集落内で使用されていたとは考え難く、大畑Ⅰ遺跡で同一時期に存在していた掘立柱建物に規格性のある配置が認められることなどを考慮すると、官衙的な性格をもつ遺跡であると考えられるのである。そして、周辺の歴史的環境及び遺構・遺物の両面から検討を進めた結果、大畑・向台遺跡は一体で、郡衙跡であった可能性が極めて高くなったのである(注2)。そうしたことから大畑Ⅰ—Ⅱ遺跡の調査に際しては、位置からして推定郡衙域の一部に含まれるであろうことが推測され、掘立柱建物群の続きが検出されることを予想した。

路線内の遺跡は竜角寺古墳群周辺の歴史的展開を考える上で興味深いものである。古墳時代



第 1 図 遺跡の位置と周辺地形 (1/25,000)

I 序 章 I

では中期の住居跡が古墳群の北側に立地する3遺跡で検出されている。前原II遺跡で5軒、前原I遺跡で6軒、そして五丹歩遺跡で2軒が発見され、後期に比定される住居跡は全く存在していない。後期は古墳群の西側、つまり大畑I遺跡を中心に大規模な集落が営まれるようになる。それも掘立柱建物群の出現によって終焉を迎える。さらに時代が移り平安時代になると、調査地点内の竪穴住居跡は激減し、墓域であったと思われる五丹歩遺跡で蔵骨器の出土がみられる。ここで古く縄文時代に目を転ずると、池上りI・II遺跡で出土した沈線文系土器と、その時期の所産である炉穴が注目される。沈線文系土器は三戸式から田戸上層式にかけてが出土し、特に田戸下層期の無文土器の多さは特徴的となっている。

成田安食線関係以外に周辺で2カ所の発掘が実施されている。一つは岩屋古墳の東から北に6地点に分かれて調査された竜角寺ニュータウン遺跡群(注3)である。もう一カ所は大畑I遺跡の南西に隣接する酒直遺跡(注4)である。竜角寺ニュータウン遺跡群は第1図の11～16の6地点で、北からNo.1、No.2、No.3、No.6、No.4、No.5の各調査地点である。No.1地点は土坑11基と蔵骨器4基が検出されている。No.2地点は縄文時代後・晩期の土器が出土しているが遺構は検出されていない。No.3地点は掘り込みが深く遺物の出土しない4基の土壇と、蔵骨器が埋納されていた小土壇3基、それに沈線文系土器を主体とした縄文式土器が検出されている。No.4地点は住居跡21軒、土坑と土壇合わせ225基、近世の炭焼き窯1基である。遺物は縄文時代中期末から後期初頭の土器が充実している。No.5地点は遺跡群の最も南に位置し、縄文時代の竪穴状遺構2基と、蔵骨器を埋納した可能性が強い土壇1基が発見されている。No.6地点はNo.3地点とNo.4地点の中間に位置する谷津部で、12基の横穴状遺構が調査されている。一方第1図17の酒直遺跡では方形周溝墓5基をはじめ古墳時代から平安時代にわたる竪穴住居跡多数が検出されている。しかし正式な報告書が刊行されていないため詳細については明らかでない。

以上が大畑I—2遺跡周辺で行なわれた埋蔵文化財発掘調査の主なところである。今日ではこの調査された地域は、図版1に示したように、調査前とは全く様変わりした状況となっている。なお竜角寺古墳群を中心とした地域についての歴史的環境については、先に記した成田安食線関係の調査報告書のなかでも詳しく述べられる予定であり、本項もそれと大分重複するところがある。また、千葉県立房総風土記の丘学芸員原田昌幸氏によって発掘調査の歩み(注5)がまとめられている。

注

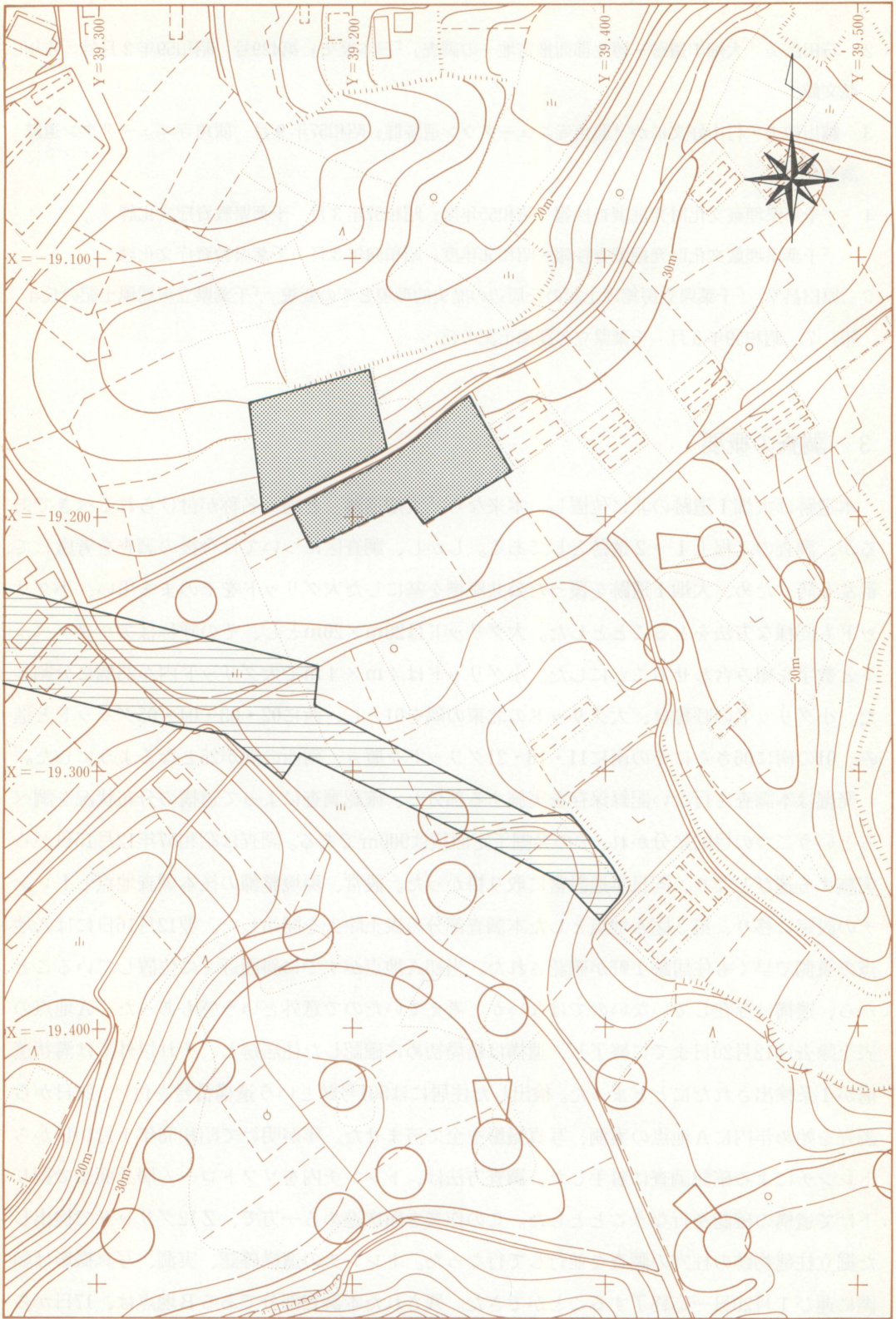
- 1 成田安食線の路線内に所在する9遺跡の調査報告書については、『主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅地関連事業)地内埋蔵文化財調査報告書』として当センターから昭和60年3月末に刊行される予定である。

- 2 石田広美「大畑 I 遺跡—埴生郡衙推定地—の調査」『日本歴史』第429号 昭和59年2月号 吉川弘文館
- 3 越川敏夫・村山好文ほか『龍角寺ニュータウン遺跡群』昭和57年9月 龍角寺ニュータウン遺跡調査会
- 4 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報—昭和55年度』昭和57年3月 千葉県教育庁文化課
『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報—昭和56年度』昭和58年3月 千葉県教育庁文化課
- 5 原田昌幸「千葉県立房総風土記の丘周辺の歴史的環境とその変貌」『千葉県立房総風土記の丘年報』7 昭和59年3月 千葉県立房総風土記の丘

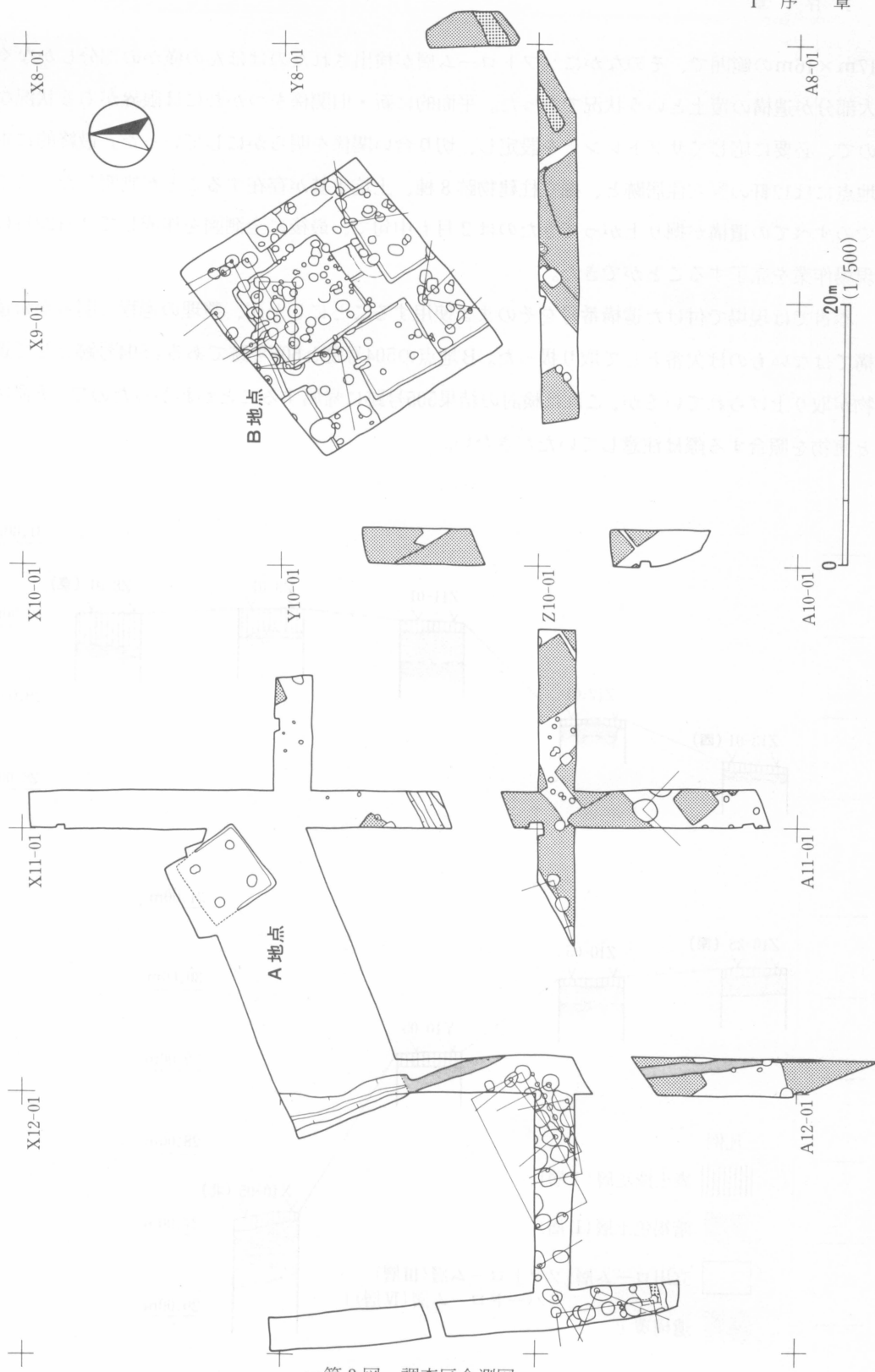
3 調査の概要

本遺跡は大畑 I 遺跡の北に位置し、本来なら「大畑遺跡」と同一名称が付けられるべきであるが、調査の工程上 I—2 遺跡としてある。しかし、調査区については今後の調査を考慮して、混乱を防ぐため、大畑 I 遺跡を覆った公共座標を基にした大グリッドをそのまま用い、小グリッドも同様な方法をとることとした。大グリッドは20m×20mとし、その呼称はアルファベットと数字を組み合わせることとした。小グリッドは4m×4mで大グリッド内を25個に分割した。小グリッドの呼称は、大グリッドの北東の隅を01とし、西に02・03・04・05グリッドと進み、01の南に06さらにその南に11・16・21グリッドを置き、南西の隅が25となるようにした。

発掘は本調査を行ない記録保存を実施する部分と、確認調査によって遺構の分布状況を調べるといふ二つの目的に分かれ、その発掘予定面積は900㎡である。調査は昭和57年12月15日から実施する運びとなり、同日早速設営に取り掛かった。設営、環境整備の後本調査地点とトレンチの設定に移り、第3図A地点とした本調査部分の表土除去を開始した。翌12月16日にはA地点の東側で早くも住居跡1軒が確認された。当初A地点がすでに斜面近くに位置していることから、遺構は存在していないのではないかと考えていたので意外という感もあった。A地点の表土除去は12月20日までに終了し、遺構は結局初めに確認した住居跡と、それ以外では溝状遺構が1条検出されたにとどまった。検出した住居には501号跡という遺構番号を付け、21日から調査を始め年内にA地点の実測、写真撮影を全て済ませた。年が明けて昭和58年1月10日からトレンチによる確認調査に着手した。調査方法は、トレンチ内をソフトローム層上面まで掘り下げて遺構の確認を行なうこととした。この作業を順次進める一方で、Z12グリッドで検出した掘立柱建物跡の柱穴の調査を並行して行なった。トレンチの遺構確認、実測、写真撮影は順調に運び1月20日一応終了することができた。残された本調査部分であるB地点は、17日から表土除去を開始しており、トレンチの調査が終わると同時に平面形の確認を始めた。B地点は



第2図 調査区と遺跡地形図 (1/2,500)

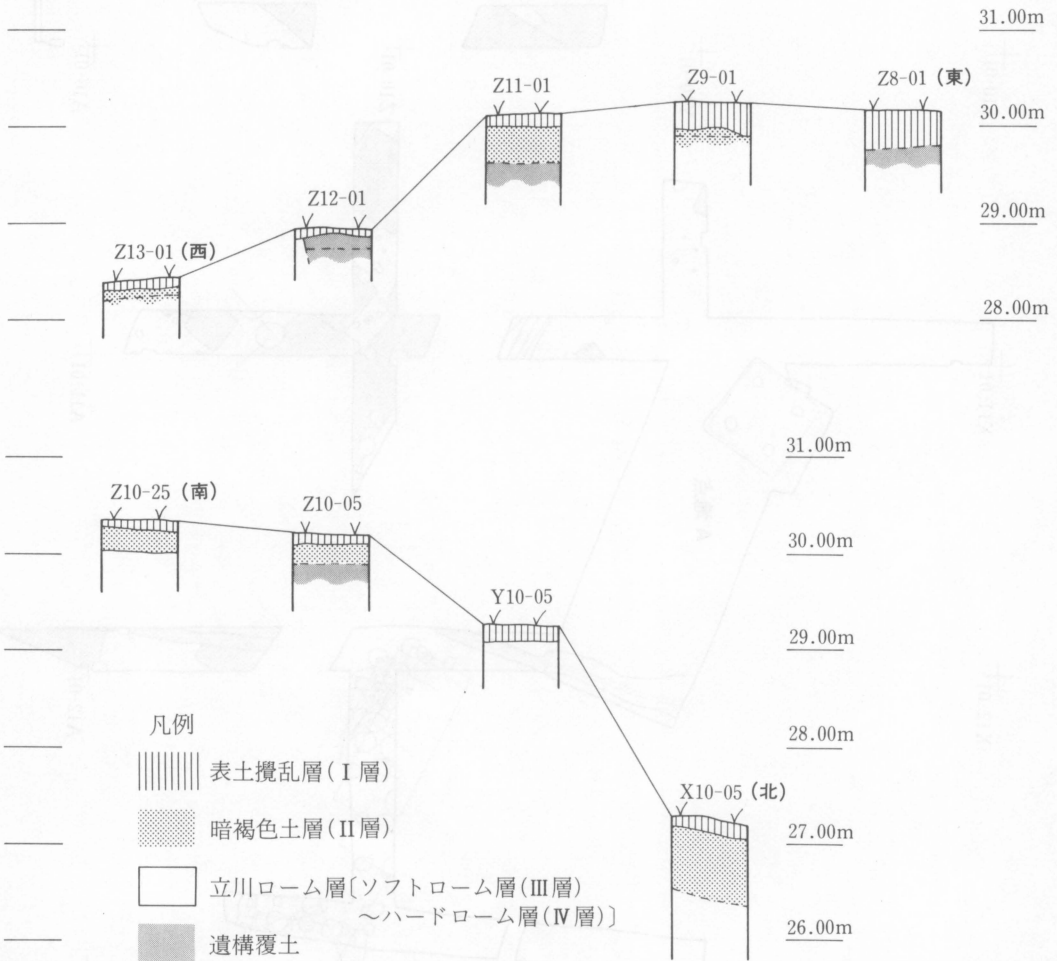


第3图 调查区全测图

I 序 章

17m×16mの範囲で、そのなかにソフトローム層が検出されたのはほんの僅かの部分しかなく、大部分が遺構の覆土という状況であった。平面的に新・旧関係をつかむには限界がある状況なので、必要に応じてサブトレンチを設定し、切り合い関係を明らかにしていった。最終的に本地点には12軒の竪穴住居跡と、掘立柱建物跡8棟、土坑1基が存在することが判明した。ここでのすべての遺構が掘り上がってきたのは2月も中旬で、最後に全測図を作成して2月28日に現場作業を完了することができた。

本書では現場で付けた遺構番号をそのまま使用することにしたが、整理の過程で明らかに遺構ではないものは欠番として取り扱った。B地点の504号跡と606号跡である。504号跡として遺物を取り上げられているが、これは検討の結果505号跡に帰属することがわかったので、実測図と実物を照合する際は注意していただきたい。



第4図 調査区土層柱状図

II 遺 構

1 A 地 点

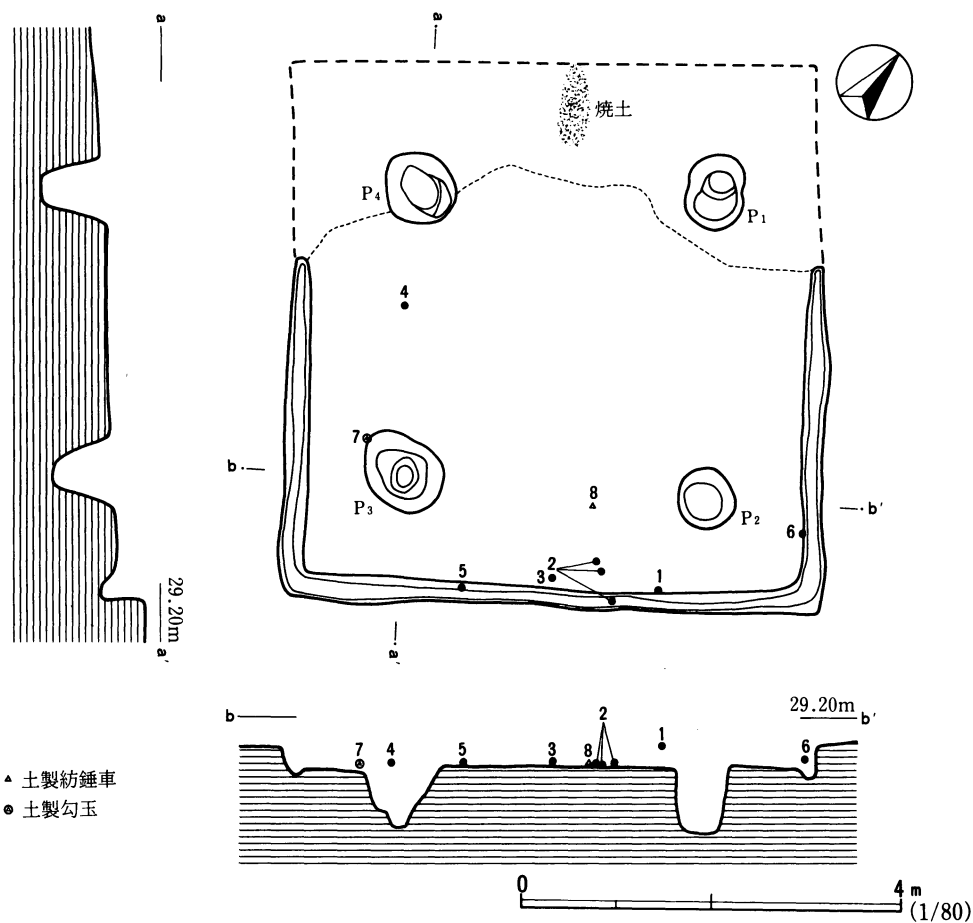
本拡張地点は、道路の北西側調査区内で、X10グリッドの南からY10グリッドの北半分にかけての24m×9mの長方形の範囲であり、面積は216m²である。この地点は、北東から入り込んでいる谷の奥部に位置し、ゆるやかな斜面となっている。また、遺跡全体からみれば北西の端にあたる地域である。当初こうした立地条件に加え、一部については削平を受けた形跡も認められたため、この地点では遺構は存在していないのではないかと考えた。しかし、表土を除去し調査を始めてみると、竪穴住居跡1軒と、溝状遺構1条を検出することができた。住居跡は鬼高期に属しており、集落の北西縁辺を形成する住居跡の一軒であると考えられるものである。溝状遺構は拡張区内に限り精査を実施したが、時期及び性格を判定する有力な遺物は検出されなかった。

501号跡（第5図、図版4）

斜面にかかるX11-16・21グリッドを主に位置している。谷の等高線に合致するように、北西側が4分の1程遺存していない。これは住居跡が構築されていた面が、時を経ることによって谷に流れ出してしまったということと、人為的な削平によって遺存していない可能性の二つのおりのみかたができる。周辺の状況から考えれば、前者の自然による要因とするのが妥当であろう。

壁は南東壁が残っており、上端で5.7mを測る。直線的な壁であるし、二カ所の隅についても直角に近い状況で曲がっているので正方形を想定した平面形が復元可能である。北西側の3分の1の壁及び4分の1の床面はすでに失われている。カマドが北西壁の中央付近に設置されていたことは、火床部に堆積していた焼土の遺存によって知ることができる。壁が遺存しているところでは壁溝が検出された。おそらくカマド部分を除いて全周していたはずである。幅は25cm前後を測り、北東壁側で深さ約12cm、南東壁と北西壁でそれよりやや浅めとなっている。断面形態は部分によって異なるが箱形からUの字形を呈す。壁の高さは南東壁で31cmを測る。壁が遺存しているところに限れば、垂直に近い立ち上がりを示しており、南東壁は残り方も良好である。各壁とも張り出すところもなく直線的に結ばれていたと推測される。床面はP₁とP₄を結ぶ線から南東側で確認された。それより北西側では床は失われている。堅緻な様子はそれほど窺われないが、平坦に構築されている床である。この床面が設定されている層は立川ローム層の下部にあたる。柱穴は対角線上に4カ所穿たれている。掘り方は円形ないし楕円形を示し、深さはP₁50cm、P₂65cm、P₃61cm、P₄64cmを測る。P₁、P₄周辺の床面が削られていることを考え

II 遺 構



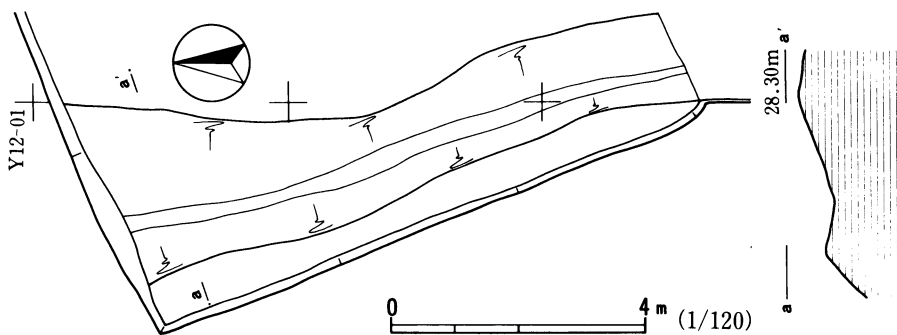
第5図 501号跡実測図

ると、4カ所とも65cm前後の深さに掘られていたことがわかる。柱間は、 P_1-P_2 が330cm、以下 P_2-P_3 325cm、 P_3-P_4 300cm、 P_4-P_1 310cmであり、割に整った配置となっている。入口の方向と考えられる南東壁寄りにピットは検出されなかった。また貯蔵穴のような施設も設けられていない。

遺物は遺構の遺存状況からしても、南東側から出土しているのは当然のことといえる。しかしその南東部分においても、覆土中から出土している遺物個体数は多くはなく、床面に近いところになって器形のわかる土器が出土している。したがって図示可能となった遺物については、本跡に伴うものと考えてよいと思われる。そのなかの杯形土器4点は完形ないしそれに近い形であり、うち3点は壁際で検出された。甕形土器については、破片では出土しているが、口径を復元できるようなものは含まれていない。これは住居の廃棄の問題にも係わるが、すでに失われてしまっている部分に甕類が残されていたことも考えられる。土器以外では、床面から僅かに浮いた位置から土製勾玉1点と、土製紡錘車1点が出土している。(出土遺物は35ページ)

溝状遺構（第6図）

A地点の西端部で検出された。斜面であるため北側と西側の両方向に傾斜している地区である。遺構はY12—01グリッドからY11—25グリッドにかけて伸びており、その方向はおおよそN—27°—Wを示している。拡張区に含まれているところを精査し、トレンチに掛かる部分については平面形を確認しておくにとどめた。この溝状遺構の幅は一定しているものではなく、検出した部分では北端が3.10mと最も広く、Y12—06グリッドあたりで1.40mと狭くなり、そのまま幅を狭めながら南東方向へ続いている。北側はかなり傾斜がつくため約12cmと浅く、しかも掘り込みの上端西側では急激に地山が西に傾斜している。全体をみても深さは10cm程度と大変浅く、断面は大きく開いたVの字形を呈している。また、溝底は特に固くされたような状態は認められない。調査した範囲内からは図示可能となる遺物は出土していない。したがって遺構の構築時期については不明であり、規模についても明らかになっていないため、遺跡全体のかでの性格づけなど多くは述べられない状況である。



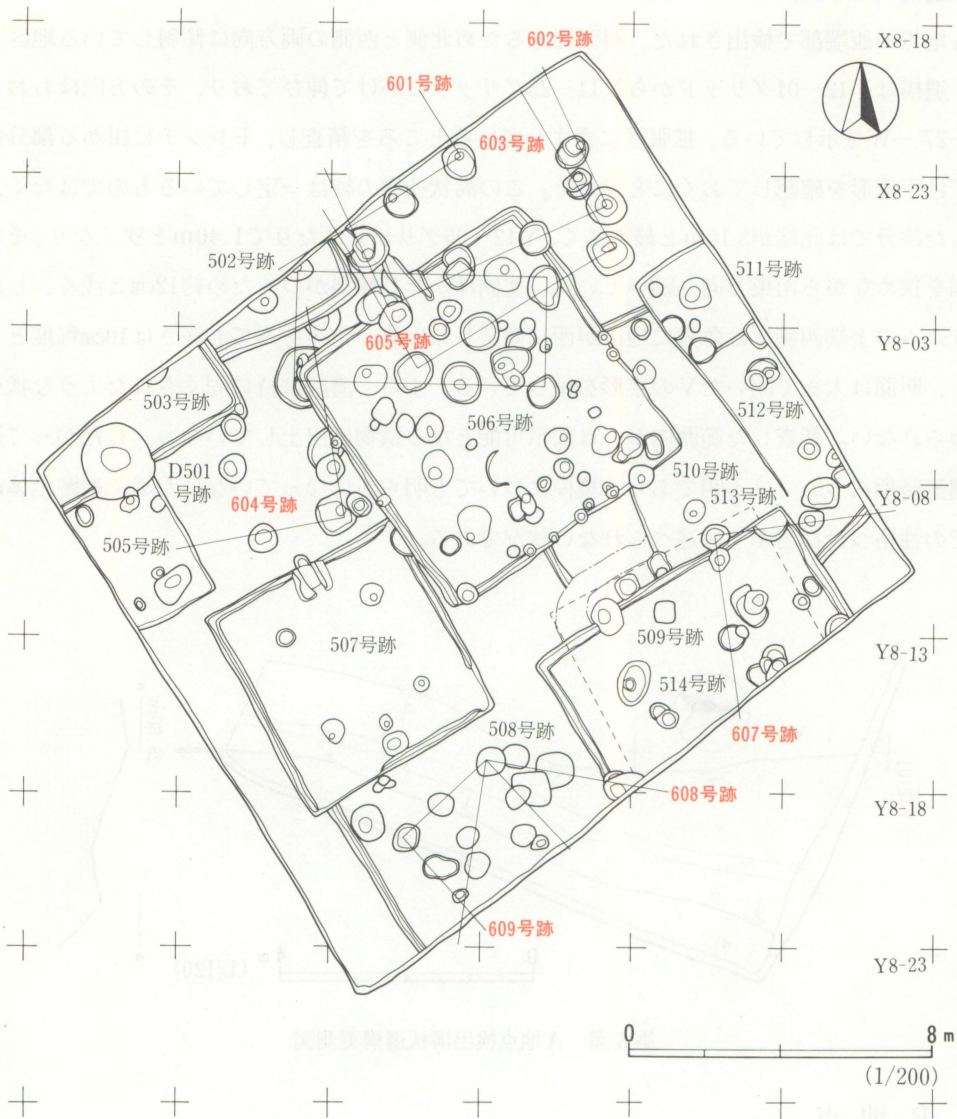
第6図 A地点検出溝状遺構実測図

2 B 地点

本拡張地点は、A地点と道路を挟んだ東側の区域にあり、グリッドでいえばX8・9、Y8・9に含まれている。調査区は17m×16mの正方形に近い範囲で、面積は272m²である。A地点はすでに斜面に掛かる状況であったが、本地点は台地の平坦部の西部一画を占めており、立地としては標高30mの等高線の内側にあっている。

検出された遺構は竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡8棟、土坑1基である。狭い調査範囲に遺構が密集しており、調査は困難を極めた。竪穴住居跡は数軒ずつが重複して、さらにその上に掘立柱建物と土坑が重なっているという状態である。特に、遺構の全体を捉えられる状況ではなかったため、新・旧関係を明らかにする作業には時間を費やさなければならなかった。これら検

II 遺 構





第7図 B地点遺構検出状況

出した遺構は大畑I遺跡で検出した遺構の様相と大きく変わるところはなく、当地域を含めた一帯が大畑I遺跡と同様な性格をもつ地域であったことが確認された。

さて、上に述べたように検出した遺構が第7図のとおりかなり密集した状況で、かつ一つ一つの遺構全体を明らかにし得る状態で調査されていないので、各遺構の説明は次のように行ないたい。

まず竪穴住居跡については、本文中の位置関係図によって当該住居跡を明らかにし、その平

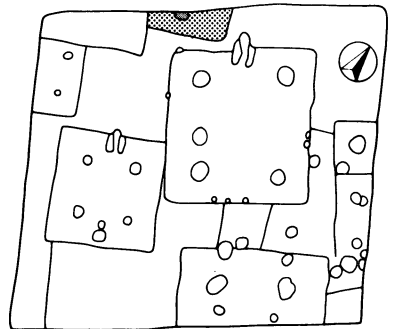
面図については付図1で示すこととしたい。また、掘立柱建物跡は配置図によってそれぞれの位置関係を示し、本文中では平面模式図を付した。

◎竪穴住居跡の位置関係図では、のスクリーンが入っているところが当該住居跡であることを示し、また、その住居跡の柱穴にはのスクリーンを入れた。

竪穴住居跡

502号跡

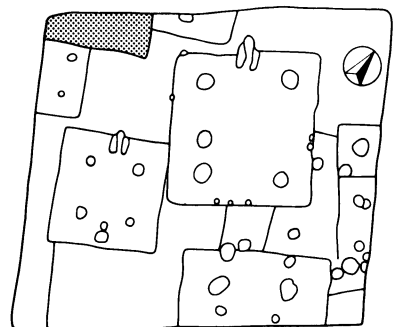
調査区の北側、X 9—22グリッドを主に検出された。かろうじて一つのコーナー付近が検出されただけで、大部分が調査区の外に広がりをもつ。南東のやや丸味のある隅から東壁は直線的に調査区外へ続いており、南壁は僅かに張り出すように西へ伸びている。西側は503号跡が本跡を切って構築しているので一辺の規模は不明である。検出面から床面までの壁高は28cm前後を測り、ハードルーム層を掘り込んでいるため、かなりしっかりした掘り方を残している。立ち上がりは直角に近く、検出部分では壁溝がめぐらされている。幅約30cmとやや広く、床面からの深さは8cmで、これはどの部分についても同じような数値を示す。ピットは遺構内に2カ所検出した。いずれも調査区外へ広がるため全掘することはできなかった。柱穴は通常向い合う二つの隅を結ぶ対角線上に設定されることが多いので、 P_1 が本跡の柱穴として考えられる。直径70cm、短径60cmと推測され深さは45cmを測る。ただ605号掘立柱建物跡の柱穴も P_1 と同じ位置にあたるので、掘り込み面での平面形は本来の姿をとどめていないかもしれない。床面は比較的平坦で大変良好に踏み固められた様子が観察される。



遺物は覆土上層から出土しているが小破片ばかりで、床直上の遺物は皆無である。

503号跡（図版6）

Y 9—02・03グリッドを主に検出された。調査区の西の端部に位置する。南東のコーナー付近が検出されただけで、大部分が調査区域外へと広がっている。コーナーは直角に近い曲がり方を示し、東壁及び南壁は直線的に伸びている。東壁は502号跡の東壁に極めて近い方向を向いている。本跡は502・505号跡を切って構築され、D501号跡の土坑が本跡より後に掘られている。ここでの一連



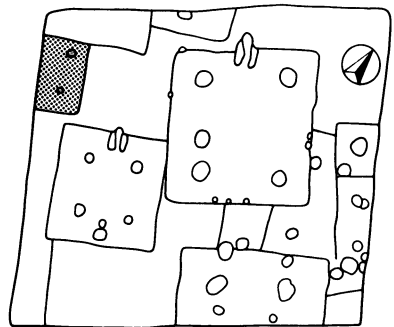
II 遺 構

の新旧関係は502・505号跡→503号跡→D501号跡となる。502号跡とは東壁で接しており本跡の床面との比高は15cmを測っている。南壁は壁高50cmと掘り込みもなかなか深く、壁の残り具合も良好である。検出した範囲においては壁溝を検出することができた。幅約20cm、床面からの深さ5cmでめぐらされている。床面はハードローム層中に設定され貼床が施される。床面は壁溝に近づくにしたがってやや低くなる傾向が認められる以外では、平坦に構築され、大変堅緻な状態を残している。柱穴及びそのほかの付属施設は検出されていない。

覆土は大きく3層に分けられた。上層は暗褐色土層で、中位にロームブロックを主体とした黄褐色土層が入り、下層はロームブロックに焼土粒・炭化粒を含んだ土が堆積する。また、床面に密着したような状態で焼土が検出されている。火災に遭遇した可能性もあり得ることを示している。遺物は覆土中から出土しているが個体数は少ない。土師器の杯、鉢、須恵器の壺などが出土している。(出土遺物は36ページ)

505号跡 (図版6・7)

Y9—08グリッドを主に位置する。502・503号跡と同じように完全な形では調査できなかつた。しかし、柱穴と考えられるピット(P₂、P₃)が2カ所に検出されていることから、4分の1以上が調査できたものと思われる。P₂とP₃の柱間は200cmを測り、P₃から東壁まで110cm、同じく南壁までが110cmであることから考えると、一辺4.40m前後の規模を想定することができる。一カ所検出されたコーナーは僅かに鋭角となり、東壁及び南壁は直線的



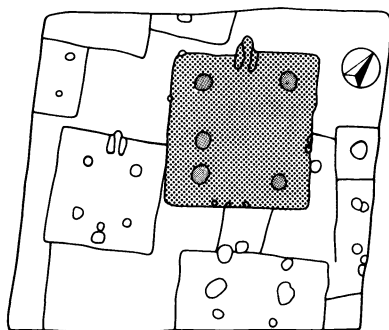
に伸びている。検出面からの壁高は約20cmを測り、壁上部はソフトローム層となるため軟らかな感を受ける。残り具合については比較的良好な状態である。壁下に溝は検出されなかつた。ただ出土遺物から本跡が鬼高期の所産であることは間違いないので、普通鬼高期の住居には壁溝が掘られている場合が多いことを考慮すれば、検出できなかった壁の下に溝が掘られているという可能性を残している。床面はソフトローム層下位に貼床を施して設定され、やや軟らかな状態を示している。二カ所に検出された柱穴のうち、P₂は途中で段が生じており、深さは53cmを測る。またP₃は、直径30cmの円形を呈する掘り込み面から40cmの深さで底面に至り、下端は直径15cmの円形となっている。P₄は入口の方向に掘られるピットと考えられ、本跡に付属するものと判断した。長径35cm、短径25cmの楕円形の掘り込みを呈し17cmの深さを測る。P₂から北西の方向で、503号跡の南壁に接する位置において、浅く楕円形に窪む部分が認められる。ここから高杯が伏せられた状態で出土しており、それが支脚として使用されていたような状況で

あるので、北壁中央近辺がカマドの設置されていた位置と推測される。またその周辺に砂が薄く堆積していることもそれを裏付けている。

覆土は上下2層に分けられる。1層はローム細粒を含んだ暗褐色土層で、下層はローム粒を散発的に含む褐色土層である。遺物は床直上に多く出土し、土師器の杯、鉢、甕などが認められる。P₃の南側には不整楕円形のピットがあり、ここから甕の口縁部が出土している。このピットは攪乱ということも考えられるため性格づけについては避けておきたい。(出土遺物は37ページ)

506号跡 (図版6・7)

本跡は拡張区の中央部に位置しているため全掘することができた住居跡である。しかし、掘立柱建物跡と住居跡とが著しく重複するところでもある。本跡は竪穴住居跡との切り合い関係のなかでは、どの住居跡をも切って構築されているので最も新しくなる。また、4棟の掘立柱建物跡は、いずれも本跡より後に構築されたものである。カマドは掘立柱建物の柱穴によって煙道と袖が破壊されているが、北西壁の中央に設けられている。このカ



マドの中心と南壁とを垂直に結ぶ線を主軸とすれば、その方向はN-35°-Wを指す。四つの隅はほぼ直角に曲がり、主軸と平行する壁は上端で測定すると7.8mを測り、直交する南北の壁は7.45mとなっている。正方形に近い平面形を有し、四辺が直線的に結ばれているので大変整った形を呈している。遺構の南半分はほかの住居跡と切り合いがあるため、壁高は本跡が切っている住居跡の床面との比高しか残していない。北側では検出面からの測定が可能で約25cmを測る。壁溝は東壁中央付近から南壁の3分の1にかけてを除いて検出された。幅は25cm前後で、深さは5cmとやや浅い。断面形態は箱形を呈する。あまり深い掘り込みとはなっていないが、壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い形となっている。床面は掘立柱建物跡の柱穴による破壊によって良好な状態では遺存していない。床面はハードローム層中に貼床を施して設定され、中央では固く踏み込まれた様子を認めることができる。しかし、南壁に近いところでは凹凸が生じており、中央部分でみられた固い面は残していない。柱穴はP₅~P₉の5カ所を検出した。このほかに本跡には壁に沿って9カ所の壁柱穴が伴って発見された。主柱穴のうちP₅は、床面からの掘り込みは、上端で直径約100cmを測り94cmの深さを有している。以下P₆は径80cmで深さ88cm、P₇は径100cmで深さ80cm、P₈は径90cmで深さ74cm、P₉は径80cmで深さ95cmをそれぞれ測る。下端での直径は大体30cmとなっている。各柱穴ともかなりしっかりとした掘り方を示している。

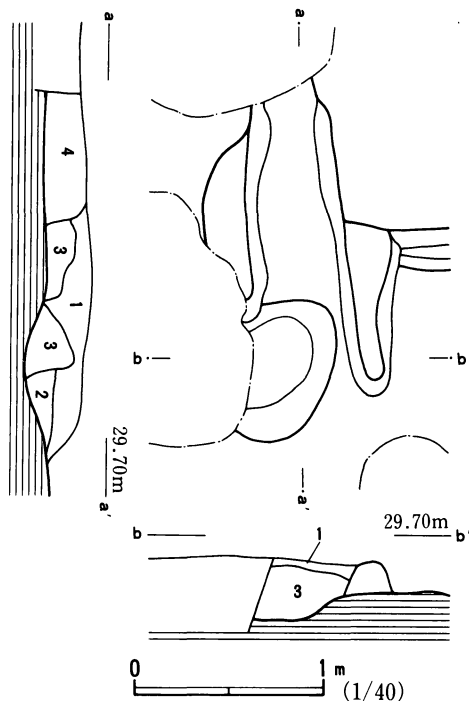
II 遺 構

柱間はP₅—P₆が5.1m、P₆—P₇4.5m、P₇—P₈5.0m、P₈—P₉4.5mとなっている。P₈はP₇とP₉の間で、P₇から1.7mの位置に穿たれている。カマドは北壁の中央に構築されている。先に述べたように、煙道部の先端と左袖が掘立柱建物跡の柱穴によって壊されている。火袋部の幅は中程で約40cmを測り、壁への掘り込みは少なくとも75cmはあり、かなり煙道部分が長くなっている。

本跡から土器類では須恵器の杯、蓋、土師器の杯、壺、甕などが出土している。また鉄器、石製品、土製品も出土している。特に集中して出土するというような傾向は認められないが、未接合の破片も含めると個体数はかなり多いと思われる。なお、鉄製品が小さいものも含めると5点出土しており、本跡の出土遺物のなかでは注目される。(出土遺物は38ページ)

カマド土層説明

1. 褐色土層(黒色土と山砂が混ざり、ローム粒と焼土粒が僅かに含まれる。)
2. 黄褐色土層(山砂にローム粒と焼土粒を霜降り状に含む。)
3. 褐色土層(山砂にローム粒と焼土ブロックを含む。)
4. 黒褐色土層(黒色土に焼土が散発的に含まれる。)

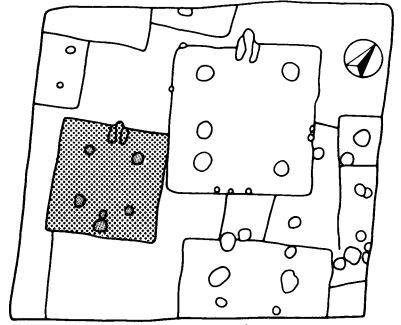


第8図 506号跡カマド実測図

507号跡 (図版5)

505号跡の南東に接して位置し、ほかに508号跡と重複しているが完掘できた。Y 9—06・11グリッドを主に位置する。506・508号跡との切り合い関係は、506号跡よりは古く、508号跡より新しいと判断される。カマドは北壁に設けられており、その中心と南壁とを垂直に結ぶ主軸はN—30°—Wに傾く。北東の隅は506号跡によって切られているが、残りの三つのコーナーは直角に曲がっており、特に北西、南西の隅は鋭く折れている。壁は直線的に結ばれ、主軸方向の両壁は5.9mを測り、北壁及び南壁は5.6mの規模をとっている。506号跡以上に整った平面形を有する住居跡である。検出面からは40cmの掘り込みで床面に達し、壁は垂直に近い形で立ち上

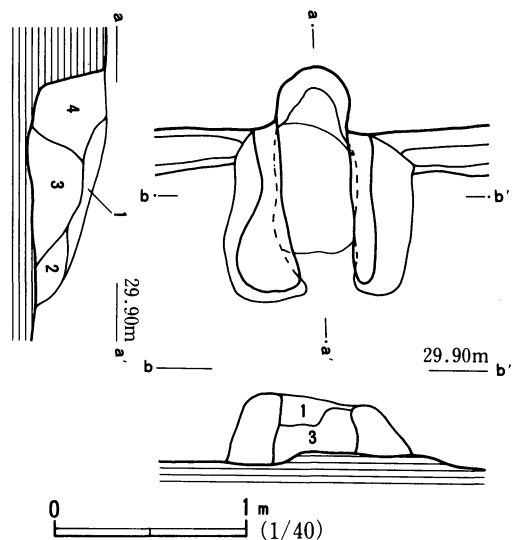
がる。重複のないところではかなりしっかりした壁が残されている。壁溝は南壁で一部とぎれている以外はめぐっている。壁溝の深さは5cm程度と大変浅く、それも場所によってはさらに浅くなるような状況である。一応断面形態は箱形を呈する。柱穴は、支柱穴となるものが対角線上に4カ所検出された。P₁₀～P₁₃である。P₁₀は直径60cmで深さ42cmを測り、下端は直径20cmと上端に比較してかなりすぼまる。P₁₁は直径40cmの掘り込みから60cmの



深さで底に至り、下端は15cm程となる。P₁₂は長径65cm、短径50cmの楕円形の掘り込み面から下端では15cmになる掘り方を持ち、深さは47cmを測る。P₁₃は上端で50cm、下端で35cmと円筒状に掘られ、深さは41cmである。柱穴間はP₁₀—P₁₁2.55m、P₁₁—P₁₂2.7m、P₁₂—P₁₃2.75m、P₁₃—P₁₀2.5mで多少ばらつきがある。P₁₄は入口に付随するピットと思われる。直径35cm、深さ33cmを有する。P₁₅は長径65cm、短径55cmの楕円形を呈する平面形で、深さは62cmある。底面は長径35cm、短径25cmの同じく楕円形で、中央部がやや窪み気味となっている。貯蔵穴と考えられるピットである。床面は、ハードローム層中に貼床を施して設定される。全体に平坦に構築され、よく踏み固められた様子が観察できる。カマドは、すでに天井部分が崩落しているが両袖は遺存する。焚口での幅は25cm程度と狭く、中央でやや広がる様子をみせる。煙道部は壁から30cm掘り込まれており、比較的急角度で立ち上がる。火床部は楕円形に浅く窪む。

カマド土層説明

1. 褐色土層(山砂, 焼土粒, ローム粒が混ざる。)
2. 暗褐色土層(黒色土に山砂とローム粒が含まれる。)
3. 橙褐色土層(焼土ブロックを主に, 山砂とローム粒が若干含まれる。)
4. 黒褐色土層(黒色土に僅かに焼土粒が含まれる。)



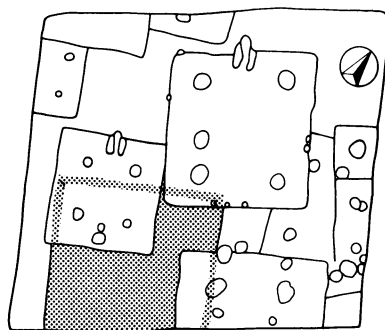
第9図 507号跡カマド実測図

II 遺 構

覆土はローム粒、焼土粒を含んだ黒褐色土層が主体である。遺物は土師器の杯、鉢、甕のほか、石製品、土製品が出土している。床面に接して完形品が出土しているが、全体的に出土量は多くなく、出土状況も散発的である。(出土遺物は42ページ)

508号跡

拡張区の南西側に位置し、506・507・509・514号跡及び掘立建物跡2棟と重複関係にある。これらの重複のなかでセクションの観察などから、本跡が最も古い遺構に位置づけられる。東壁と西壁の一部が遺存しているが、大部分は先にあげた遺構によって切られている。そこで比較的残り方のよい西壁から住居跡の方向を決めると、N—32°—Wの傾きが考えられる。また、遺存する両壁から復元すると、一辺8.6m前後の大形の規模が想定され



る。検出面からの深さは浅めで30cm程である。東壁、西壁とも立ち上がり方は良好で、ほぼ垂直である。遺存する壁下には壁溝が認められる。幅は15~20cmと狭く、深さは5cmに達していない。断面形態は箱形となる。床面は、ハードローム層中に貼床を施したもので、平坦かつ堅緻な状態をとどめている。ただ南側では掘立柱建物跡の柱穴が床面を大部壊している。遺存する床面上に柱穴を検出することはできなかった。しかし、これだけの規模を有する住居跡であるので、柱穴が掘られていなかったとは考え難い。ほかの新しい住居跡の床面を完全に剥がせば、あるいは検出することができたかもしれない。この調査を時間的制約から実施することができなかったのが惜まれる。そのほかカマドとか付属するピットも検出されなかった。カマドについては、北壁に構築されていたとみておいて間違いないであろう。

覆土は、ローム粒と焼土粒を含んだ暗褐色土層の単一層である。覆土上面から瓦片、ロクロ整形による土師器の杯、「厨」と墨書された須恵器の杯などが出土している。これらは掘立柱建物が建てられていた時期に使用されていた可能性が大きく、本跡に直接伴う遺物ではないと考えられる。本跡に伴う遺物としては、土師器の杯、高杯、鉢、甕と土製品では土玉が出土している。(出土遺物は44ページ)

509号跡

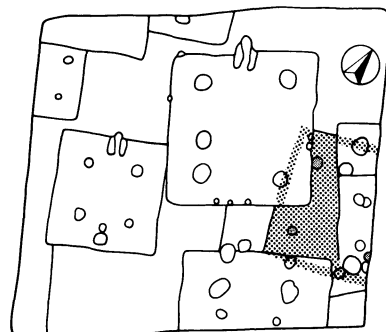
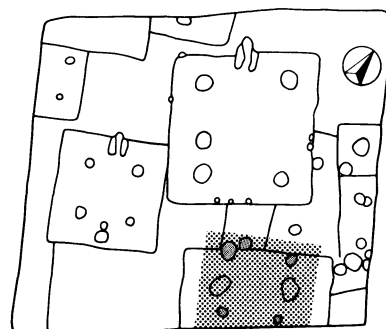
本跡はY 8—09・14グリッドを主に位置している。調査区の南東側にわたる本跡の周辺は重複関係が最も著しいところでもある。当初514号跡の調査を目的に精査を開始したのであるが、良好に踏み固められた床面が検出されたためそれを広げてみた。その結果、堅緻な面の広がり

は5m×4.8mの方形の範囲をもつことが明らかになった。さらに検討を加えて調査を進めてみたところ、この床面は514号跡の上に貼床を施して構築された、514号跡とは別のもう1軒のものであることがわかった。したがって本跡は514号跡より新しい構築になると断定できた。また、508号跡との切り合い関係では514号跡の方が新しく、514号跡は510号跡も切っているため本跡が一番新しい遺構となる。しかし残念なことに、セクションの観察、床面や壁溝の遺存の追求を慎重に試みたにもかかわらず、壁面を検出することはできなかった。柱穴はP₁₆～P₁₉が検出された。柱間はP₁₆—P₁₇3.0m、P₁₇—P₁₈3.0m、P₁₈—P₁₉3.0m、P₁₉—P₁₆3.3mである。この柱穴の配置などから本跡の規模を推定すると、一辺が5.6m程となる。次に各柱穴の掘り方を示しておきたい。P₁₆は上端での直径は45cmあり、下端で径25cmになり深さは31cmを測る。P₁₇は深さ36cmを測るが、掘り込み部分はほかのピットに切られている。P₁₈は円筒形に近い断面形態で深さは34cmである。P₁₉は楕円形の掘り込みから35cmの深さで底に達する。それぞれの深さはおおよそ近い数値を示している。P₂₀は隅をもつような径60cm、深さ25cmを測るピットである。このピットの右側は山砂が流れ出した様子がみられ、火床と思われる部分も存在しているため、カマドの構築場所であったことが窺われる。そうした位置関係などからP₂₀は貯蔵穴として考えられる。なおカマドについては、周辺に攪乱が入るため大きく壊されており詳細については不明である。

本跡に伴う出土遺物は、良好な状態で検出された床面上から出土したものが該当していると考えられる。しかし、そうした遺物は極めて少なく、図示可能となったのは鉢1点と土玉が1点、それに鉄器が2点あるにすぎない。(出土遺物は46ページ)

510号跡

調査区の東側で検出した住居跡である。509号跡同様ここでも住居跡が幾重にも重なって検出されている。本跡は506号跡はじめ、509・511～514号跡と複雑な重複関係にある。総合的な所見から、新旧関係については513号跡よりは新しくほかの住居跡よりは古いということがわかった。壁は北壁と西壁がそれぞれ一部分遺存しているだけである。北壁の遺存するところは壁高16cmを測り、壁下に溝が検出されている。幅は20cmと狭く深さも5cmと



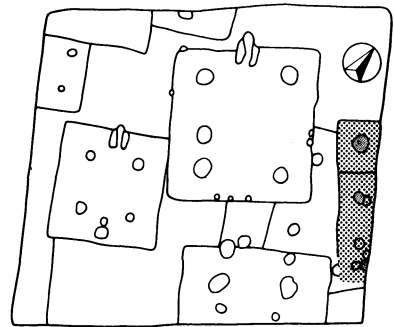
II 遺 構

浅いものである。検出面からの掘り込みは決して深くはないが、立ち上がりはほぼ垂直になっている。西壁はN—20°—Wの方向で伸びるようで、床面までの壁高は28cmを測る。壁溝は北壁と異なり掘られていない。また、513号跡より本跡の方が新しいので、南壁下に壁溝が掘られていたならば検出されたはずである。ところが壁溝らしき跡は認められていないので、南壁には溝が設けられていなかったと考えられる。柱穴はP₂₁～P₂₃の3カ所に検出した。柱の間隔はP₂₁—P₂₂4m、P₂₂—P₂₃4.2m程である。北壁とP₂₃との間が約1.5mであることから一辺7m前後の規模を有していたものと推測される。P₂₁については半分が調査できたにとどまる。ほかの2カ所の柱穴は、径60cmの掘り込みから下端では径20cmとすぼまり、どちらも深さは床面から約80cmを測る。床面は大変よく踏み込まれた状態を残し平坦に構築されている。ただP₂₂の周辺にのみやや軟弱となる部分が認められる。

覆土はローム粒と少量のロームブロックを含んだ暗褐色土層の単一層である。遺物は遺構の残りも僅かなため多くはない。土器では土師器の杯、小形鉢、甕が出土しており、甕は復元の結果ほぼ完形となった。ほかには土製品で勾玉と土玉が検出された。(出土遺物は46ページ)

511号跡

調査区の東側に検出された住居跡である。510・512・513号跡と切り合い関係にある。510・513号跡との新旧は510号跡のところで述べたとおり、本跡より古い時期の所産と断定できた。また、512号跡の床面は本跡の床面を剝がすことによって検出することができた。したがってこの切り合い関係のなかでは最も新しい段階に比定されることになる。北西の隅が検出されており、北壁の一部と西壁の一部が遺存している。西壁は途中から512号と同じ



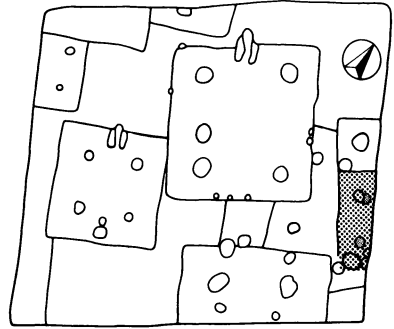
ような方向を向いており、南側では全く重複しているのか、壁を検出することができなかった。壁高についてはコーナー近辺で17cmを測る。壁溝は認められず、全体にゆるやかに傾斜しながら立ち上がる。柱穴は506号跡と同じように西側に3カ所検出された。P₂₄～P₂₆である。P₂₄とP₂₆の間が6.1mでP₂₆から北壁までが約1mであることから、一辺8m前後の規模になることが一応考えられる。P₂₅はP₂₄とP₂₆の中間よりややP₂₆寄り、その間は2.8mとなっている。床面は512号跡の上に貼床を施して設けられている。調査区域の東端ではよく踏み込まれた良好な状態をとどめているが、壁の検出されなかった南東側になるにつれて軟らかになってくる。

覆土はローム粒を僅かに含んだ黒褐色土層の単一層である。512号跡の上は、この土にローム粒を霜降り状に含んだ土により貼床を行なっている。遺物は覆土上面で破片が出土しているが、

床面に接して出土した遺物を重視すると図示可能であったのは土師器の杯2点と、土玉が2点であり、また耳環1点が出土している。(出土遺物は48ページ)

512号跡 (図版6)

本跡は511号跡の南で、方向をほぼ同じくして検出された住居跡である。510・511号跡との切り合い関係についてはすでにその住居跡の説明で述べたとおりであり、また513号跡を切って構築されている。それを整理すると、513→510→本跡→511号跡ということになる。壁は北と西にそれぞれ一部分検出されている。北壁は511号跡の北壁と平行し、西壁は511号跡の壁をちょうど共有しているような形となっている。南壁についてはその壁面を捉える

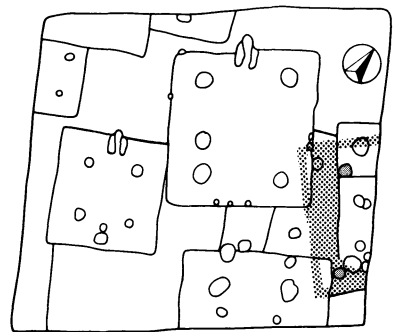


ことができず、遺存する壁下にも壁溝は検出されなかった。床面は511号跡の床面から5cm低い位置で設定されているので、この5cmが511号跡の貼床の厚さとなる。柱穴はP₂₇とP₂₈の2カ所に検出した。P₂₇は上端の直径50cmで深さは60cmを測り、下端は径30cmの円形となっている。P₂₈は511号跡の柱穴に切られているが、深さ55cmを測ることができる。この柱間は2.2mである。P₂₈から北壁まで1.1mあるので、一辺4.4mの規模が想定される。床面は比較的平坦で固い面を残している。

出土遺物は僅かであり、土師器の杯と土玉をそれぞれ1点ずつ図示できたにとどまる。(出土遺物は48ページ)

513号跡

本跡は調査区の南東コーナー付近で、壁と床面の一部を検出したにすぎない。一連の切り合い関係のなかでは最も古い住居跡と考えられる。遺存する壁の壁高は33cmを測り、やや傾斜して立ち上がっている。この壁下には幅約15cmで深さ3cmの浅い壁溝が伴っている。残り具合は良好である。柱穴はP₂₉とP₃₀が考えられるが確証を得ることができない。そのため規模を想定する根拠を全く見出せなかった。床面は掘立柱建物跡の柱穴などにより



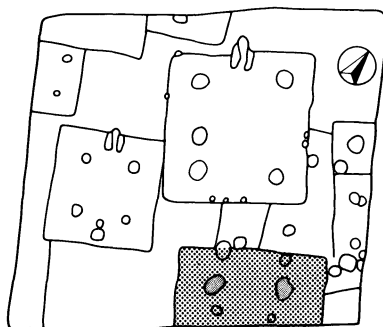
大部破壊されている。それでも僅かに残っている床面には固く踏み込まれた様子が認められる。また、本跡の床面は510号跡の床面からは約4cm低い位置で設定されていたと考えられる。

II 遺 構

出土遺物は図示した3点がすべてである。(出土遺物は48ページ)

514号跡 (図版6)

本跡は調査区の南側に位置し、509号跡の床面を剥がした後に検出された住居跡である。508・513号跡とも切り合い関係にあり、どちらも本跡が切っている。北壁は全部捉えることができ、東壁と西壁もそれぞれ半分近くを検出した。また東壁が調査区外へ伸びるところで、断面及び壁にかろうじてカマドの左袖の一部分が掛かった。ここから西壁とを垂直に結ぶ主軸はN-55°-Eの方向に傾く。拡張区内に検出されカマドの位置が明らか



なので、東壁にカマドを設けているのは本跡1軒のみである。主軸と平行する北壁は直線的に伸び、両隅は直角にきれいに曲がり、東・西壁とも真直に伸びている。また遺存する壁はほぼ垂直な立ち上がりを見せている。北壁の長さが7.7mであるから規模については推測が可能である。検出面から床面までの深さは約20cmと浅めである。壁溝は25cm内外の幅で、深さ5cm弱の浅いUの字形のものであるが全体にめぐっている。柱穴はP₃₁とP₃₂の2カ所に検出された。P₃₁は長径110cm、短径80cmの掘り込みから底面では径20cmの円形になり、かなりすぼまった掘り方となっている。深さは52cmを測る。P₃₂は二つのピットの重複も考えられ、掘り込み面での上端はかなり不整である。深さは72cmとP₃₁より深く底面は直径20cmと小さくなる。柱間は2mを測る。床面は精査した13軒の住居跡のうち最も固い状態を呈していた。

遺物は509号跡の下から出土したものを本跡出土の遺物として取り扱ったが多くはない。土師器の杯、高杯、鉢、小型甕の土器類がそれぞれ1点と、鉄器が1点図示できたにとどまる。(出土遺物は49ページ)

掘立柱建物跡 (第10図)

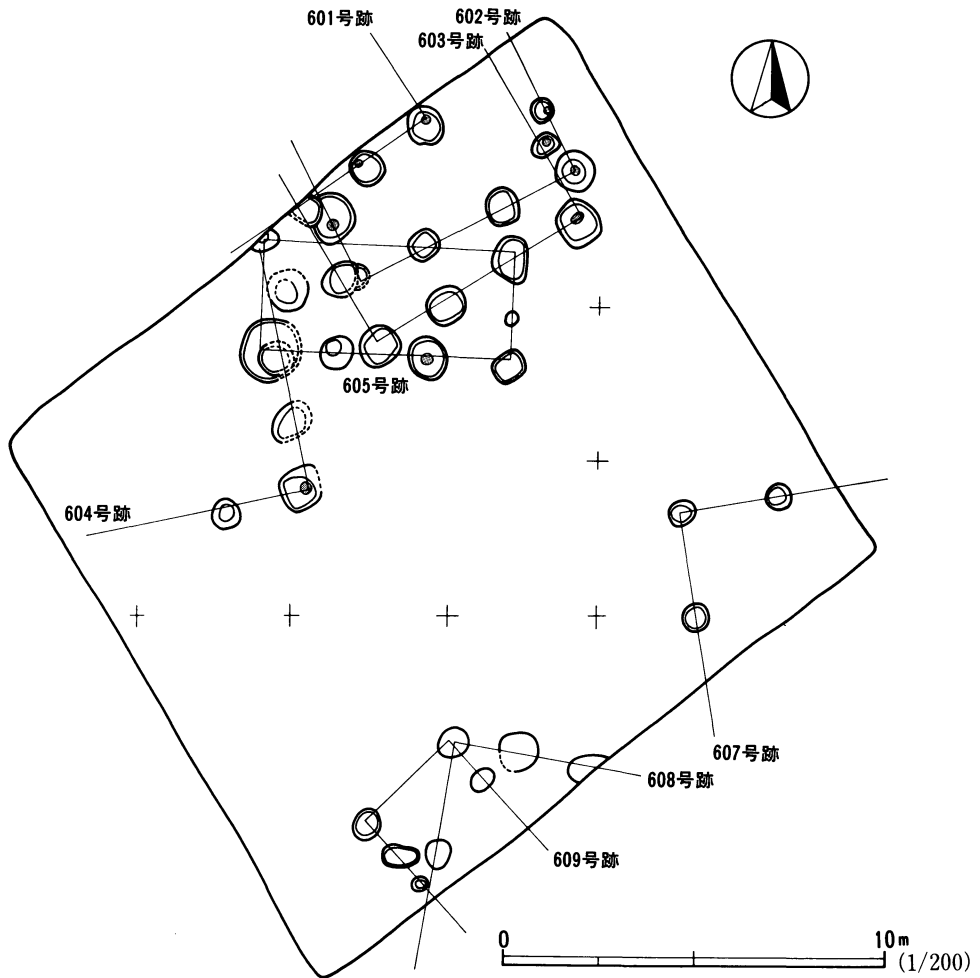
B地点で検出した掘立柱建物跡は8棟である。調査時において606号跡としたものは、509号跡に伴う柱穴であることが明らかになったため欠番とした。8棟のうちその規模が判明しているのは605号跡1棟である。このほかについては全容を知り得ていない。また、調査区の中央部でも柱穴と思われるピットが多数存在している。しかしそれらは柱筋などから考えて建物の柱穴と断定するに至らなかったもので、棟数については8棟以上になると考えてよいと思われる。8棟についてもすべてが同時期に建てられていたものではなく、何回かの建て替えの結果であることは一目瞭然である。特に調査区の北側では5棟が重複して検出されている。全体の傾向

としては、大畑 I で検出されたような規模の大きな建物は認められず、柱穴の平面形も幾分小さくなっている。

調査は、それぞれの柱穴については平面で新・旧を確認し、10cm程掘り下げて柱痕の有無を確認した。柱穴の調査はそこまでをすべてについて実施し、半截して断面を観察し、さらに掘り方を明らかにするという調査を行なうことにしたが、これは全部には実施できなかった。

掘立柱建物跡の各1棟ごとの説明については、前に述べてあるとおり平面模式図に拠りたい。柱穴の呼称については、便宜的に平面模式図の右側の一番上に位置する柱穴をP₁とし、以下時計回りにP₂・P₃……P₆としたい。

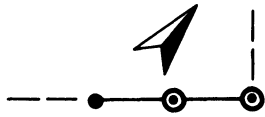
◎掘立柱建物跡の平面模式図の記号は、●・●=柱穴、◎=柱痕の確認された柱穴とした。



第10図 B地点掘立柱建物跡配置図

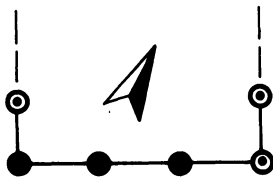
II 遺 構

601号跡

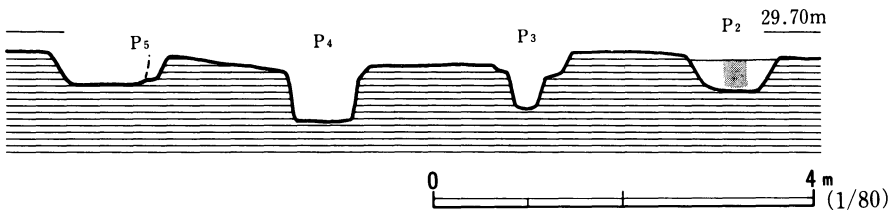


調査区の北側に位置する。検出した柱穴は3カ所のみで建物の規模は不明である。602～605号跡と重複関係がある。603号跡の柱穴を本跡のP₃が切っているため603号跡よりは新しいということがわかった。そのほかの建物との新・旧関係は明らかにし得ない。P₁、P₂の掘り方は円形の平面形を有し、径はP₁が100cm、P₂が90cmを測る。深さはP₁が40cmでP₂は大変浅く15cm程である。P₃は25cmの深さがあるが、住居跡との重複によって掘り方の平面形ははっきりと捉えられない。柱痕はP₁とP₂に確認され、両方ともその径は25cm内外を測る。柱間は2.1mの等間隔である。P₁からP₃をとる線の方法はN—55°—Eに傾く。

602号跡

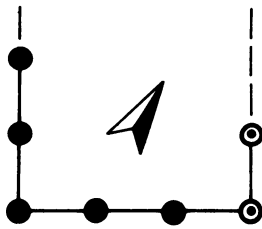


調査区の北側で601号跡の南に位置している。南側で3間、東・西でそれぞれ1間ずつを検出した。調査区の外へ伸びていることは確実に全体の規模は確定できない。601・603・605号跡と重複し、新・旧関係は柱穴の切り合いから601・603号跡より古いことは明らかである。605号跡との関係については検討を必要とする。P₁、P₂、P₆で柱痕が確認され、またP₃に据え方が存在しているのでそこから柱の位置を決めると、P₂—P₅は6.3mで柱間は2.1mで等間隔になっている。東側のP₁とP₂の柱間は1.7m、西側のP₅とP₆の柱間は1.6mである。掘り方の平面形はほぼ円形を呈する。しかしその径と深さにはばらつきがみられ、P₁の径が55cmと最も小さくP₆の130cmが最大となっている。深さは第11図にみるとおりP₄の掘り方が一番地山を深く掘り込んでいる。ただP₄は506号跡の床面上での平面形であるし、P₅は大部分が新しい柱穴によって破壊されているので本来の掘り方の平面形を完全な形では残していない。P₁、P₂、P₆の柱痕の径はP₁20cm、P₂25cm、P₆25cmをそれぞれ測る。



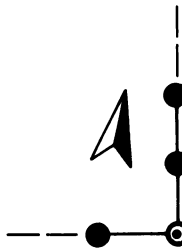
第11図 602号跡南側柱穴断面図

603号跡



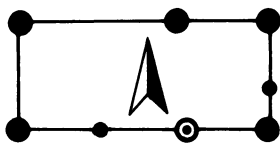
調査区の北側で601・602号跡の南に位置している。重複関係はこの北に検出されている2棟のほか605号跡ともあり、本跡はいずれよりも新しい段階の所産となる。南側で3間、その東側で1間、西側で2間を検出したので、柱穴は7カ所を数える。柱痕が確認できたのは、 P_1 と P_2 の2カ所でこのほかは不明である。柱痕を検出することができなかったものについては、その中央に柱が位置していたと考えると P_2 — P_5 の間隔は6.1mを測る。 P_2 — P_5 間のそれぞれの柱間については、 P_2 — P_3 ・ P_3 — P_4 の間が2.0mの等間隔になり、 P_4 — P_5 が2.1mである。また、 P_1 と P_2 の柱間は2.0m、西側の P_5 — P_6 は2.1m、 P_6 — P_7 2.0mの隔たりをそれぞれ測る。柱穴の平面形は P_1 と P_3 がやや不整な楕円形を呈し、 P_2 、 P_4 、 P_5 が僅かに隅をもつような円形で P_4 は円形となっている。検出面からの深さは P_1 ・ P_2 が20cmとなっているが、 P_3 — P_6 は住居跡との重複によって掘り込み面からの深さは不明である。この4カ所の底面のレベルは、あまり差がないようになっている。 P_1 と P_2 で検出された柱痕の径は約25cmである。

604号跡



調査区の北西側で601～603号跡の南西に位置している。605号跡と重複関係にある。605号跡の柱穴を本跡の P_1 が切っているため、新・旧関係は明らかである。柱穴は4カ所に検出され、東側に2間、南に1間を確認できたが全体の規模については確定できない。柱痕を確認し得たのは P_3 の1カ所だけである。柱穴の位置を掘り方の中央として考えると、それぞれの柱間は、 P_1 — P_2 ・ P_2 — P_3 が2.0mの等間隔で、 P_3 — P_4 が2.1mとなっている。住居跡との重複で掘り方の平面形が捉えづらいが、 P_1 及び P_4 は円形を呈していると思われ、 P_3 は僅かに隅のつく円形になる。 P_2 はやや不整な楕円形になると思われる。掘り方の検出面からの深さは、 P_2 ・ P_3 が約20cmを測り P_4 はそれよりはやや深く38cm前後となる。 P_3 に検出された柱痕の径は27cm内外の円形である。

605号跡

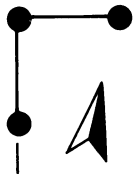


601～603号跡の南で604号跡の東に位置し、その4棟と重複関係を有している。この一連の切り合い関係のなかでは本跡が最も古い建物跡になると考えられる。また、B地点で検出した掘立柱建物跡で唯一全体の規模が明らかになったものである。柱の位置を掘り方の中央として考えると、桁行6.6m、梁行2.8mの規模となり、梁行の柱筋の方向はほぼ南—北を


II 遺 構

指している。柱間は P_1-P_2 1.7m、 P_2-P_3 1.1mで P_3 から P_6 の間は2.2mの等間隔である。 P_6-P_7 2.8m、 P_7-P_8 4.1m、 P_8-P_1 2.5mをそれぞれ測る。こうしてみると P_3 から P_6 は整った配置が認められるが、そのほかは柱間にかなりののぼらつきがある。ただ、 P_6 と P_7 の間及び P_7 と P_8 の間には柱穴が存在していた疑いもたれる。掘り方のなかで P_1 と P_8 については、それぞれ602・603号跡の柱穴と位置が重なるため当初の形をとどめていない可能性が大きい。 P_2 の掘り方の径は30cmとほかと比較して大変小さく、 $P_3\sim P_5$ は100cm内外の規模となっており、 P_6 は最も大きく160cmを測る。また、各掘り方底面のレベルもそれぞれ異なり比高を有する。 P_4 にのみ径30cmの円形を呈する柱痕を確認することができた。

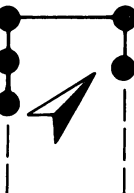
607号跡

 調査区の東に位置し、検出した周辺ではほかの掘立柱建物跡との重複は認められない。確認した柱穴は3カ所で、北西の1カ所から東に伸びる1間と、南に伸びる1間である。規模については全く知る術がない。南側で検出した柱穴を P_1 とすると P_1-P_2 の柱間は2.7mを測り、 P_2-P_3 が2.65mとなっている。掘り方の平面形は円形を呈し、径は65cm程度を測る。 P_3 には底径25cmとなる据え方が検出されているが、いずれからとも柱痕は確認されなかった。 $P_1\cdot P_2$ の底面のレベルはほぼ同じようなところで、 P_3 の据え方はそれより約60cmも深く掘られている。

608号跡

 調査区の南に位置し、609号跡と重複関係にあるが、新・旧関係については検討を必要とする。柱穴は4カ所に検出された。各柱穴の掘り方は明らかにしていないが、柱穴を埋める覆土には焼土とロームブロックが含まれるという共通の特色が認められる。掘り方の深さは浅いと考えられる。柱間は南に位置する P_1 から P_2 まで3mとやや間隔があり、間に柱穴が存在していた可能性を残す。 $P_2\sim P_4$ 間は1.7mと1.7mの等間隔である。

609号跡

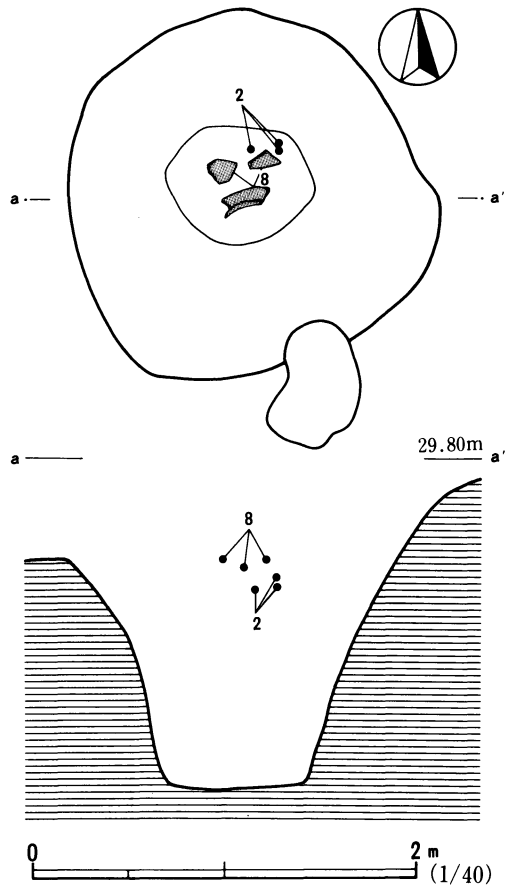
 調査区の南に位置し、先に述べた608号跡と重複する。柱穴は5カ所に検出されたが規模は不明である。柱間は不ぞろいで P_1-P_2 が1.3mで、 $P_3-P_4\cdot P_4-P_5$ が1.1m、 P_5-P_1 3mを測る。 P_1 は608号跡の P_2 と重複し、平面形は P_3 と P_5 が円形を呈し、 P_4 は不整な楕円形となっている。

土坑

B地点で検出した土坑は1基である。調査区の中央部に存在しているピットは掘立柱建物跡の柱穴とも考えられるのでここでは除外している。遺構番号はD501号跡とした。

D501号跡 (第12図、図版7)

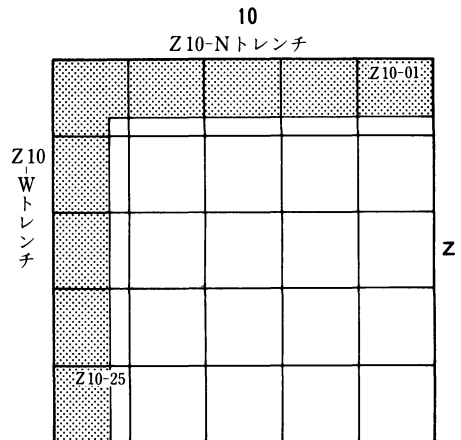
拡張区の西側に位置し、ちょうど調査区域の北西コーナー付近にあたる。2軒の住居跡(503・505号跡)と重複関係にあり、本跡はそのどちらをも切っている。平面形は径2mの円形で、検出面からの深さは1.6mを測る。底面は長径80cm短径65cmの不整な楕円形を呈し、比較的平坦になっている。掘り込みは東側で直線的に傾斜して底面に至り、西側では途中から急な角度で掘り込まれる。覆土は大きく2層に分かれ、遺物は上層に集中して出土した。性格は明らかでない。(出土遺物は50ページ)



第12図 D501号跡実測図

3 トレンチによる確認調査

確認調査は幅3mのトレンチをソフトローム層上面(第III層)まで掘り下げ、遺構の確認を行なった。面積は411m²である。調査対象範囲の拡張本調査部分と、作物の植っている範囲を除き、効果的なトレンチを設定して実施した。トレンチは基本的には大グリッドを基に第13図のように『形に設定した。また、トレンチの呼称については大グリッドの北側に東西に設定したものをNトレンチとし、同様に西側の南北を向く





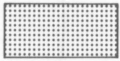


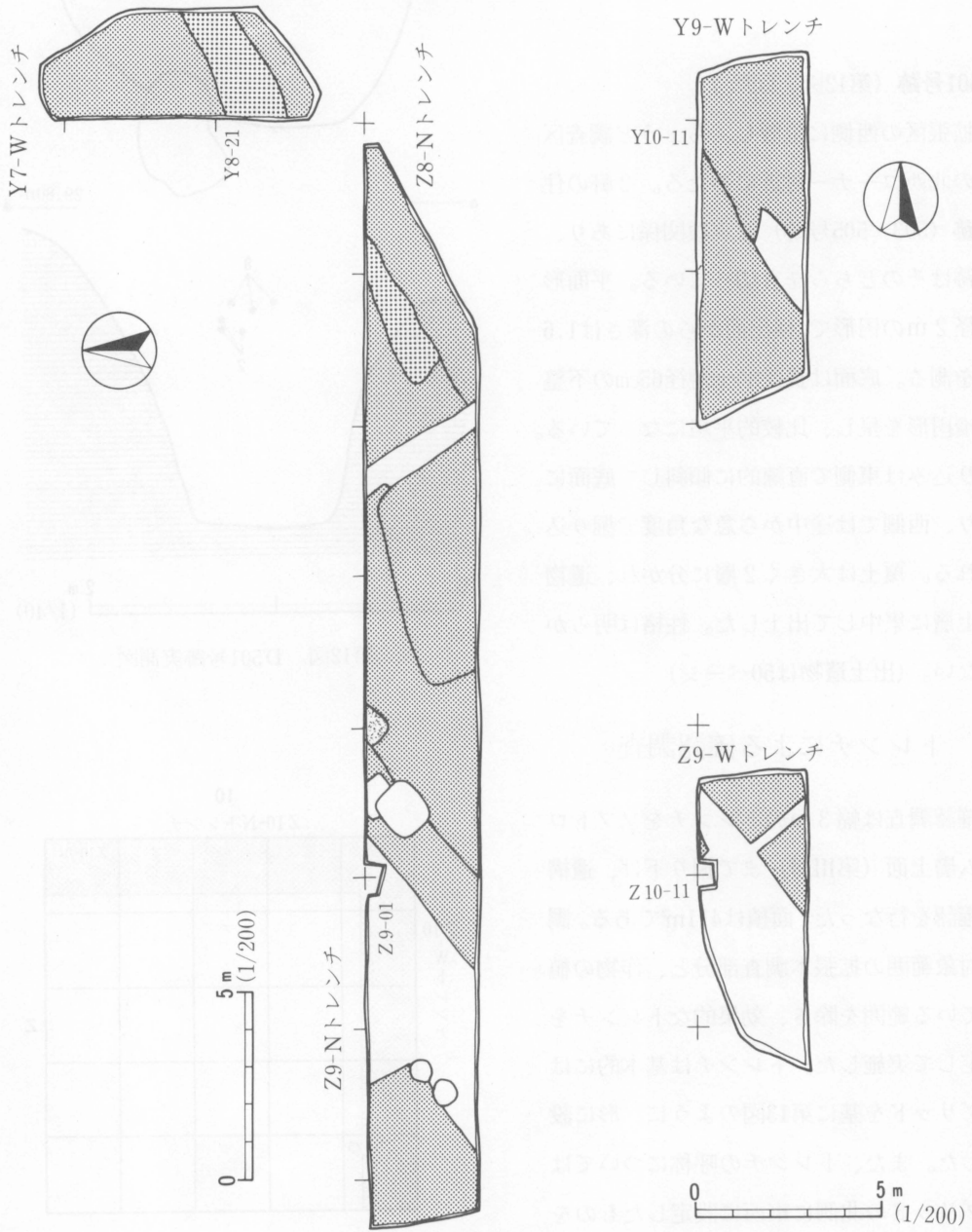
第13図 トレンチ設定図

II 遺 構

トレンチはWトレンチとした。

◎遺構確認状況図は下に示した凡例に拠る。

- | | | | | | | |
|--------|---|------|---|------|---|---------------|
| 凡
例 |  | 住居跡 |  | カマド |  | 掘立柱建物跡の柱穴及び土坑 |
| |  | 溝状遺構 |  | 道状遺構 | | |



第14図 遺構確認状況図 ①

Y 7—Wトレンチ、Z 8・9—Nトレンチ（第14図左、図版8）

Y 7—Wトレンチは南北に7mの範囲で確認を行なった。表土除去の結果ローム層面は検出できず、全面に遺構の覆土が確認された。検出面では大部分に真黒に近い覆土が広がり、トレンチの南側にはかなり固く踏み込まれた道状の面が南西方向に伸びているのが認められた。覆土に決定的な差は見出せなかったが、2軒の住居跡の重複が考えられる。

Z 8・9—NトレンチはB地点の南に設定されたトレンチである。Y 7—Wトレンチで検出した道状の固い部分はZ 8—Nトレンチにも表われていて、それが途中で切れていることがわかった。また、住居跡が多数存在しており、覆土の差やカマドの検出などから少なくとも7軒は確実に存在することが確認された。掘立柱建物跡の柱穴と考えられるピット2カ所をZ 8—05グリッドで検出した。これには新・旧関係が認められ、大形のピットが小形のピットを切っている。検出面での平面形は両方とも隅丸方形である。トレンチの範囲内では柱筋は明らかにし得ない。

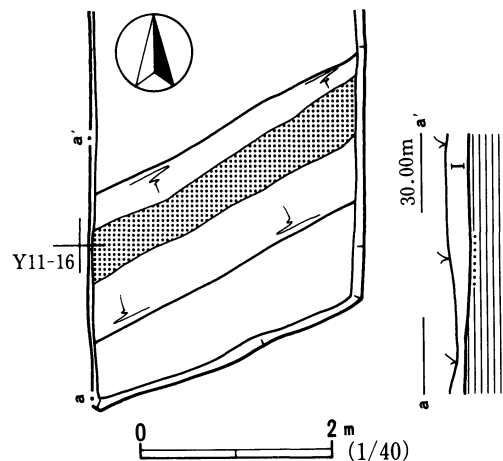
Y 9・Z 9—Wトレンチ（第14図右）

Y 9—WトレンチはB地点の西側に設定したトレンチである。ここも遺構が密集するようで、南北に10m強の範囲で3軒以上の住居跡が確認された。

Z 9—Wトレンチでは住居跡のコーナー部分が3カ所検出され、3軒の存在が明らかになった。1軒は南西の隅が確認され、その南には西壁の向きを同じくして別の住居跡の北西の隅が近接している。また、Z 10—11グリッドポイントの北にもう1軒の南東の隅が僅かに掛かっている。

Y 10—N・Wトレンチ（第15図、図版8）

調査対象区域の北側で、この辺はすでに斜面になるところである。Y 10—Nトレンチでは住居跡1軒と、性格の不明な小ピットが5カ所に検出された。ピットについては掘立柱建物跡の柱穴にはならないであろう。Y 10—Wトレンチにおいては住居跡1軒、小ピット2カ所、浅い溝状の遺構1条を検出した。この溝状の遺構というのは第15図に示したとおり検出面から5cmにも満たない深さである。これは斜面に検出されたためすでに掘り込み面が失われてしまった



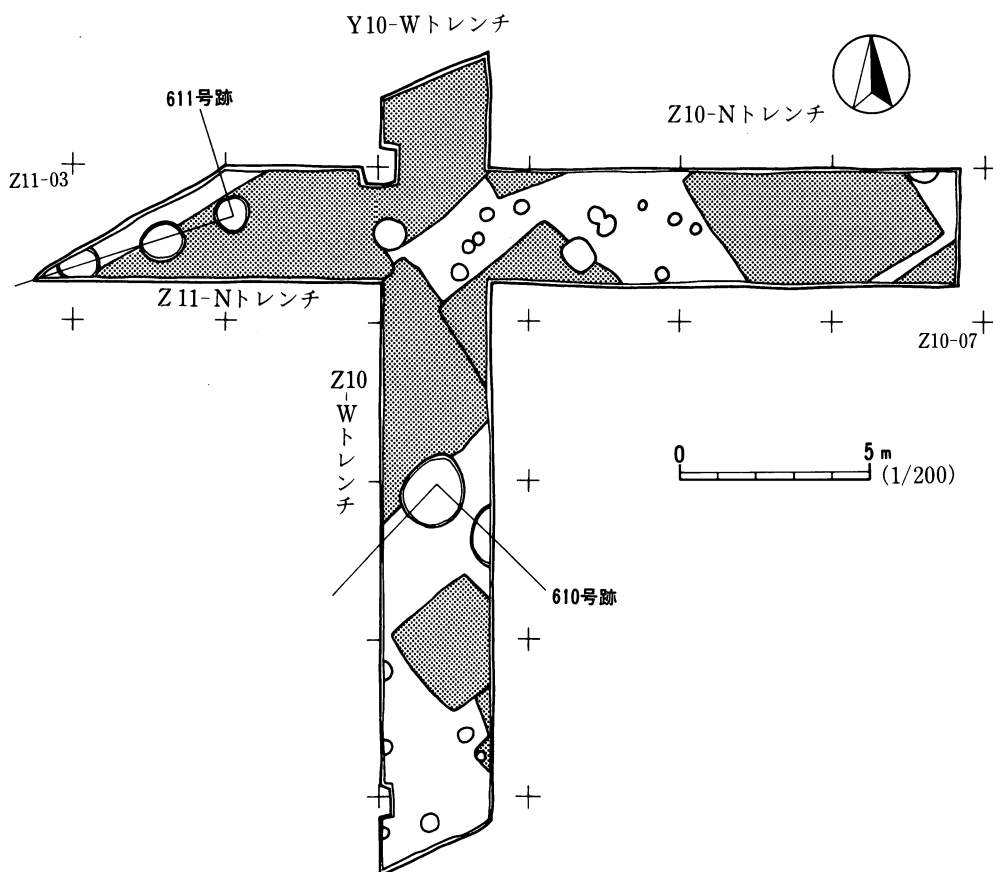
第15図 溝状遺構実測図

II 遺 構

結果浅くなっているとも解釈できる。底面は25cmの幅で大変固く、道のように踏み込まれた様子が認められる。

Z10・11—Nトレンチ、Z10—Wトレンチ（第16図、図版8・9）

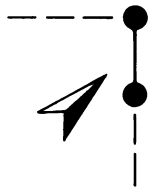
ここでも多数の遺構が検出された。その内訳は住居跡11軒以上、掘立柱建物跡2棟、ピット20基である。Z10—Nトレンチの東側では2軒の住居跡が確認されたが、そのうちの1軒は一辺の長さが5mの規模となる。Z10—Wトレンチでも規模がわかる住居が確認されたが、これは一辺2.5m程の小形のものである。検出面では遺物が出土していないので時期は明らかでないが、大畑I遺跡で検出した住居跡を含めて考えてもかなり小形の部類である。Z11—Nトレンチは広い範囲にわたって覆土の差が認めずらくなっている。ここは2軒以上重複していると考えてよいであろう。共通する覆土の観察などから掘立柱建物跡の柱穴と考えられるのは、ピットが多い割には少なく、Z10—Wトレンチの2カ所と、Z11—Nトレンチの3カ所の2棟分で



第16図 遺構確認状況図 ②

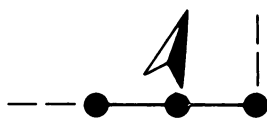
ある。この2棟の柱穴については10cm程掘り下げて柱痕の確認を行なった。下に模式図で示しておきたい。

610号跡



Z 10—15グリッドで検出した2カ所の柱穴である。この覆土はローム粒を含んだかなりしまりをもつ土で共通している。1間分だけの検出であるため規模は不明である。掘り方の直径が180cmとかなり大きな円形なので、建物の規模も大形であるかもしれない。いずれからも柱痕は検出されなかったので、掘り方の中央を柱の位置と考え、その柱間は2.1mを測る。

611号跡

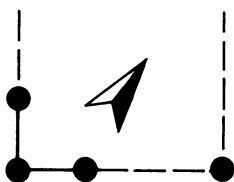


Z 11—Nトレンチで柱穴3カ所を検出のみであるため規模については確定できない。柱痕が確認されなかったので、掘り方の中央で柱間を想定すると2.1mの等間隔になっている。平面形は円形を呈し、径は100cm内外である。建物の方向はB地点の602号跡などと近いと思われる。

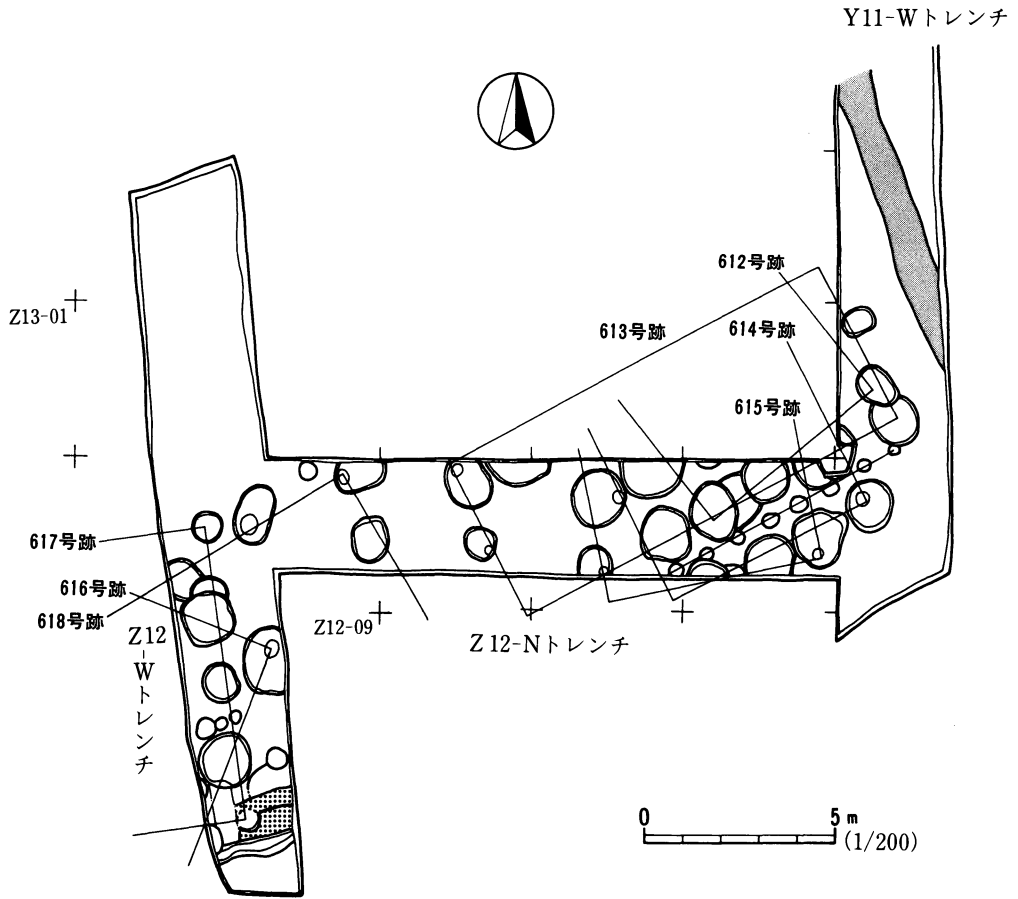
Y 11—Wトレンチ、Z 12—N・Wトレンチ（第17図、図版9）

調査対象区域の西側で設定したトレンチである。このトレンチ内では住居跡は検出されず、掘立柱建物跡が複雑に重複して存在していることが確認された。掘立柱建物跡以外の遺構では、Y 11—WトレンチでA地点の西側で検出した溝状遺構の続きが伸びていた。また、Z 12—Wトレンチには底面に固くしまりをもつ溝状遺構と、それに平行して道状の遺構が検出されている。掘立柱建物跡の切り合い関係は極めて複雑な様相を示し、同一建物の柱穴を確定するにはかなり苦労を強いられた。覆土などを詳細に検討し、平面で観察できる切り合いなどから東側で4棟、西側で3棟がそれぞれ重複していることがわかった。しかし、トレンチでの検討であるので将来の本調査の結果によっては変更があるかもしれない状況である。以下確認した7棟は平面模式で示したい。

612号跡



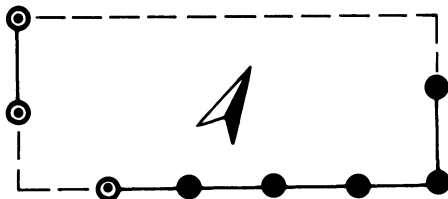
本跡は4軒の重複する掘立柱建物跡のなかでは最も北側に位置している。613号跡の柱穴を切って建てられているが、614・615跡との新・旧関係は限られた調査範囲では決ずしも明らかな状況とはなっていない。柱穴は4カ所に検出されている。南側で3間の規模を有することは確定できたが、南北方向には1間を確定したにとどまる。柱筋などから柱の位置を想定する



第17図 遺構確認状況図 ③

と、南側の P_1 から P_3 までの間隔が5.4mとなり、 P_2 と P_3 の柱間が1.8mであるから1.8mの等間隔の配置が考えられる。 P_3 — P_4 の柱間も1.8mを測る。柱穴の平面形は P_1 が長径115cm、短径約85cmの楕円形で、 P_2 ・ P_3 が径130cmの円形を呈する。

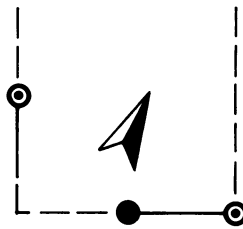
613号跡



本跡は612号跡の南で、614・615号跡より北側に位置している。柱穴は8カ所に検出され、桁行総長11m、梁行4.4mの5間×2間(あるいは3間か)の規模になることが想定される。ただ梁行については確定し難いところもあり、これより大きな規模を有することも考えられる。柱間は、 P_1 — P_2 が2.5m、 P_2 から P_6 が2.2mの等間隔で、 P_7 — P_8 は2.4mを測る。各柱穴の覆土はロームブロックとローム粒を霜降状に含んだ暗褐色土である。掘り方の平面

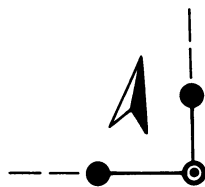
形は P_1 が $85\text{cm} \times 65\text{cm}$ の楕円形で、 P_2 から P_8 は円形を呈しその径は P_7 の 90cm から P_5 の 140cm の範囲で大小がある。柱痕は $P_6 \sim P_8$ に確認されており、その径はいずれも 35cm 程である。

614号跡



612・613号跡の南に位置し、615号跡よりはおそらく古くなるであろうと考えられるものである。柱穴は南側で2カ所、西側で1カ所の合計3カ所に確認されたにすぎない。したがって規模については知ることができない。柱痕は P_1 と P_3 に確認されている。柱間を考えるには多少無理があるかもしれないが、 P_1 と P_2 の間は 2.85m を測り、 P_1-P_2 を延長する線と P_3 から南に伸ばした線が垂直に交わる点と P_3 との間隔は 3m となる。 P_1 と P_2 の間に柱穴が存在していたことは十分予想されることであるが、これは615号跡の柱穴に完全に切られてしまっていると考えられる。柱穴の平面形は円形で径は 130cm 内外と大形である。

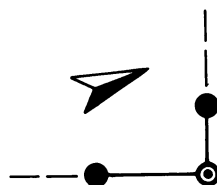
615号跡



4棟の切り合い関係のなかでは一番南に位置する。柱穴は3カ所確認し得たのみである。規模は不明。 P_2 には径 30cm の柱痕が確認されているが、もう2カ所はこれを検出することができなかった。柱間は P_1-P_2 が 2.1m 、 P_2-P_3 が 2.1m である。柱穴の平面形は円形で径は 140cm 程である。

柱穴列 613号跡の南側で、613号跡の桁行方向と平行して8個のピットが一行に検出されている。いずれも円形を呈し、直径が $30 \sim 40\text{cm}$ のものである。各柱穴の間隔は約 90cm の等間隔になっている。覆土はローム粒を含んだしまりの弱い土で、613号跡の柱穴の埋土とは異なるものである。613号跡と全く方向を同じくしていることから考えれば、建物との関係は強いと考えざるを得ない。しかし、庇とすると柱間や覆土から問題があり、また建築時に設けた足場の跡とも考えられるが、いずれにせよはっきりとした根拠を欠く。

616号跡

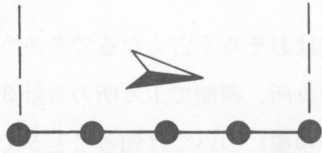


Z12-Wトレンチで確認され、617・618号跡と重複する。本跡の柱穴が617号跡の柱穴を切って、さらに617号跡の柱穴が618号跡の柱穴を切っているのも、本跡が一番新しいとわかった。柱穴は3カ所に検出したのみである。柱痕は P_1 に確認され、 P_1-P_2 の柱間が 3m と大変長く、 P_2-P_3 が 1.8m を測る。平面は P_1 が径 170cm 近くの円形を呈し、 P_2 も径が 140cm

II 遺 構

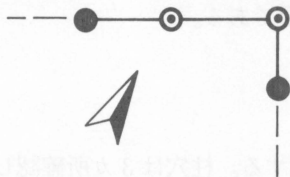
の円形である。P₃は130cmの径を測るが僅かに隅が付くような形となる。

617号跡



調査対象区域のなかでは最も西に位置している。3棟の切り合い関係の中段階になる。柱穴は5カ所4間が確認された。建物の中心はこれより西方になるので、この柱筋は建物の東側となる。P₁からP₅までの長さは7.6mを測り、P₄が616号跡の柱穴と重なっているが柱間は1.9mの等間隔である。掘り方の平面形は円形で、径は80~100cmである。柱痕はいずれからも確認されなかった。

618号跡

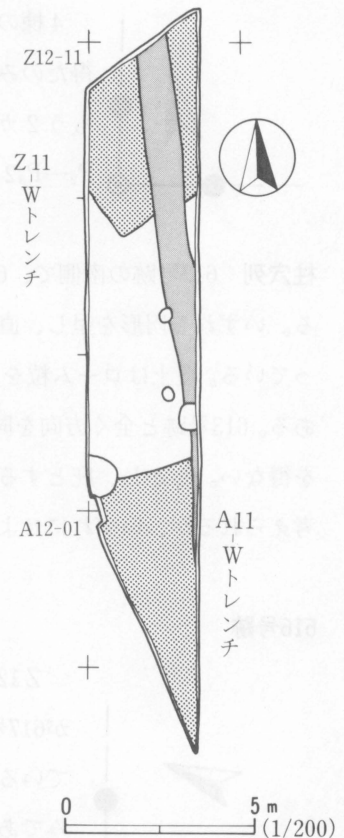


613号跡の西側に位置し、616・617号跡との一連の重複関係のなかでは一番古い段階になる。柱穴は東で1間、西に2間の合計4カ所に検出された。柱痕はP₁とP₄に確認されている。柱間はP₁—P₂1.8m、P₁—P₄2.8m、P₄—P₃

2.3mである。掘り方の平面形はP₂が径110cmの円形で、ほかの3カ所は不整な楕円形を示している。柱痕の径はP₁25cm、P₄約40cmである。

Z11・A11—Wトレンチ (第18図、図版8)

ここでは2軒の住居跡と溝状遺構1条、それにピット4基を確認した。この北側では数多くの掘立柱建物跡が存在していたが、そうした様子はみられない。溝状遺構は幅1m弱で南北方向に伸びている。北側のトレンチでは検出されなかったので、端部なりコーナーがこれより僅かに北で検出できるはずである。住居跡との新・旧関係はサブトレンチを設定して行ない、溝が住居跡を切っているのを確認した。北側の住居跡は検出面から約50cmの深さに床面が設けられており、固く踏み込まれた様子をとどめていた。ピットの性格は断定できない。

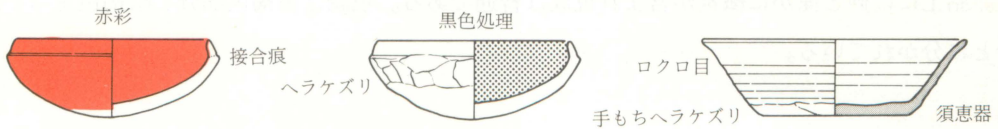


第18図 遺構確認状況図 ④

III 遺物

出土遺物については住居跡、土坑、グリッド・トレンチと出土状況によって説明を進めることとしたい。グリッド及びトレンチから出土した遺物のなかには、住居跡の検出面、あるいは覆土から出土し、その住居跡に伴う可能性が少ないものを含めて取り扱っている。

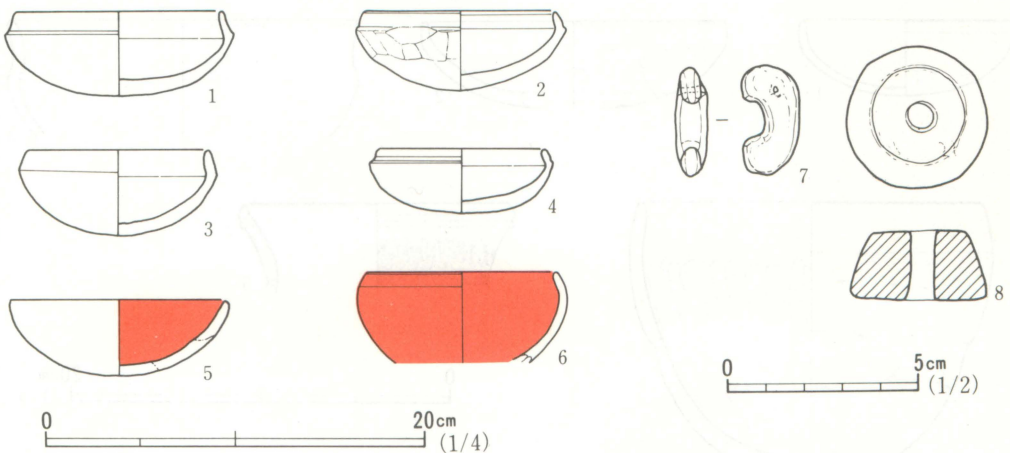
◎土器実測図の凡例を下記に示しておきたい。



1 住居跡から出土した遺物

501号跡出土遺物 (第19図、図版10)

土器 1～5は土師器の杯である。1～4は丸底で、口縁部と体部との境に外側に張り出す稜を設けて、口縁部を内傾させながら立ち上がらせるものである。2・4の稜は強く張り出し、3はそれほどでもない。体部は1・4が割に大きくゆるやかに開いており、2・3は半球状に丸味をもつ。口唇端部はいずれも丸く終わっている。口径は1の10.8cmが最も大きく、4では8.8cmしかないので概して小振りである。胎土には細砂粒が含まれ、そのほかには2・3に雲母が目立つ。外面体部の調整はヘラケズリの後軽いミガキを施して仕上げているが、2にはヘラケズリ痕が残っている。内面及び口縁部はナデかミガキが施される。5は稜を設けなくて全体に丸味をもって立ち上がる杯である。外面はヘラケズリの後ナデ調整し、内面は全面に赤彩が



第19図 501号跡出土遺物実測図

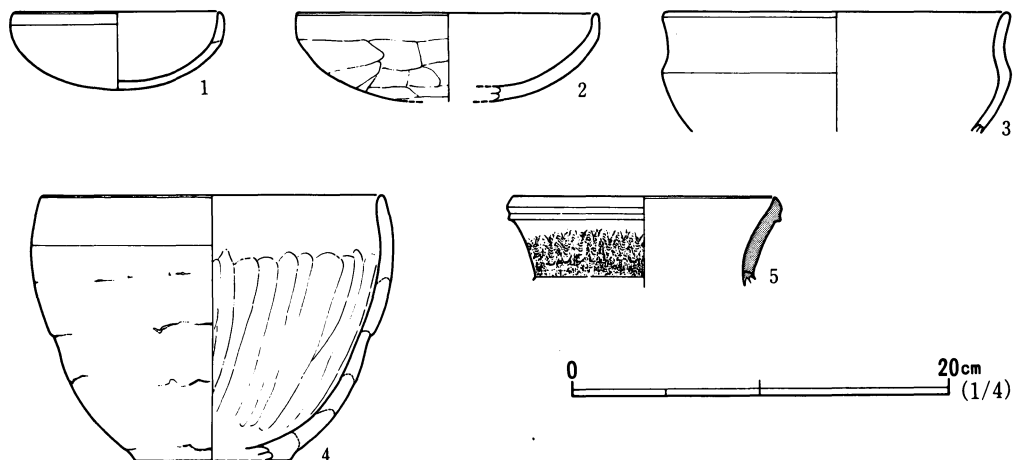
III 遺物

施される。6は鉢あるいは碗形を呈し、器面は最終的にナデで調整され外内面に赤彩を施す。

土製品 7は土製勾玉で完存している。形は「コ」の字形に整えられ、長さ19.8mm、幅15.8mmを測り、中央部での断面長径は9.2mm、同じく短径は8.1mmである。穿孔は片側から焼成前に行なわれている。胎土は精選されており目立った混和物は含まれていない。調整はナデを主とし焼成は比較的良好である。色調は黄褐色を呈す。7は紡錘車で完形で出土している。上面径約26mm、下面径45mm、厚さ17.3mmを計測する。孔は焼成前に両側から穿たれて、孔径は5.7mmである。胎土には砂と僅かに繊維が含まれ焼成は普通である。色調は黒褐色部分と暗褐色を示す部分とに分かれている。

503号跡出土遺物（第20図、図版10）

土器 土師器3点と須恵器1点が図示可能となった。いずれも遺存度は低く完形品は含まれていない。1・2は丸底を呈する杯である。体部と口縁部との境には退化した弱い稜が認められ、口縁部はつまみ上げられるようにして立ち上がる。外面体部の調整は1が細かいヘラケズリの上に軽いミガキを施し、2は幅の広がるヘラケズリを行なった後に荒いミガキで仕上げている。2のヘラケズリの方向は右から左であったことが観察される。内面は1が丁寧さを欠くナデで、2にはヘラミガキが施される。1は胎土に砂を含み2には雲母がみられ、焼成は普通。3・4は鉢であろう。3は体部と口縁部との境に稜を作り出し、口縁部はゆるやかに外反している。体部は丸味を有することが遺存部から察せられる。外面口縁部を除き最終的な調整はヘラミガキである。4は雑な作りで、粘土紐を積み上げた際の接合が十分でなく、その痕跡を残している。体部は全体にゆるやかに内彎しながら立ち上がる。調整は外面が荒いナデ、内面には縦方向のヘラナデが行なわれている。5は須恵器の甕の口縁部である。胎土は緻密で大変固

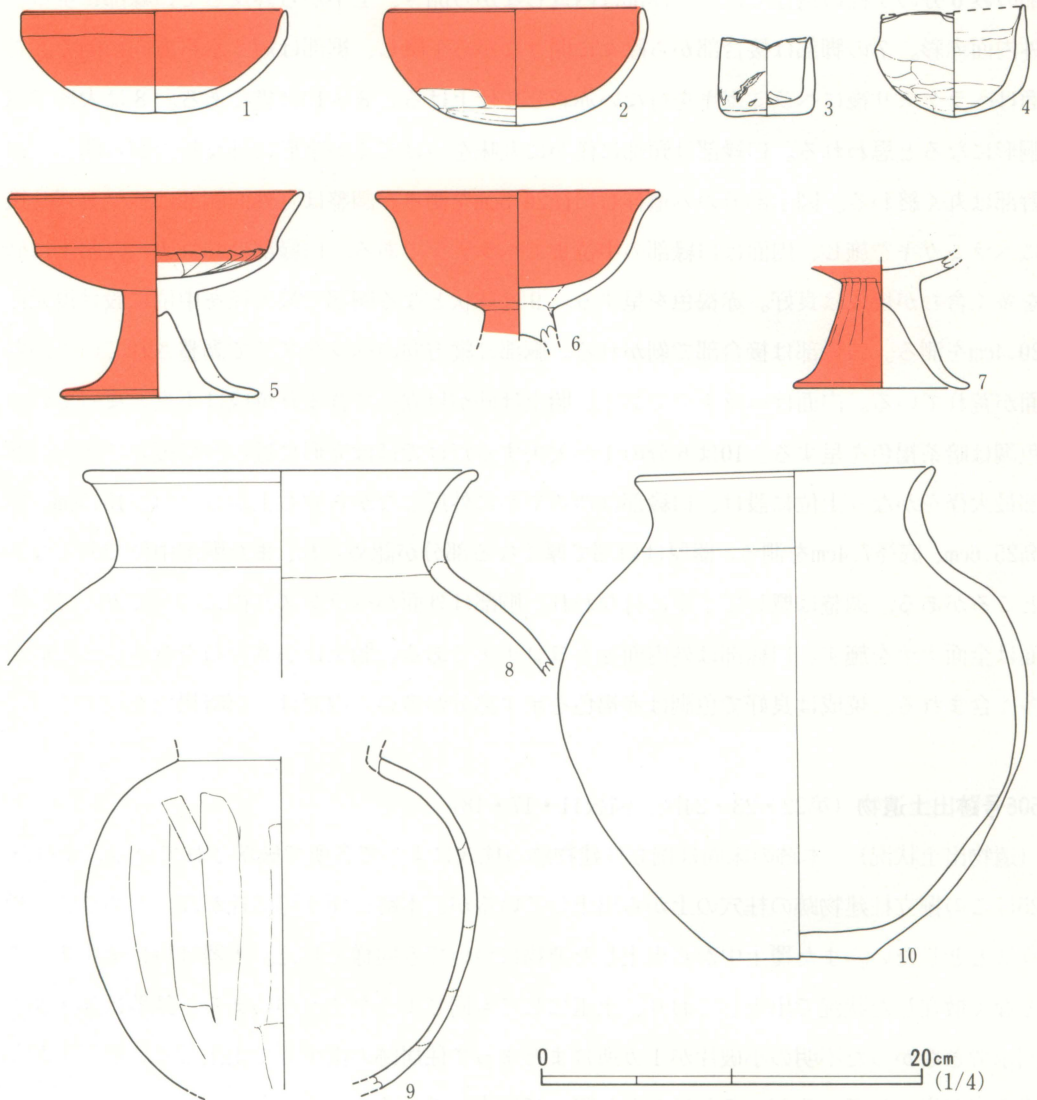


第20図 503号跡出土遺物実測図

い焼成となっている。頸部から口縁部の中位で櫛描きの波状文が一周すると考えられる。色調は外面暗灰色、内面灰色である。

505号跡出土遺物 (第21図、図版10)

土器 1・2は外内面に赤彩の施された杯である。1は全体の4分の1程の遺存で、復元口径13.7cmを測る。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に稜をもち、口縁部は直立する。調整は外内面ともナデである。2はほぼ完形で、体部は全体に内湾する半球状に作られる。外面体部下半はヘラケズリのままで、上半分はヘラケズリの後にナデを行ない赤彩している。内



第21図 505号跡出土遺物実測図

III 遺物

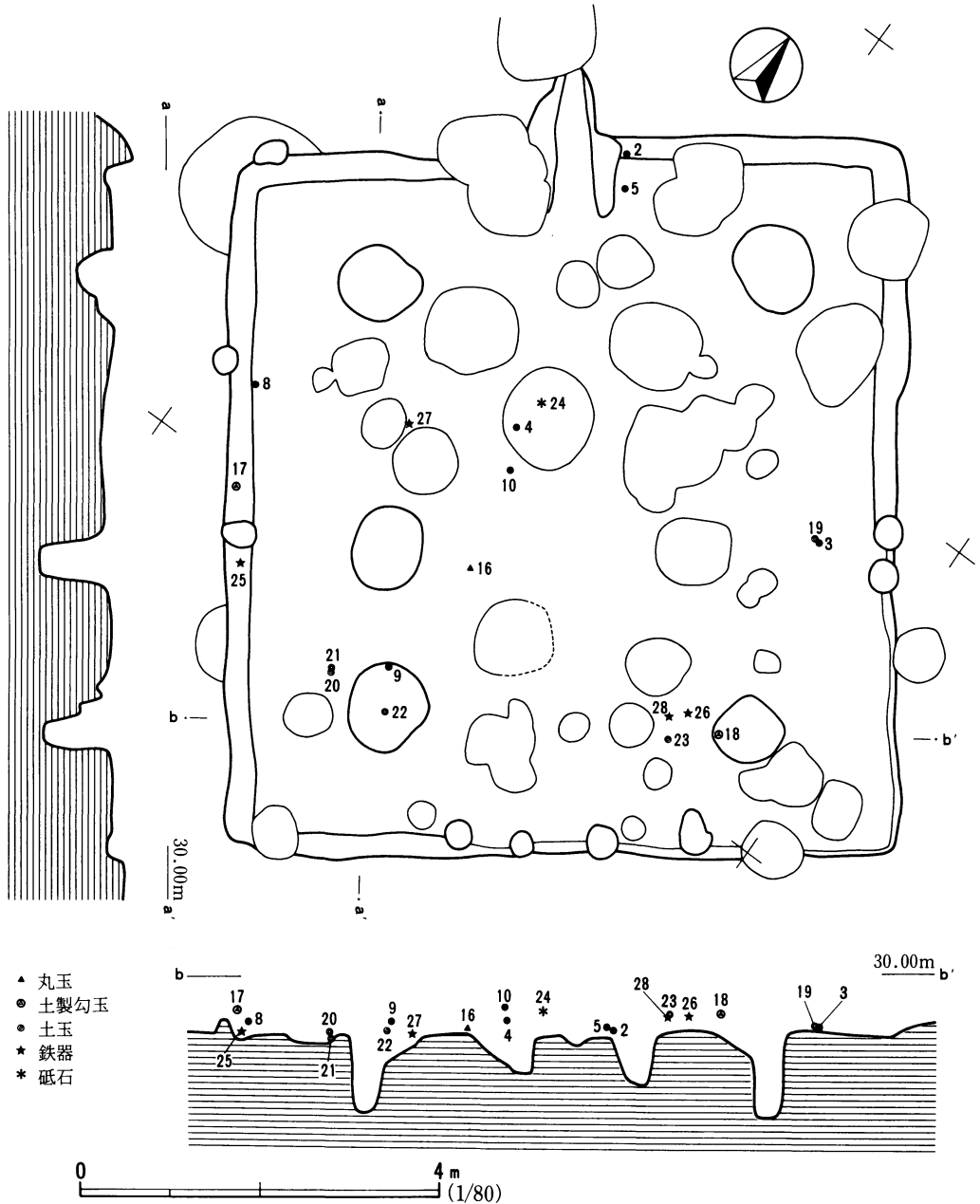
面は全面にナデ調整。口径13.3cmで、器高はやや深めで5.9cmを測る。胎土には砂が多く含まれ、焼成はやや不良である。4は雑な作りの杯である。体部は外内面とも大雑把なヘラケズリによって整形され、口縁部はナデが施される。3は小形手捏土器である。胎土には砂がやや多く含まれているが焼成は良好で赤褐色を呈する。2分の1の遺存。5～7は高杯である。杯部はその下部で口縁部との境の稜を作り出し、口縁部は長くゆるやかに外反する。脚部は接合部からゆるやかに開き、裾は水平方向に開いて安定する。外面はナデを主にした調整で、杯部内面は底部がヘラケズリで、口縁部はヨコナデの後ヘラミガキされる。外面全体と杯部では底部を除き赤彩が施される。胎土は砂・雲母を多く含みやや粗な状態で焼成は不良である。6は杯部のみ6分の1程の遺存である。体部は内彎しながら開き、上半から外反して口縁部に至る。外内面赤彩。7の脚部は接合部から徐々に開きながら下降し、裾部は短く水平方向に開く。外面はヘラケズリ後にヘラミガキを行ない赤彩して仕上げる。8～10は甕である。8は大形で球形になると思われる。口縁部は頸部に僅かに丸味をつけてくの字形に外反しながら開く。口唇部は丸く終わる。図示部分のみ遺存し口径20.5cmを測る。調整は、外面胴部はヘラケズリ後にヘラミガキを施し、内面は口縁部の中位までヘラナデである。口縁部はヨコナデ。胎土に砂を多く含むが焼成は良好。赤褐色を呈する。9は球状となる胴部で最大径を中位に設け復元径20.4cmを測る。口縁部は接合部で剥がれる。胴部は縦方向のヘラケズリで調整されているが器面が荒れている。内面はヘラナデである。胎土は砂が目立って含まれ焼成は不良となっている。色調は暗茶褐色を呈する。10は6分の1が欠失するだけでほぼ完形に近い形に復元できた。胴部最大径をかなり上位に設け、口縁部はゆるやかに外反しながら立ち上がる。口径15.5cm、器高25.6cm、底径7.4cmを測る。器厚は肩部で厚くなる部分が認められ、また胴部中位で薄くなる場所がある。調整は概して丁寧に行なわれ、胴部は外面がヘラケズリ後にヘラミガキで、内面は全面ナデを施す。口縁部は外内面ともヨコナデである。胎土は小さな石を含み、また砂が多く含まれる。焼成は良好で色調は赤褐色を示す部分が多い。内面は一部暗褐色を呈する。

506号跡出土遺物（第22・23・24図、図版11・17・18）

（遺物出土状況） 本跡の床面は掘立柱建物跡の柱穴によって各所で破壊されている。4・18・25はこの掘立柱建物跡の柱穴の上から出土しているが、本跡に伴う可能性が高いためここで扱うこととしたい。また覆土中から出土した遺物についても同様とした。土器は特に集中することなく散在した状況で出土しており、土玉にしても同じようなことがいえる。鉄器は26・28と図示できなかった不明の小破片が1カ所にまとまって住居跡の南東部で出土している。土製勾玉2点が出土しているが、これはかなり隔って出土している。

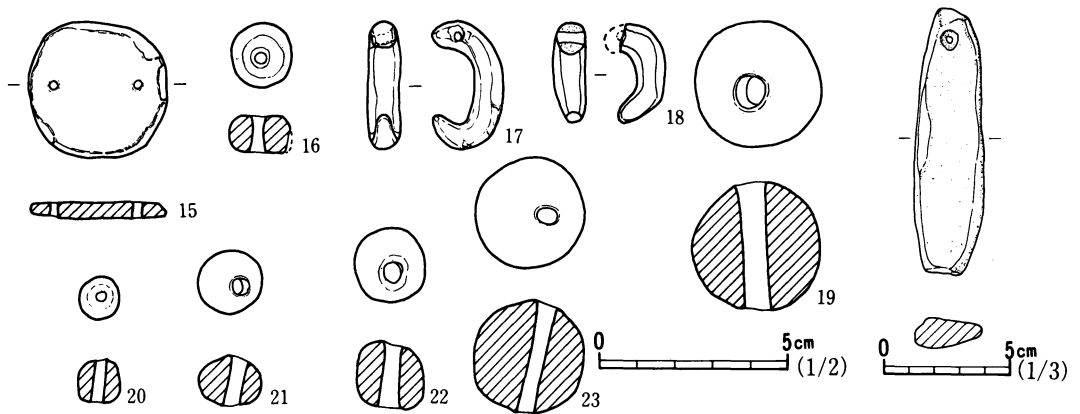
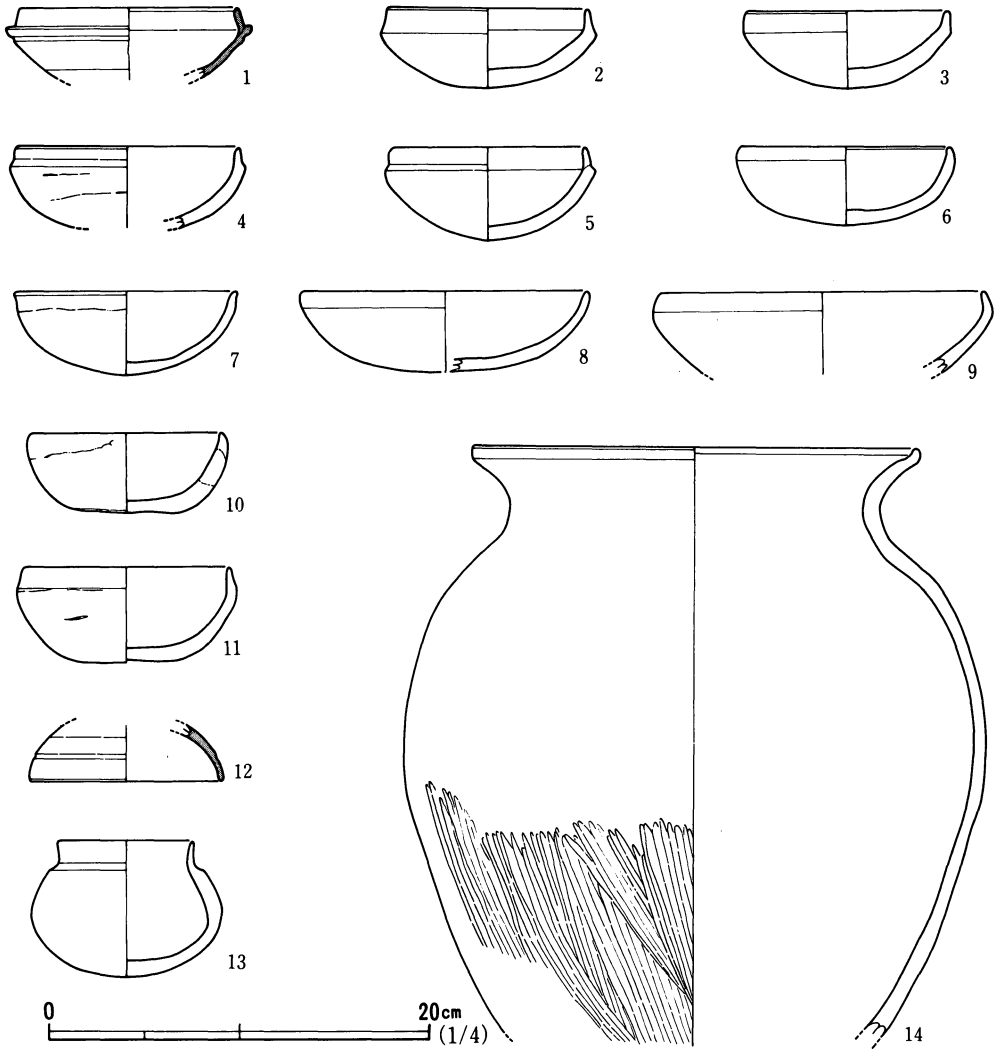
土器 1は須恵器の杯身である。体部は丸味をもちながら開き口縁部は内傾して立ち上がる。

胎土に白色微細粒が多く含まれるが精選されており、焼成も良好で色調は灰色を呈する。2～11は土師器の杯である。2～5は底部丸底で、体部と口縁部との境に稜を設けるものである。稜は比較的弱く作り出され、2～4の口縁部は短く直立気味に立ち上がる。5はやや稜が強く口縁部は僅かに内傾して短く立ち上がる。体部は外内面ともヘラミガキされ、口縁部はヨコナデが行なわれる。2・3・5は完形で口径は10.5cm前後、器高は5が4.8cmでほかと比較すると深



第22図 506号跡遺物出土状況

III 遺物



第23图 506号跡出土遺物実測図 ①

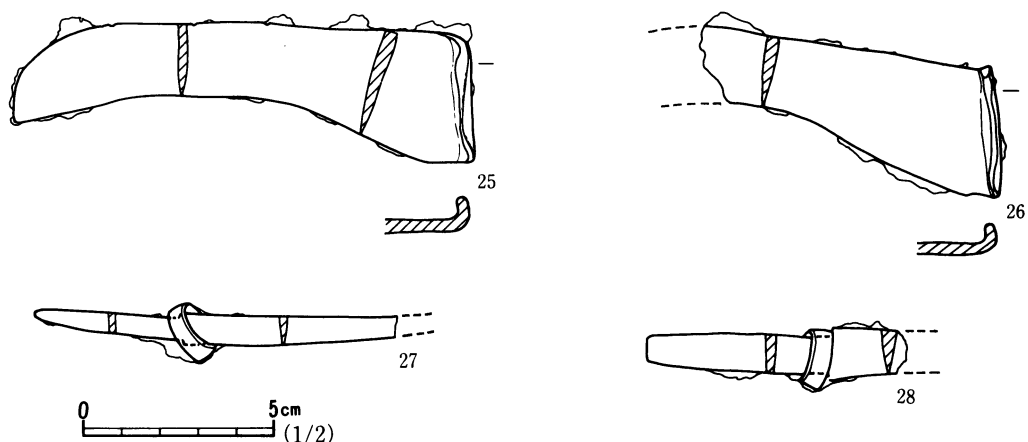
く作られる。6・8は丸底で体部全体が内彎しながら立ち上がり、口縁部をそのまま開いて終わらせる。6の口唇部は僅かに内側に折られる。調整は6が最終的に体部全面ヘラミガキで、8はヘラナデを主としている。8の胎土には細かい雲母が多く含まれ、焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。7は体部全体に丸味をもつもので、口縁部は端部で外反する。9は口縁部を内彎させながら立ち上がらせ、復元口径17cmとやや大きくなる。10・11は完全な平底とまではならないが、底部に平坦面を設けるものである。10は内彎しながら立ち上がり、11は口縁部との境に弱い稜を置いて口縁部は内傾して立ち上がる。この2点には接合痕が一部に残る。12は須恵器の杯蓋である。天井部は半球状に甲高となり、体部と受口の境は浅い沈線によって画される。13は小形壺である。胴部は球状となり、口縁部との境に段がついて、口縁部は短く直立して端部は尖り気味となる。胴部外面はヘラケズリ後ヘラミガキで、内面はナデである。14はやや長胴とはなるが中位に張りをもつ甕である。口縁部はゆるやかに外反し、口唇端部はつまみ上げられたように短く立って内面に凹線状の段がめぐる。胴部下半は細かなヘラケズリが施され、上半は丁寧なナデで調整される。

石製品 15は滑石製有孔円板である。長径36mm、短径33.6mmの不整形円で調整に丁寧さを欠く。穿孔は両側から行なわれていると考えられ、孔径は2.4mmを測る。厚さは周辺で薄く、中央で4.5mmである。16は凝灰岩製の丸玉で一部を欠損する。径15.8mmを測り、厚さは8.8mmと薄く作られる。穿孔は両側から行なわれ、孔径は穿孔の開始されたところで4.5mmである。色調は淡黄緑色を呈する。24は石製品というよりは石器の部類になるであろうか。砂岩を用いた砥石である。鉄製品が出土しているのでそれとの関連は強いと考えられる。上端部に近い位置に紐をとおすための穴であったのだろうか、その目的は断定できないが、両面から穿孔を開始して貫通していない凹部が残されている。長さ11.1cm、幅は広いところでも2.2cmと細長く、両面が使用されている。

土製品 17・18は「C」の字状の形に作られた勾玉である。17は完存し長さ33.2mm、幅18.8mmを測る。中央での断面形は、長径8.1mm、短径7.3mmの楕円形である。穿孔は焼成前に行なわれ、調整は主にナデであるが、内側の一部分がヘラ状工具によって調整される。18は穿孔部より上を欠く。現存長24.9mmを測る。19～23は土玉である。大きさは最大径が、34mmの19から、20の11mmまでとばらついて一様ではない。いずれも焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。生業の一端を示す遺物であろう。

鉄製品 本跡からは図示できなかった小片も含めると、5点の鉄器が出土している。25・26は基部に折り返しを有する鎌である。25は完存しており、長さ12.1cm、基部の幅3.4cm、刃部中央での幅2.5cmを測る。厚さは3～3.5mm。26は刃部中程から先端にかけてを欠く。現存長8.3cm、基部の幅8.3cmで厚さは3～3.5mm、刃部の幅1.85cmを測る。両方とも刃部は鋭い。27・28は刀

III 遺物



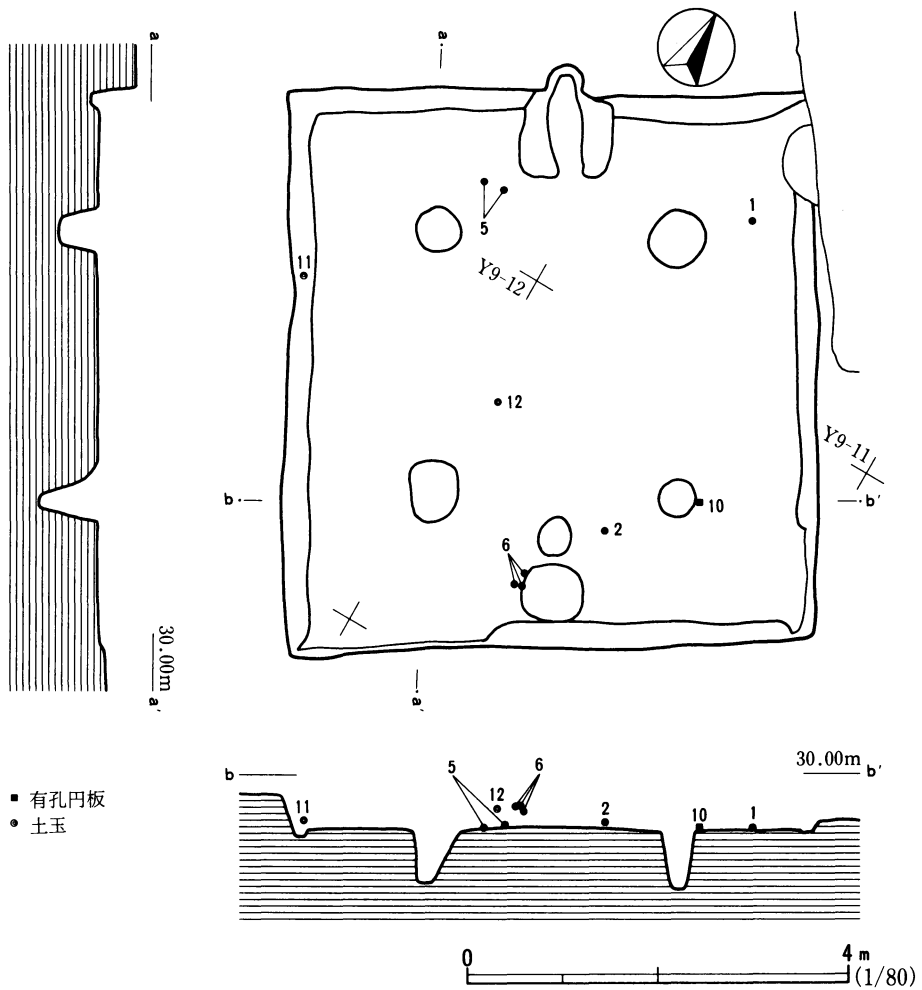
第24図 506号跡出土遺物実測図 ②

子で、いずれも茎と縁金具を残すが刀身は完存していない。27は縁金具によって関の部分がかっきりしないが両関になると考えられ、茎長は約3.9cmになる。刃部は僅かに反り、背厚は2～2.4mm。28は4.95cmを測る茎が完存するのみで身はほとんど遺存しない。刃背厚は関に近い側で4.4mm。

507号跡出土遺物 (第25・26図、図版11・12・17)

(遺物出土状況) 本跡は508号跡を切って構築され、掘立柱建物による破壊も免れている割には遺物量は少ない。完形土器は杯の3点で、これは床面に接して出土しているが、出土地点はそれぞれ間隔を置く。そのほかの遺物にしても集中する傾向はみられない。

土器 1～7は土師器の杯である。1～4は体部と口縁部との境に明瞭な稜を形作っている。体部の作りは二種認められる。1・2が底部下半がゆるやかに開いて途中から内彎し、3・4は全体に丸味を有して稜部に至る。また、1・2の稜は鋭く突出し、段が設けられた形となる。口縁部はいずれも内傾して立ち上がる。体部外面の調整はヘラミガキの後ヘラミガキによって仕上げることで共通しており、内面は3が横方向のナデで、ほかはヘラミガキである。口縁部はそれぞれヘラミガキされる。胎土に雲母が含まれ、焼成は概して良好である。5～7は稜が認められない半球状の体部から、口縁部は僅かにつまみ上げられるように立ち上がる。外面体部はヘラミガキが施され、内面はナデかミガキで調整される。5の内面は全面に丁寧なヘラミガキを行ない黒色処理を施す。胎土及び焼成は近似した状況を示す。8は鉢である。体部の4分の1が遺存する。全体に直線的に開き、口縁部を僅かに曲げて立ち上がらず。体部は外内面ともヘラナデで、口縁部は横方向のナデ。9は甕である。上半の2分の1を欠く。口径13.2cm、



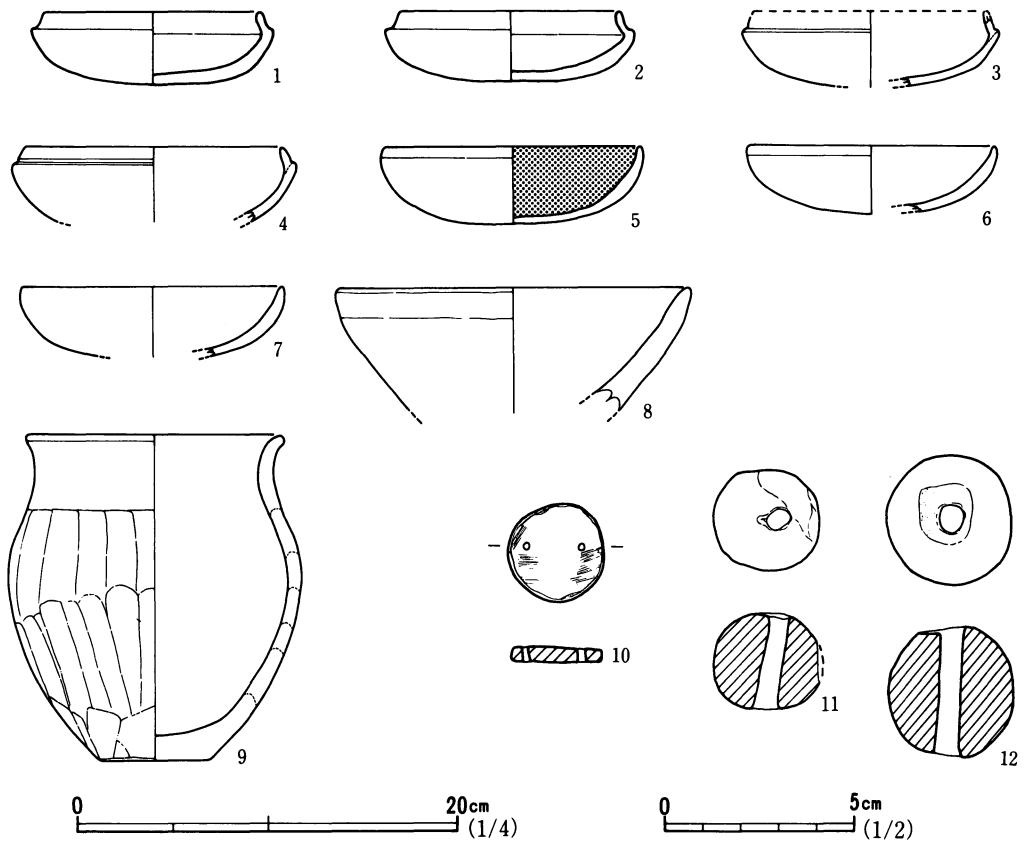
第25図 507号跡遺物出土状況

器高16.8cm、底径6.0cmでやや小形である。胴部は中位で張りを有し、口縁部は一度短く直立気味となり上位で僅かに外反する。胴部上半部から口縁部にかけてはゆるやかなカーブを描く。調整は胴部外面は縦方向のヘラケズリで、内面はヘラナデを施す。胎土に砂を多量に含み、焼成は甘く、器表面がざらつく。色調は暗茶褐色を呈する。

石製品 10は滑石製の有孔円板である。径25.2mmの比較的整った円形を呈する。側面は面取りも行なわれ、表裏には斜方向の研磨痕をとどめている。2孔は片面から穿たれ、孔径は1.6mmを測る。

土製品 11・12は土玉で、最大径は29mmと、34mmを測る。焼成は11がやや不良で黄褐色を呈し、12は良好に焼かれ色調は暗褐色である。

III 遺物

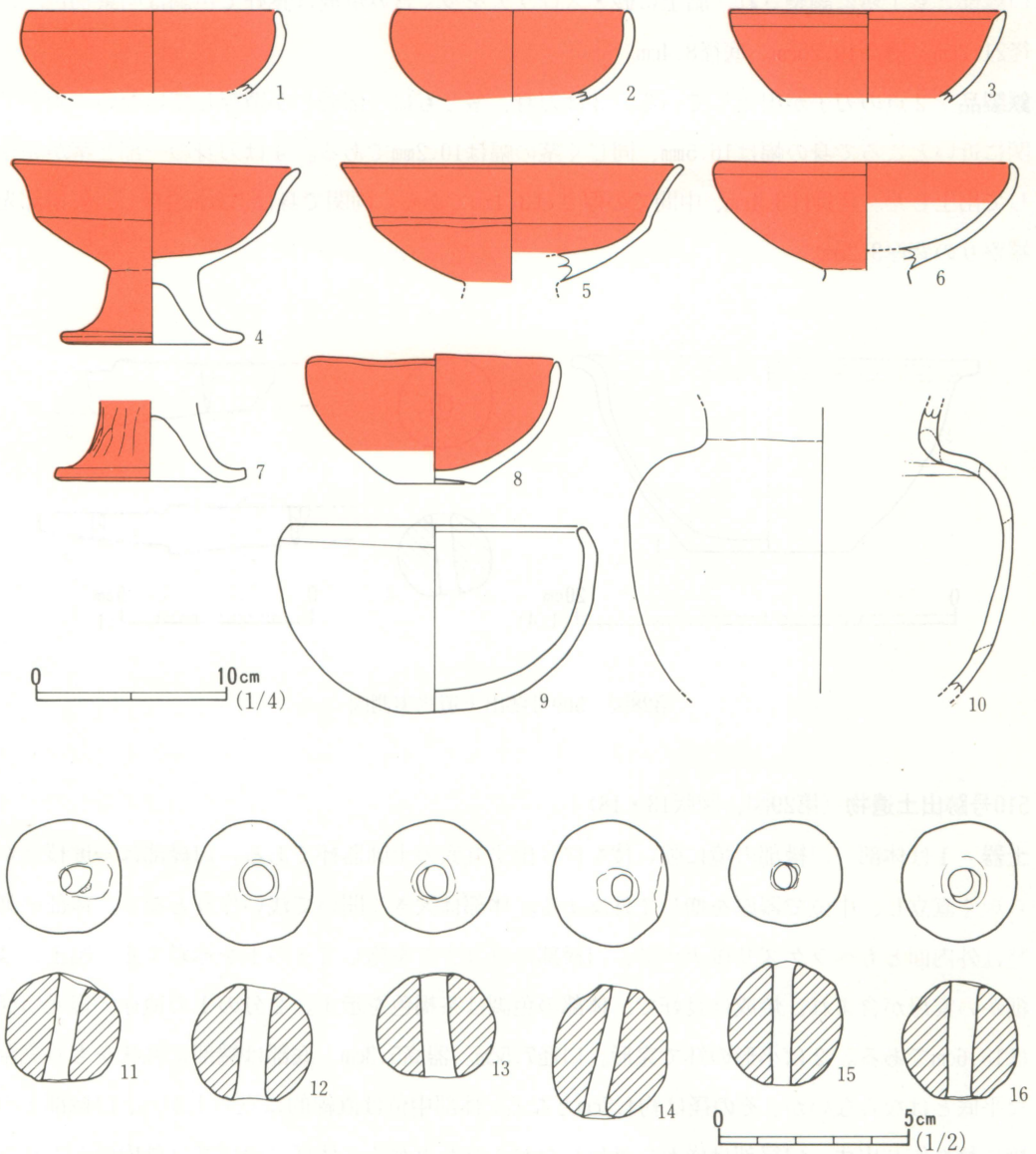


第26図 507号跡出土遺物実測図

508号跡出土遺物 (第27図、図版12・18)

土器 1～3は土師器の杯である。1は丸底で体部と口縁部との境に弱い稜を設けて口縁部を僅かに内傾させる。2は半球状に全体に内彎して立ち上がる。3はゆるやかに内彎して立ち上がり、口縁部をそのまま外側に開き、口唇部内面に弱い稜がめぐる。体部外面はいずれもヘラケズリ後にヘラミガキカナデによって調整され、内面は1・2がナデを主としており、3はヘラミガキが施される。3点とも外内面赤彩。4～7は高杯である。4は復元口径14.9cm、器高9.2⁴cm、裾径9.7⁷cmになる。杯は口縁部が長くゆるやかに外反し、体部との境に弱い稜が作り出される。体部はゆるやかに脚部に至る。脚部は接合部から短く下降し、裾部は小さく開く。5は体部と口縁部との境に段を設ける杯部のみの遺存である。6も杯部で、体部は全体に内彎し口縁部が傾かに内傾する。7は脚部で裾端部が少しめくれ上がって終わる。高杯の器面調整は、外内面とも最終的にヘラミガキカナデによって平滑にされ、赤彩が施される。8・9はほぼ完形となった鉢である。8は口径13.0cm、器高6.8cm、底径4.4cmを測る。底部は若干上げ底で、

体部は内彎しながら立ち上がり口縁部は直立気味に開く。外面は体部がヘラケズリされ、口縁部とともにその上にナデを施す。内面は全面にナデである。底部と外面体部下半を除き赤彩される。また、内面に「十」字状の暗文風のミガキ痕を認める。9は丸底・半球状で安定せず、口縁部は内傾する。口径15.4cm、器高9.7cm。外面はヘラケズリ後ナデ、内面は全体にヘラナデで調整する。胎土にスコリア・雲母を含み焼成は概ね良好である。色調暗赤褐色。10は肩に強い張りを有する甕である。胴部最大径は20.2cmで、胴部上位に置かれる。胎土に雲母を含む。焼成は良好。



第27図 508号跡出土遺物実測図

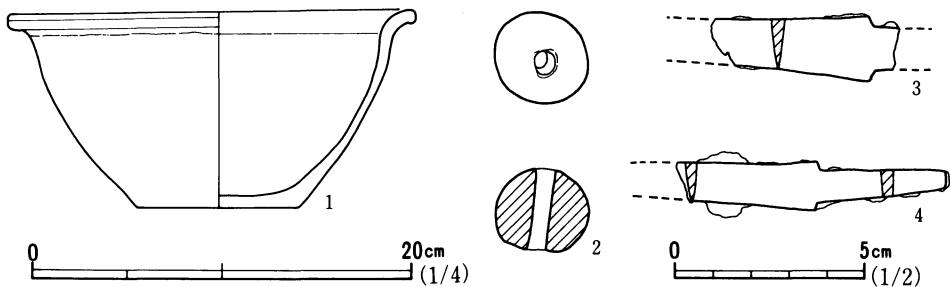
III 遺物

土製品 11~16は土玉である。大きさは15の径29mmから14の32.5mmの範囲に収まり、あまりばらつきがない。胎土に砂を含み、焼成は同程度である。色調は黄褐色から茶褐色を呈する。

509号跡出土遺物 (第28図、図版12・18)

土器 1は鉢で4分の3が遺存する。底部は安定した平底で、体部は除々に開きながら僅かに内彎して立ち上がる。口縁部は短くかつ急激に水平方向に外反して開く。また口唇部の外側中央には弱い沈線がめぐる。外面はヘラケズリの後ヘラミガキで、内面はナデ。体部の両面及び口縁部とも丁寧に調整され、胎土に砂・スコリアを多く含み焼成は良好で色調は明茶褐色。口径21.2cm。器高10.25cm。底径8.4cm。

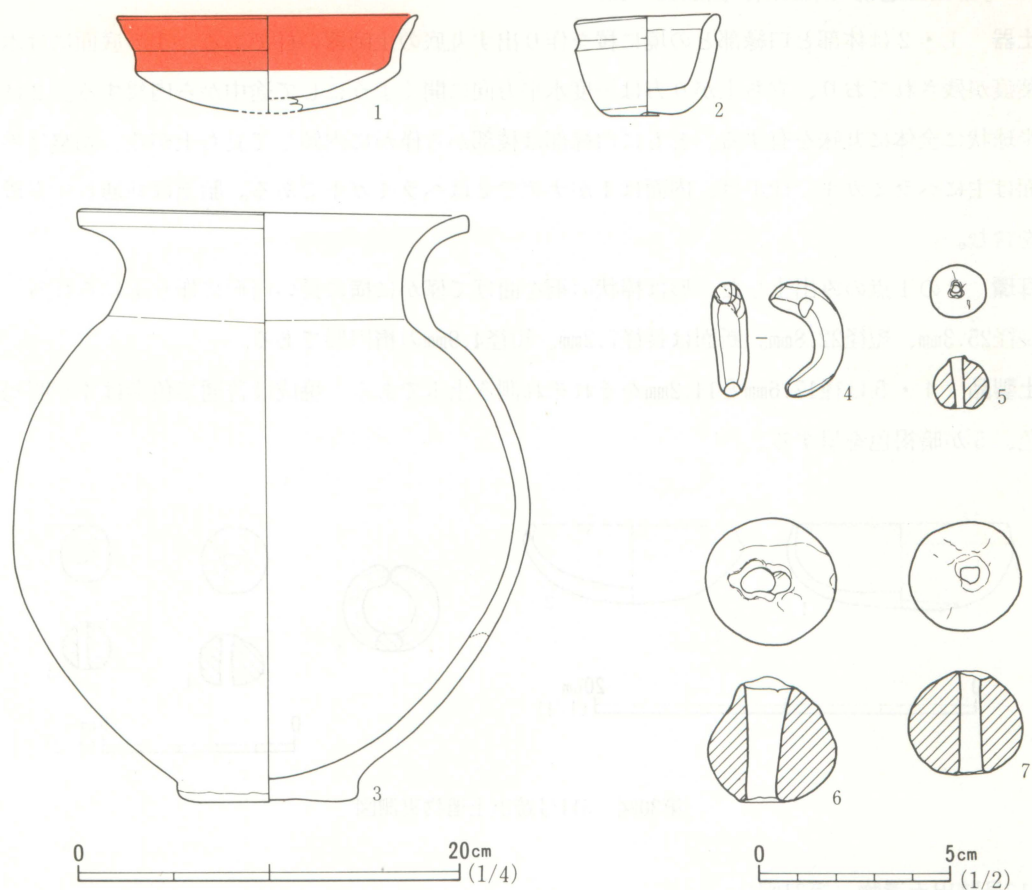
鉄製品 2点の刀子が出土している。3は刀身、茎ともに一部分しか遺存していない。両関で、関に近いところで身の幅は16.5mm、同じく茎の幅は10.2mmである。4は刀身の一部と茎が完存して出土した。茎長は3.4cm、中間での厚さは3.4mmである。両関で身は3.7cm遺存し、欠損部先端寄りの背厚3.2mm。



第28図 509号跡出土遺物実測図

510号跡出土遺物 (第29図、図版13・18)

土器 1は体部と口縁部の境に強い稜を作り出す丸底の土師器杯である。口縁部は一度稜部から短く直立し、中位で器厚を増して外反する。体部は大きく開いて浅い作りとなる。体部の調整は外内面ともヘラケズリ後ナデで、口縁部はヨコナデを施してその上を赤彩する。胎土には細かい雲母が含まれ、焼成は良好で、体部の色調は茶褐色を示す。2分の1の遺存で復元口径は15.6cmである。2は小形の鉢で完形。口径7.5cm。器高5.3cm。底部は端部に丸味をもち完全な平底とはならないが、その径は約4.7cmとなる。体部中位は直線的に立ち上がり、口縁部との境に稜を作り出す。口縁部は僅かに外反しながら立ち上がる。体部については外内面ともヘラナデ調整を行ない、口縁部はヨコナデ。3はほぼ完形の甕である。胴部は球胴でその最大径を



第29図 510号跡出土遺物実測図

中位に置く。口縁部は肩部に作り出された弱い稜からゆるやかに外反しながら立ち上がる。口唇端部は僅かにつまみ上げられた形となる。胴部外面は丁寧なヘラミガキで調整され、内面はヘラナデからナデを行なう。口縁部は外側に開くあたりから外内面ヨコナデ。胎土には長石及び石英が多くみられ、やや粗な状態となっている。本来の焼成は普通であったと考えられるが、二次焼化のためか胴下半部は器面が荒れている。口径20.2cm。器高30.5cm。底径9.5cm。

土製品 4は「C」の字状の形に作られた土製勾玉である。完存し長さ20.6mm、幅17.4mmを測る。断面は長径8.2mm、短径6.9mmの楕円形となる。穿孔は焼成前に行なわれ、調整はヘラナデである。焼成は良好で色調は暗褐色を呈す。5～7は土玉である。5は径13.6mmと小形で、6は径33mm、7は28.6mmの大きさをもつ。色調は5が黄褐色、6が暗褐色、7が赤褐色を示す。5のような小形に作られたものと、6・7の大形のものとは使用目的が異なると考えられる。

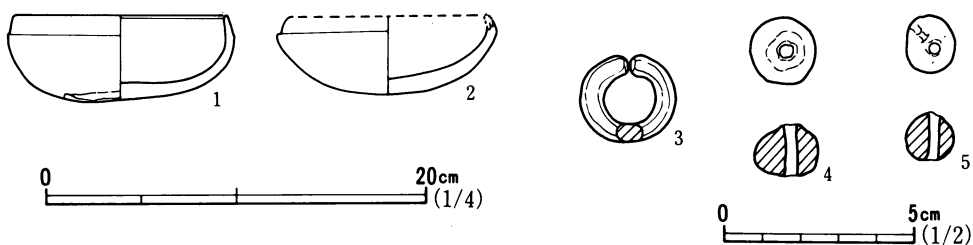
III 遺物

511号跡出土遺物（第30図、図版13・18）

土器 1・2は体部と口縁部との境に稜を作り出す丸底の土師器の杯である。1の底面には木葉痕が残されており、立ち上がり方は一度水平方向に開くようにして途中から内彎する。2は半球状に全体に丸味を有する。ともに口縁部は稜部から僅かに内傾して立ち上がる。調整は外面は主にヘラミガキで仕上げ、内面は1がナデで2はヘラミガキである。胎土は共通して雲母を含む。

耳環 3の1点のみ出土した。形は棒状の銅を曲げて僅かに横に長い円形に作り上げられる。長径25.3mm、短径22.8mm。断面は長径7.2mm、短径4.9mmの楕円形である。

土製品 4・5は径17.6mmと14.2mmをそれぞれ測る土玉である。焼成は普通で色調は4が明褐色、5が暗褐色を呈する。

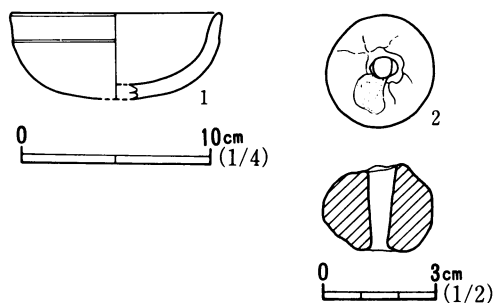


第30図 511号跡出土遺物実測図

512号跡出土遺物（第31図）

土器 遺物出土量は極めて少なく、図示可能となった土器は1点のみである。1は口縁部との境に稜を作り体部は半球状となる土師器の杯である。口縁部は直立して開く。胎土は雲母を含み焼成は良好。色調は暗褐色を呈す。復元口径10.8cm。

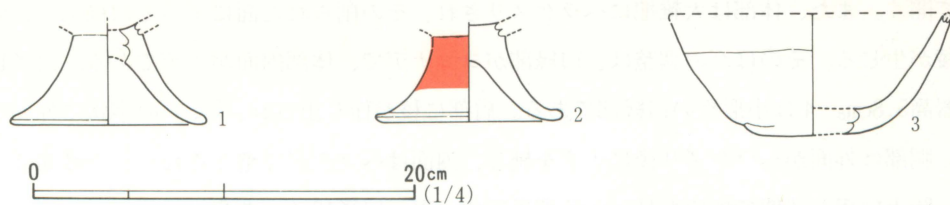
土製品 2はごつごつとした感じを受ける土玉である。穿孔開始側は孔に向かって凹状となり、逆に貫通側は粘土がめくれ上がったままで焼成される。径27mm。色調暗黄褐色。



第31図 512号跡出土遺物実測図

513号出土遺物（第32図、図版13）

土器 1・2は高杯の脚部のみ遺存する。杯部について全く不明。1は「ハ」の字状に開いて裾部に至り、裾端部はあまり開かず終わる。調整はヘラミガキ。裾径10.2cm。2は「ハ」の

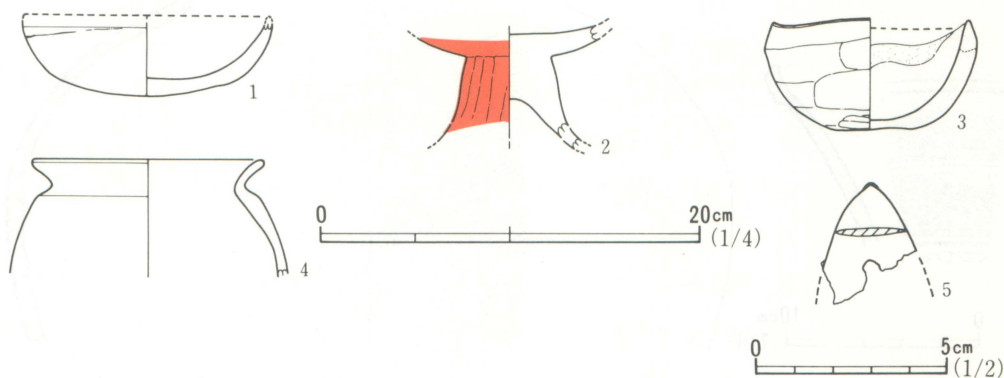


第32図 513号跡出土遺物実測図

字状に下降して裾部が若干水平方向に開く。端部は僅かにめくれ上がったように見える。外面の調整はヘラケズリ後ヘラミガキを施しさらに赤彩する。内面は主にヨコナデ。裾径9.8cmを測る。2点とも胎土・焼成は近似している。断面の色調はいずれも赤褐色を示す。3は鉢である。不安定で丸底に近い底部から、体部は下端に丸味を有し徐々に開きながら立ち上がる。調整は体部がナデで、口縁部にはヨコナデを施す。胎土に砂を多量に含むが焼成は良好で色調は茶褐色である。

514号跡出土遺物 (第33図、図版13・18)

土器 1は半球状の体部をもつ土師器の杯で、口縁部もそのまま立ち上がる。口唇部は欠損して明らかでない。調整は体部口縁部とも外内面ヘラミガキである。外面に接合痕一条が観察される。胎土は緻密であるが雲母を多量に含んでおり、焼成は良好である。2は高杯の接合部から脚部の上半部にかけてである。脚は僅かに開きながら下降し裾部へ移行する。外面は縦方向のヘラケズリの後ナデを加えて赤彩している。また、脚内面は黒色処理を施したような黒色である。3は鉢で口縁部の一部を欠く。底部は径4.1cmの小さな平底となり木葉痕を残し器厚が薄く作られる。体部は全体にゆるやかに内彎して立ち上がり、口縁部は直立して端部を尖り気味



第33図 514号跡出土遺物実測図

III 遺物

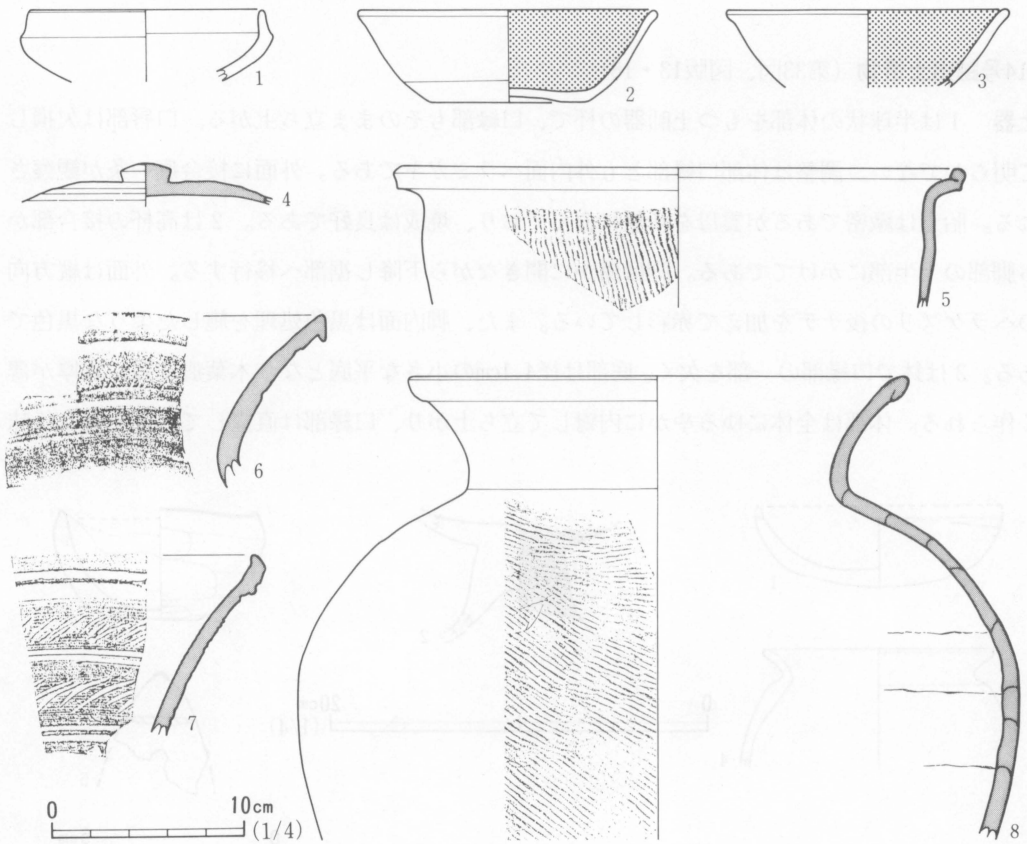
にして開く。また、体部は大雑把にヘラケズリされ、その削られた面によって口縁部との境に弱い稜が生じる。そのほかの調整は、口縁部がヨコナデで、体部内面がナデである。口径10.2cm。器高5.8cm。4は小形甕の口縁部である。肩部に稜が作り出され、「く」の字状に外反して開く。胴部は外面がヘラケズリ後にナデを施し、内面はヘラナデで整えられる。口縁部はヨコナデ。胎土は粗な状態で焼成も甘い。色調黒褐色。復元口径12.0cmを測る。

鉄製品 5の鉄鏃が出土している。身の部分の約半分の遺存であるから全体の形を復元することはできない。遺存部分からは無茎鏃になると思われる。

2 土坑から出土した遺物

D501号跡出土遺物 (第34図、図版13)

本跡からは土師器と須恵器が出土している。1は体部と口縁部の境に稜を作り出す丸底の土



第34図 D501号跡出土遺物実測図

師器で、口縁部は内傾して立ち上がる。古墳時代後期の所産であり、本跡には流れ込んで混入したものと思われる。2・3はロクロ調整された土師器の杯である。2は体部下半に丸味をもち口縁部は若干肥厚して僅かに外反する。底部は回転糸切りの後、体部下端及び底部周縁を回転ヘラケズリし、内面は全体にヘラミガキを加え黒色処理を施す。口径15.6cm。器高4.8cm、底径8.2cm。3も2と同じように内面には黒色処理が施される。4～8は須恵器である。4は蓋で天井部のみ3分の1遺存する。水平方向に開き中央には疑宝珠形の鈕をもつ。天井部外面は回転ヘラケズリによって調整される。胎土に雲母が含まれ色調は灰色。5は口縁部が強く外反する寸胴の甕である。外面には縦方向に平行な叩き目が認められる。雲母を多量に含み焼成は不良で暗灰褐色を示す。6・7は甕の口縁部の破片である。ともに焼成は堅緻で、色調も黒味掛かった灰色である。8は胴上半部に張りをもち、肩部から口縁部は開きながら立ち上がる。外面は叩きを加え、内面はナデで調整する。胎土には雲母が多量に含まれ、焼成は普通で色調は淡灰色となっている。復元口径は26.2cmを測る。

3 グリッド及びトレンチから出土した遺物

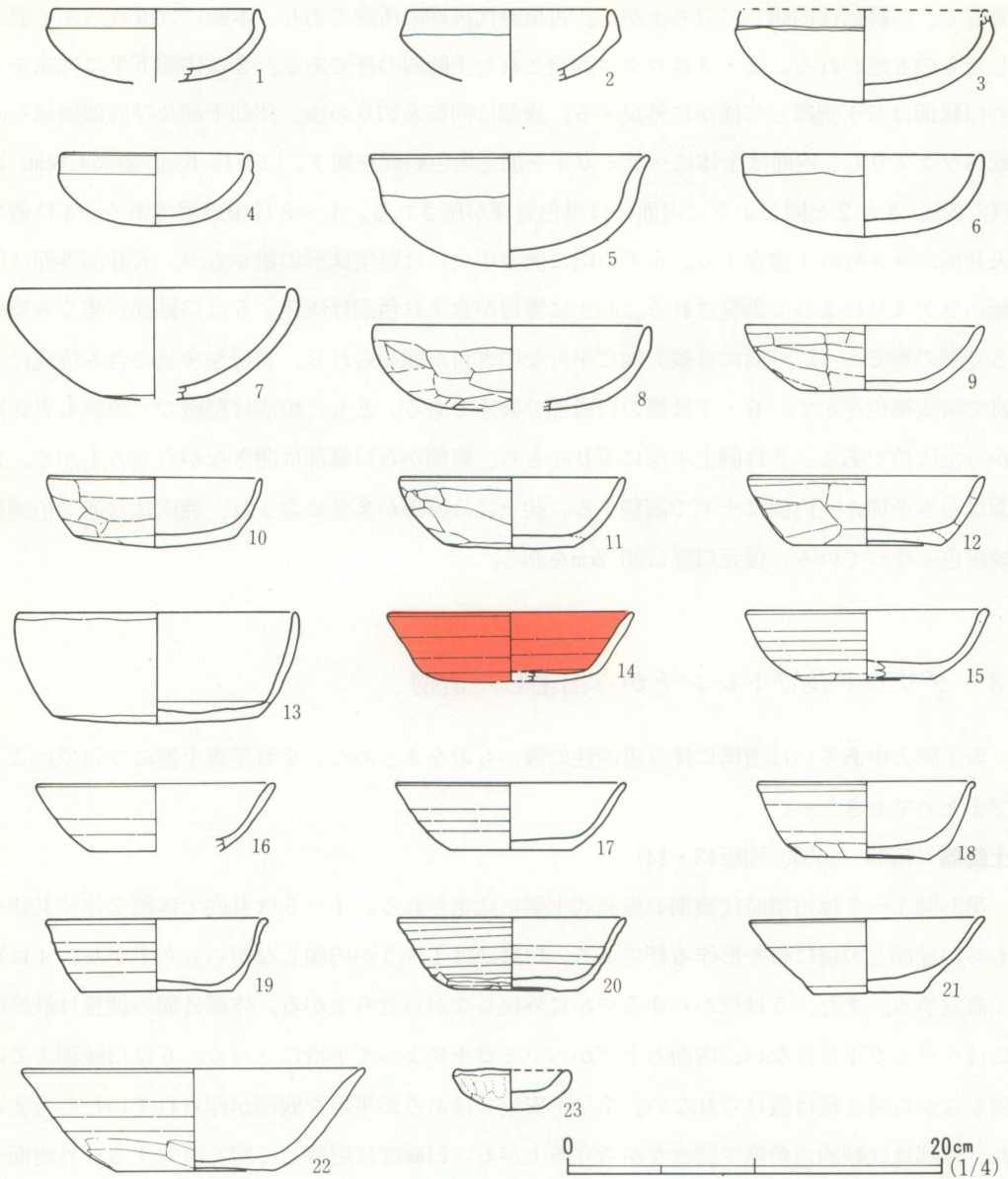
表土除去中あるいは遺構に伴う可能性の薄いものをまとめた。なお墨書土器についてはここでまとめておきたい。

土師器（第35～36図、図版13・14）

第35図1～7は古墳時代後期の鬼高式土器に比定される。1～5は丸底で体部全体に丸味をもち口縁部との境に稜を形作る杯である。口縁部は1～3が内傾しながら立ち上がり、4は短く直立する。また、5は稜からゆるやかに外反しながら立ち上がる。体部外面の調整は最終的にはヘラミガキを行ない、内面もナデかヘラミガキによって平滑にされる。6は口縁部まで内彎しながら開き稜は設けられない。7は不安定ではあるが平坦な底部が作られていたと考えられ、体部は比較的急角度で開きながら立ち上がる。口縁部は肥厚して短く直立する。外内面全体にヘラミガキ調整。

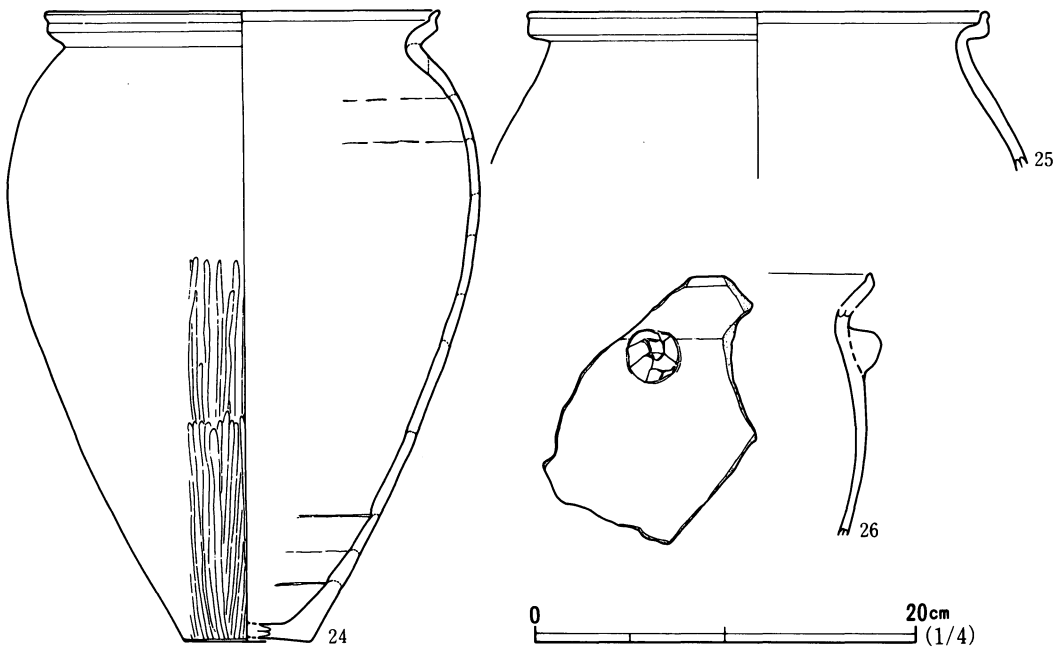
8～22、24～26は奈良・平安時代の土器である。8～13はロクロ未使用の杯である。8は丸底を呈し、体部から口縁部にかけては内彎して立ち上がる。口縁部は若干肥厚するが特に稜は作られない。底部及び体部は横方向のヘラケズリによって整えられ、内面はナデがなされる。口縁部は外内面ともヨコナデ。10は体部下端に稜がついて底部が意識されるが、完全な平底とまではならない。底部と体部はヘラケズリを行ない、内面は全体に丁寧なヘラミガキを施す。9・11・12は完全な平底となり、体部は僅かに内彎しながら立ち上がる。外面調整は、いずれも横方向のヘラケズリが最初に行なわれ、その上に乾燥が進んだ段階で軽いミガキが施される。

III 遺物



第35図 グリッド及びトレンチ出土土師器実測図 ①

内面は丁寧なミガキ調整である。12は完形で出土し、口径12.1cm、器高3.7cm、底径7.0cmを測る。胎土、焼成については近似する。13は口径14.7cmに対し底径が10.9cmと、口径に対して底径も大きく、やや深めな作りとなる杯である。底部は完全な平底ではなく、ゆるやかな曲面となり、体部は上半で僅かに内彎する。外面は口縁部を除いてヘラケズリの後ヘラミガキが行なわれる。内面は全体にヘラミガキである。胎土はスコリアなどが含まれるものの、かなりしま



第36図 グリッド及びトレンチ出土土師器実測図 ②

りをもつ焼成となっている。

14～22はロクロを使用して整形・調整した杯である。14は底部が手もちヘラケズリによって整えられるが曲面を呈し、体部は外内面とも赤彩される。15・17も底部は手もちヘラケズリが施され、体部は16も含め僅かに内彎して立ち上がる。全体にロクロ目は弱い。18～22は、底部が回転糸切りによって切り放される。18・20は切り放し後全く無調整で、19・22は周辺部にのみ回転ヘラケズリを施す。また、18・20・22の体部下端には手もちヘラケズリが加えられる。21は底面全体に回転ヘラケズリを行ない糸切り痕を消している。器形は18・19が急激な立ち上がりを示し、20・22は口縁部が僅かに外反し、21は大きく開きながら立ち上がる。

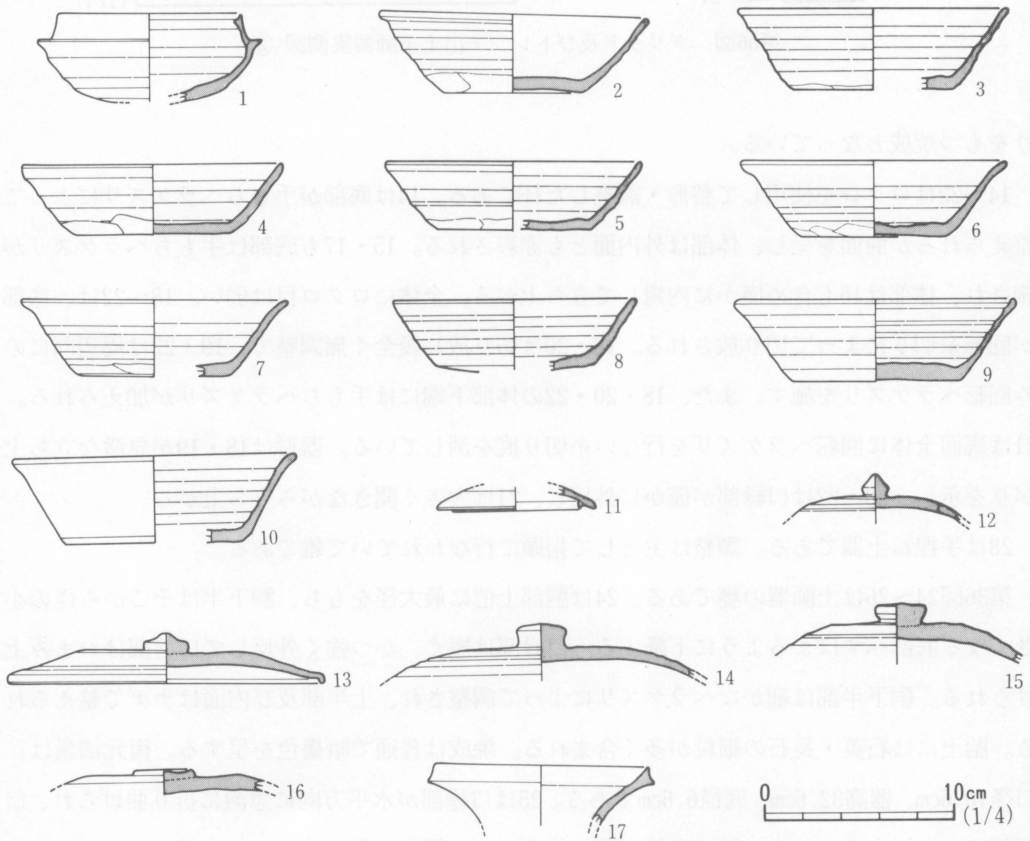
23は手捏ね土器である。調整は主として指頭で行なわれていて雑である。

第36図24～26は土師器の甕である。24は胴部上位に最大径をもち、胴下半はそこから径の小さくなる底部へすばまるように下降する。口縁部は短く、かつ強く外反して口唇部はつまみ上げられる。胴下半部は細かなヘラケズリによって調整され、上半部及び内面はナデで整えられる。胎土には石英・長石の細粒が多く含まれる。焼成は普通で暗褐色を呈する。復元法量は、口径10.6cm、器高32.6cm、底径6.6cmである。25は口縁部が水平方向に急激に折り曲げられ、口唇部はつまみ上げられる。26は突起が貼り付けられた部分を残す破片で、口縁部はゆるやかに外反し、口唇部が若干つまみ上げられている。

須恵器 (第37図、図版14)

1～10は杯である。1は稜が鋭く張り出し、受口部は内傾して立ち上がり、体部は全体に丸味を有する。古墳時代の所産である。2～10については、胎土の違いによって大きく3つに分類することができる。まず2～5は胎土に雲母が多量に含まれることで区別でき、6～8には長石・石英が多量に含まれるという特徴がある。また、9・10は胎土が精選されており、雲母、長石・石英があまり含まれていない。以上の3つの特色を認めることができる。色調は淡灰色から青灰色と様々である。調整は2～8の底部が手もちヘラケズリで、体部下端にも手もちヘラケズリが加えられる。9・10の底部は回転ヘラケズリで整えられ、10は体部下端に同様な調整を施す。器形は8が若干底部に丸味をもつほかは平底で、体部は直線的に開きながら立ち上がり、口縁部がほんの僅か外反する。ロクロ目は2・3が割に強く出て、10は特に外面が大変弱い。

11～16は蓋である。完存するものは出土していない。11の天井部は丸味を有すると思われ、身受け部分にかえりが付く。径は復元して8.4cm程であるので小形である。胎土は砂を含むが精



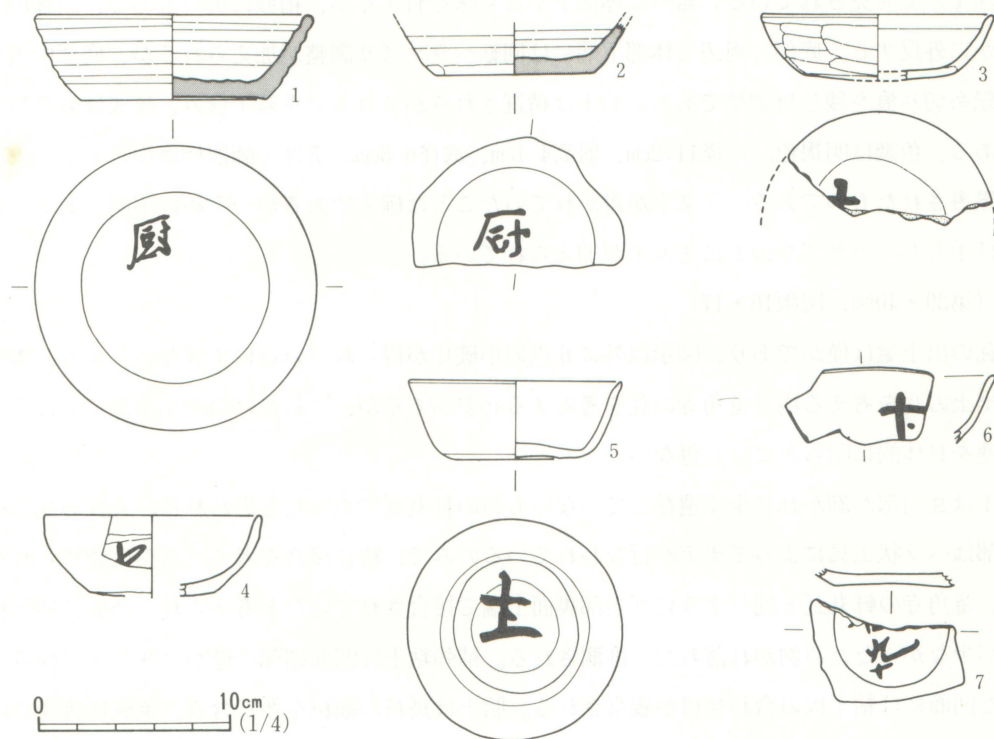
第37図 グリッド及びトレンチ出土須恵器実測図

選されている。12は割に高い擬宝珠状のつまみが付けられ、天井部は若干丸味を帯びるが回転ヘラケズリが施される。胎土は精選されており焼成も堅緻で、色調は青灰色を呈する。13~16は天井部に平坦面が認められるもので、その平坦部はすべて回転ヘラケズリによって調整されている。13は身受け部分が遺存しており、下に折り曲げられるようにして終わる。つまみは13~15が擬宝珠形を呈し、16は平偏のものが付けられる。胎土は13が雲母を多量に含み、14・16が石英・長石を含むもので、また15にはあまり混和材が含まれていない。焼成は16がやや不良で色調も灰褐色になっている以外では概ね良好である。色調は13・15が白味掛かった灰色で14が黒灰色である。13は5分の3程遺存しており、径16.5cm、高さ2.6cmを測る。

17は長頸瓶の口縁部である。頸部上半から大きく外彎して開き、口唇部は一度強く外に張り出して端部はつまみ上げられるようにして終わる。復元口径は11.3cmで、胎土は肌理がやや荒いが焼成は堅緻となっている。色調は灰褐色を呈する。

墨書土器 (第38図、図版15)

土器に墨書の跡を認めるのは図示した7点がすべてである。7がD501号跡から出土しているほかはグリッドからの出土である。1・2は須恵器の杯底部に「厨」と墨書されている。かな



第38図 墨書土器実測図

III 遺物

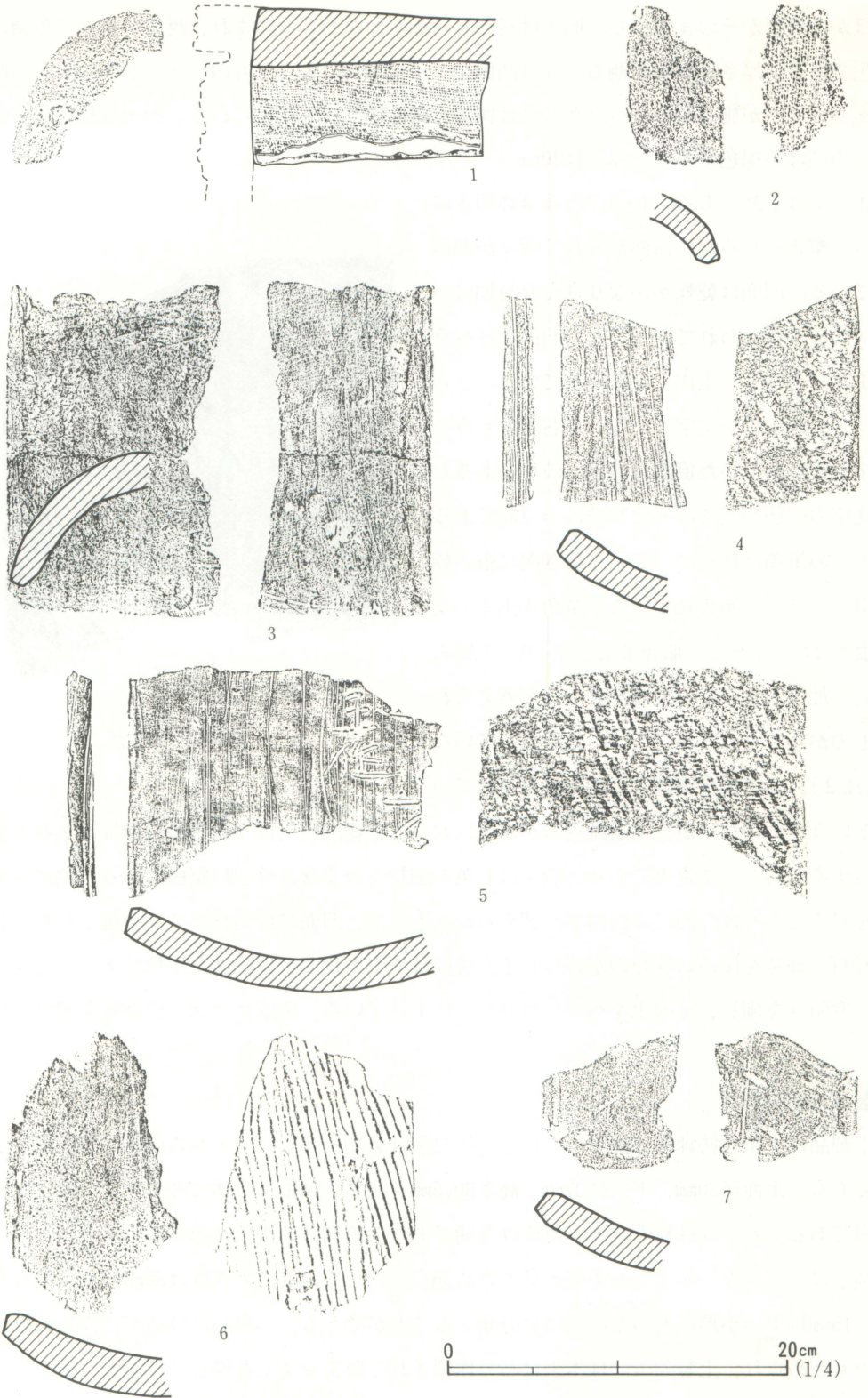
り薄れた状態で、かろうじて判読することが可能であった。薄れた文字ではあるが、この2点の墨書土器は、大畑遺跡の性格を郡衙推定地として積極的に裏付けできる資料として極めて重要となるものである。1は底部の縁に近い側に書かれ、2は中央付近にやや崩した書体で書かれている。土器自体は、1が全体に器厚が部厚く作られ、体部は約61°の角度で立ち上がっている。口径14.4cm³に対して底径が9.5cmであるので、形は箱形といえる。底部は全面回転ヘラケズリが施され、その後に軽いナデがなされ、体部下端も回転ヘラケズリが行なわれる。体部外面のロクロ目は強く、全体からはごつい感じを受ける。胎土には大粒の混和材が混ぜられており、焼成は良好で色調は灰褐色を呈する。器高4.3cm。2は底部の約2分の1が遺存する。底部と体部下端は手もちヘラケズリ調整が施される。胎土には雲母が多量に含まれる。焼成は良好で色調は淡灰褐色である。復元底径8.4cm。3は土師器杯の底部に文字の一部が残されているのみである。5と同じ「土」という文字であった可能性がある。土器は、若干丸味のある底部から体部は僅かに内彎しながら立ち上がる。体部外面は横方向の手もちヘラケズリで整えられる。4も土師器杯に墨書される。体部にその痕跡が認められるが判読はできない。6も同様に体部に墨書されたものである。5は完形の土師器の杯である。墨書は底部のほぼ中央にあり「土」と鮮明に書かれている。この「土」と墨書されているものは、本遺跡近辺では成田市堀之内遺跡(注1)で発見されている。器形は体部下半に丸味を有するが、箱形に近いもので、口縁部が僅かに外反する。底部の周辺と体部下端には回転ヘラケズリ調整が加えられるが、底部中央は回転糸切り痕を残し無調整である。胎土は精選されるがスコリアを若干含み、焼成は大変良好である。色調は明褐色。口径11.2cm、器高4.1cm、底径6.6cm。7は土師器杯底部に「□九十」と墨書されたものである。三文字が書かれていたことは確実であるが一字めは不明である。底部は手もちヘラケズリの上にミガキが加えられている。

瓦(第39・40図、図版16・17)

瓦の出土量は僅かであり、図示以外に6点の小破片が得られているにすぎない。また、本遺跡出土の瓦を考える場合竜角寺の瓦を考慮する必要があるが、これだけの出土量からではその関連を具体的に明らかにはし得ない。

1は瓦当部が剥がれて全く遺存していないものの軒丸瓦であったと思われる。丸瓦の瓦当接合部はヘラ状工具によってナデが行なわれているのみで、特に接合を考えた調整は認められない。竜角寺の軒丸瓦と同じように瓦当部裏面上端で接合されていたと考えられ、凸面に補強粘土が少なかったため剥がれ落ちたと推測される。補強粘土は凹面端部に僅かに残されている。また凹面には粘土板の合わせ目が観察される。胎土は長石の細粒を多く含み、焼成は普通で色調は暗茶褐色である。

2・3は丸瓦である。2は凸面がナデによって調整され、凹面は端部にヘラケズリが施され

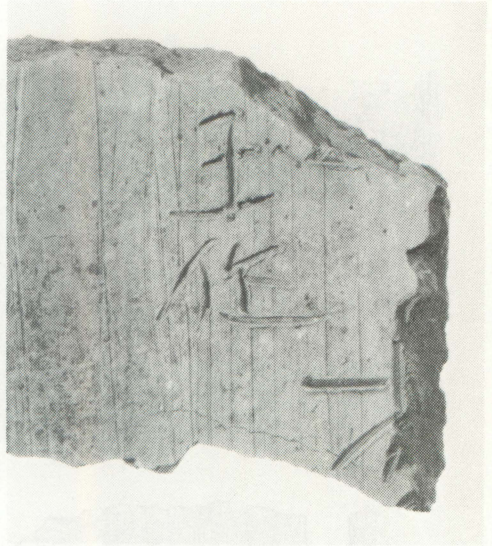


第39図 グリッド及びトレンチ出土瓦拓影図

III 遺物

るほかは布目がそのまま残る。胎土は長石と石英がかなり多く含まれ、焼成は普通で色調は黒灰色である。厚さは16mmを測る。3は凸面がヘラ状工具のようなものでナデが行なわれ、凹面はヘラケズリが施される。ヘラケズリは側面と両面端部にも認められる。胎土は長石粒が含まれ、色調は茶褐色である。厚さは20mm。

4～7は平瓦である。4・5の凸面は縄叩きによって整えられるが、器面が荒れて所々が剝落している。凹面は乾燥がかなり進んだ時期にヘラケズリが行なわれている。5の凹面にはヘラ状工具で力強く「玉作」と書かれている。さらに「玉」の右に一文字と「作」の右下にもう一文字が書かれていた痕跡を残す。破片であるため文字の一部が残るのみで判読は不可能である。「玉」の筆順は初めに「三」を書き次に縦の棒を引いて「、」を入れている。竜角寺出土の文字瓦には「朝市」、「服止卍」、「赤加」、「加刀利」、「加刀入」などの地名を表したと考えられるものが認められるが、「玉作」は出土していない(注2)。この瓦が実際この地で使用されてい



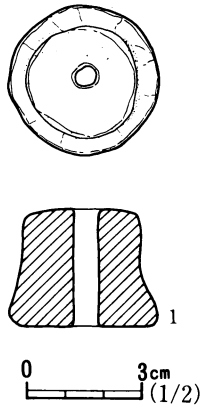
第40図 文字瓦

たという確証はないが、本遺跡周辺が古代において下総国埴生郡玉作郷の可能性あることを示唆する資料として貴重である。胎土は石英の細粒を多く含み焼成は堅緻である。色調は茶褐色を呈する。6は凸面に平行叩きが認められるもので、凹面にはヘラケズリが施される。胎土は長石の細粒を僅かに含むのがみられる。焼成はやや不良で、色調は黄褐色である。7は凸面に一度叩きを施し、その上をヘラケズリして仕上げている。焼成は普通で色調は茶褐色を呈する。

土製品 (第41図)

土製品は土玉と紡錘車が出土している。第41図はZ10-Nトレンチから出土した紡錘車で完形である。上面径30mm、下面径37mm、高さ30.5mmを測る。調整は全体にミガキで全体に比較的丁寧である。胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。色調は茶褐色を示す部分が多い。

図示はしていないが土玉が半完形品も含め36点出土している。大きさは30mm前後を測るものと、15mm以下の小形のものとの二つに分類することができる。小形品には扁平に作られているものも認められ、土製勾玉同様本来は石で作製される白玉や丸玉を模して土で作ったものであろう。祭祀に用いた遺物と考えられる。大形のは従来からいわれているとおり、土錘とし



第41図 トレンチ出土土製品実測図

第1類 縄文時代後期の土器である（1～4）。

1は堀之内式土器に比定される。口縁部上端を無文とし、それから下位にLRを原体とする縄文が施文される。口唇部に突起が貼り付けられているが一部しか遺存しない。胎土は密で焼成は普通である。2は加曾利BⅢ式である。口縁部は若干内傾して立ち上がり、上部に2列の刺突が施文される。横位沈線文から下には縄文が施文され、弧状の沈線を引いて一部を磨消している。3は口縁端部に紐線文を施した加曾利B式の粗製土器である。4は安行Ⅰ式と考えられる。

第2類 縄文時代晩期の土器である（5～23）。

2-a類 撚糸文を施したもので1点だけ出土している（5）。鉢形土器の胴部破片と考えられる。施文は様々の方向から行なわれ統一性に欠ける。内面調整はミガキであるが、丁寧とまではいえない。胎土に細砂粒が含まれ、焼成は普通である。色調は黒褐色。

2-b類 沈線文と縄文が施文されるものである（6・7）。6は縄文が施された上に平行沈線文が3本認められる。内面はミガキによって平滑にされる。胎土は密であるが焼成はやや不良である。色調は黒色に近く、厚さは6mm。7は2本の沈線と細かい縄文が施文されている。沈線の断面はUの字形を示す。色調は暗褐色。

2-c類 沈線文が施文されているものである（8～11）。10・11は三角連繫文と考えられ、9もその可能性がある。8は小破片のためどういった文様になるのかははっきりしない。いずれも胎土に細砂粒を含み、焼成は9がやや甘いほかは普通である。内面調整はミガキで、10は特に丁寧にこなわれている。色調は8・9が暗褐色で、10・11が比較的明るい茶褐色である。

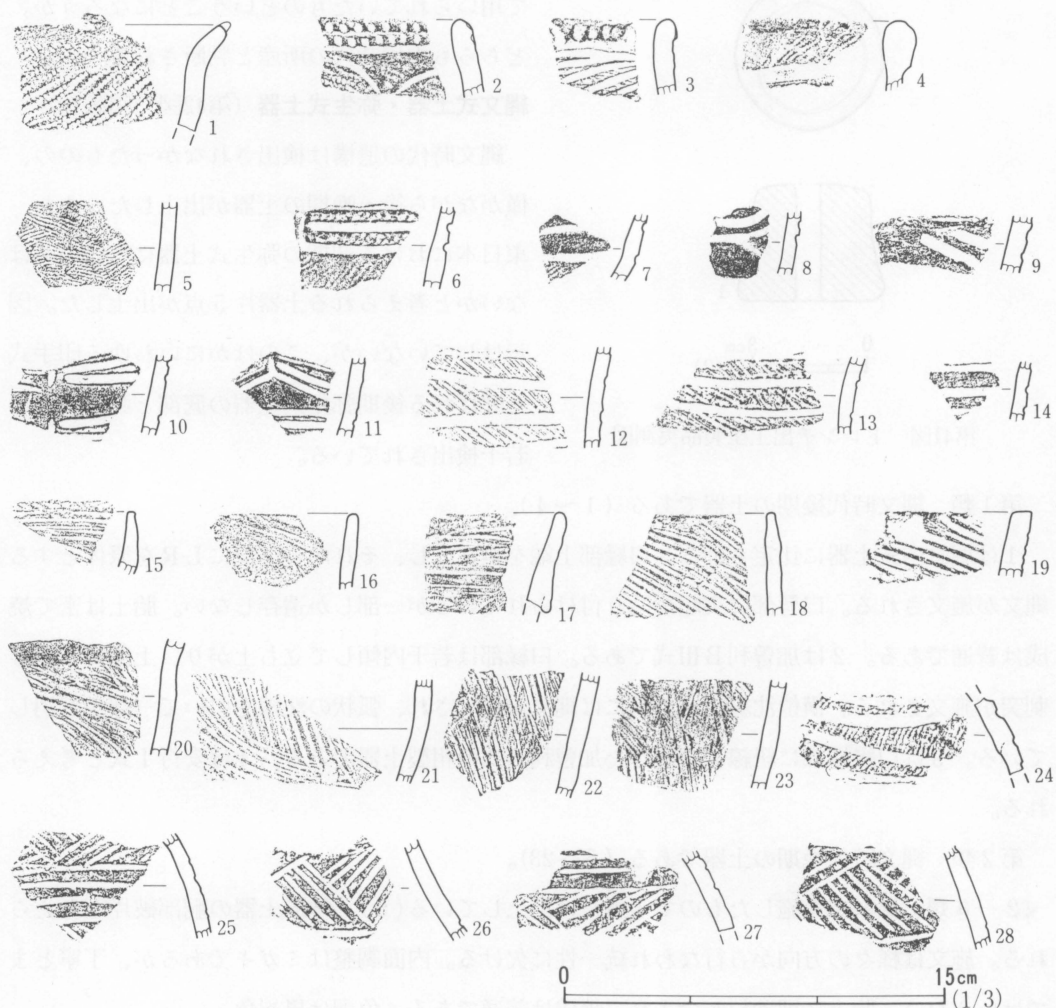
2-d類 条痕文の上に沈線文を引いたものである（12～14）。沈線は先端が方形に近いヘラ状工具で施文されたと思われる。胎土は2点とも密で焼成は普通である。色調は12が黒色で13が褐色を呈す。

て用いられていたものということになるのか。どちらも古墳時代の所産と判断される。

縄文式土器・弥生式土器（第42図、図版19）

縄文時代の遺構は検出されなかったものの、僅かながら後・晩期の土器が出土した。また、東日本における初期の弥生式土器になるのではないかと考えられる土器片5点が出土した。図示はしていないが、このほかにいわゆる印手式と呼ばれる後期弥生式土器の底部と胴部細片も若干検出されている。

III 遺物



第42図 グリッド及びトレンチ出土縄文式土器・弥生式土器拓影図

2—e類 条痕文の施文されるものである(15~23)。いずれも鉢形土器の破片である。15~19は口縁部である。ゆるやかに開きながら立ち上がるものと僅かに内傾するものとが認められる。17は折り返し口縁で、19は口唇部が鋭く角頭状を呈する。15は浅鉢かと思われ口唇部に押捺文が付けられる。20~23は胴部の破片でこのほかに30片以上が出土している。条痕は先端が方形に近いヘラ状工具で何回も引いたような痕跡を残すものと、ハケ目状のものがある。いずれも胎土は密で焼成も概ね普通である。内面はミガキ調整が多いが21はヘラ状工具でナデが行なわれている。色調は18が灰褐色、19が褐色、20が茶褐色でほかは暗褐色である。

以上a~eに分けた第2類土器は荒海式土器として捉えられるものである。b・c類は精製土器、a・e類は粗製土器になるかと考えられる。d類は精製と粗製の中間的なものであろう。

3類土器 弥生式土器と考えられるものである(24~28)。

24は壺形土器の肩部あたりの破片と思われる。縄文を施文した後に太くしっかりした沈線文が施される。沈線文の断面はUの字形で、比較的深い。胎土は密だが小石を多く含むという特徴がある。内面に接合痕が一条残り、ナデ調整の上にミガキを加えている。焼成は普通で、色調は外面が黄褐色、内面が黒色である。厚さは8mm。25~28は同一個体である。この4片については東関東の初期弥生式土器に類例が少なく、誤認しているという危険もある(注3)。文様は平行沈線文間に鋸歯状沈線文を施文するものである。単にこうした文様構成だけを見るならば、縄文時代早期の三戸式土器、あるいは後期の加曽利B式土器のなかに認められるものであるが、そうした土器とは内面の調整が全く異なる。三戸式あるいは加曽利B式は丁寧なミガキであるのに対し、この4点の内面はヘラナデで調整された可能性が高い。また土器の傾きからは壺形土器の肩部から頸部あたりのカーブを描く。胎土は長石、石英粒が多く含まれ、またそのほかの小石も目立つ。焼成はやや悪く、色調は褐色から暗褐色である。厚さ6mm。

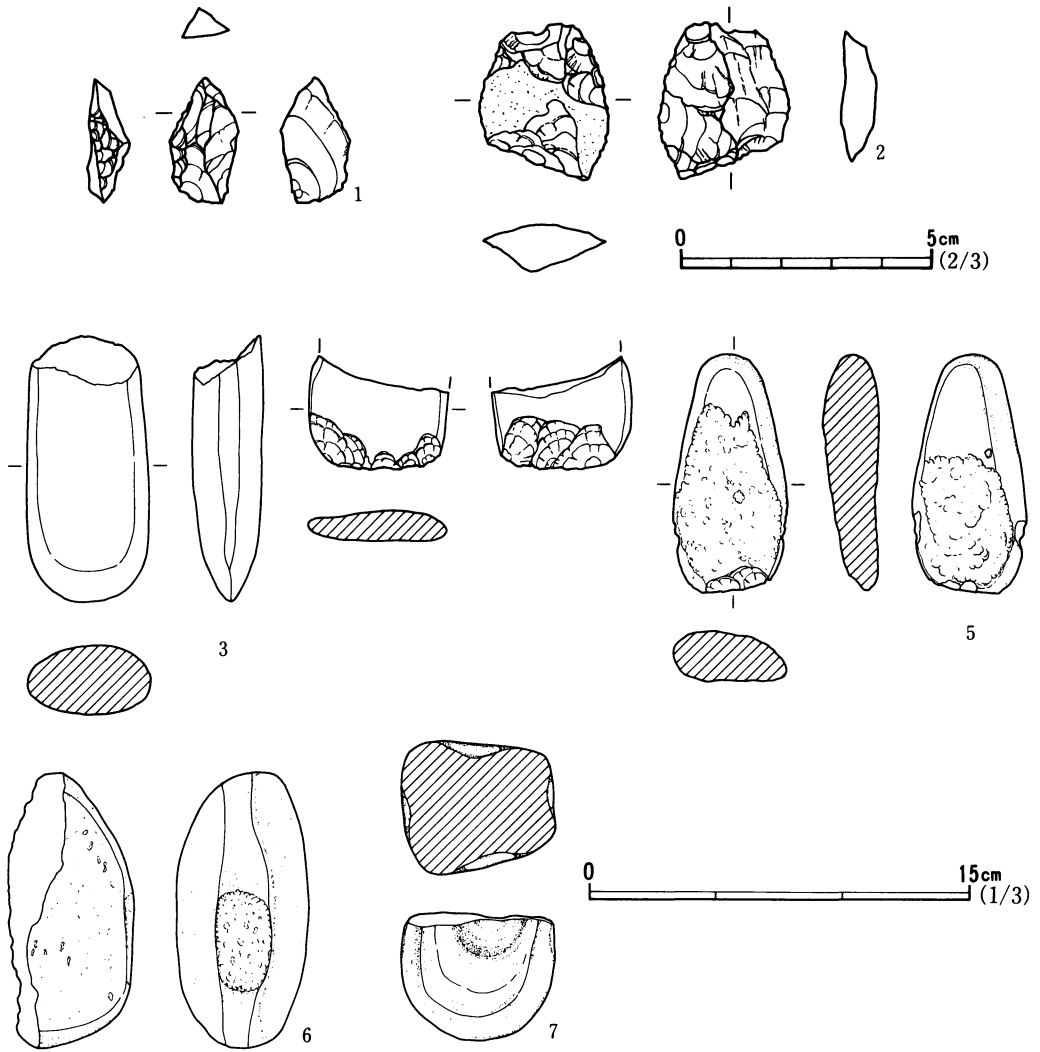
第3類としたものについてはさらに検討を進めたい。

石器(第43図、図版20)

1・2は先土器時代の石器である。1はメノウ製のナイフ形石器で完存している。縦長剥片の一側縁にのみ加工を施す。器長24.6mm、器幅12.4mm、厚さ7.8mmで小形である。2は石材に玄武岩が用いられ、一部に自然面を残すが両面に上・下からの剝離痕が認められる。クサビ形石器になるかと思われる。器長30.4mm、器幅26.2mm、厚さ9.4mmを測る。

3~7は縄文時代の石器である。完存しているものは出土していない。3~5は磨製石斧で、3・4は基部を欠く。4の刃部は使用によって両面に剝離面が生じている。5は刃部にかなり丸味をもつことから、かなり使用されていたことが窺われる。また、二次的な使用として敲石に転用されており両面にその使用痕をとどめている。石材は、3が凝灰岩、4が粘板岩、5が砂岩である。6は磨石で2分の1が遺存する。両面ともかなり使い込んだ様子がみられ、側面には敲石として使用した時に付いた使用痕が長径4cm、短径2cmの範囲で観察される。石材は安山岩である。7は磨石と凹石両方の使用が考えられる石器である。凹部は4カ所に認められ、図示した下端部には敲痕も残される。石材は砂岩である。

III 遺物



第43図 グリッド及びトレンチ出土石器実測図

注

- 1 谷 旬 「堀之内遺跡」『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書III』 昭和58年3月 千葉県文化財センター
- 2 『房総の古瓦』 企画展展示図録No.4 昭和53年4月 千葉県立房総風土記の丘
- 3 鋸歯状の沈線文が施文され、本跡出土の資料に近い沈線の引き方を示すものは、埼玉県池上遺跡A地点出土の土器に1点認められる。

中島 宏 ほか 『池守・池上』 昭和59年3月 埼玉県教育委員会

IV まとめ

大畑 I—2 遺跡は、竜角寺の南に広がる大畑遺跡の一面で、調査部分は遺跡全体の極めて限られた範囲でしかない。しかし、すでに調査が進められていた大畑 I 遺跡の成果をさらに補足する、多くの遺構と遺物を検出することができた。その大畑 I 遺跡は、大規模な掘立柱建物群の検出と、隣接する向台遺跡で出土した遺物の特殊性から、古代下総国埴生郡衙推定地と考えられるようになった遺跡である。大畑 I 遺跡の調査も路線内という東西に細長い調査区であったため、南北の状況については明らかにし得ない点が多かった。今回の調査で、大畑 I 遺跡の北側の状況を少しでも明らかにすることができたことは、大きな意義があったといえる。

発掘調査は 2 地点の本調査部分と、トレンチによる確認調査を実施した。調査面積は 900m²強である。面積の割には数多くの遺構が存在していた。大畑 I 遺跡では古墳時代後期の住居跡群が検出され、その後に掘立柱建物群が出現している。当初から大畑 I—2 遺跡でも同様な遺構が検出されるであろうことは、想像するに難くない状況であった。そして調査によって全く同じような傾向が捉えられたのである。具体的には古墳時代の集落の続きと、郡衙の一部が確認されたことである。

古墳時代の住居跡は A 地点で 1 軒、B 地点で 12 軒が検出された。この 13 軒の住居跡は、出土遺物からすべて鬼高期に比定されるものである。また、トレンチ内で約 30 軒の存在が確認されたが、それらも鬼高期として考えられる。A 地点は北東から入る谷に面する位置で、そこで検出された 501 号跡は、集落全体のなかでも最も西側に位置する住居跡の 1 軒である。B 地点では 12 軒の住居跡が集中して存在している。重複は大変著しく、502・503・505 号跡が切り合い、また 506～514 号跡が複雑な新・旧関係を有している。この切り合い関係を土層断面の観察などから整理すると下記のようなになる。

502→503	505→503	
508→507→506		510→506
513→510→512→511		
508→514→509		
513→510→514		(旧→新)

大畑遺跡のなかでの古墳時代の遺構分布を第 44 図に示してみた。これでわかるように、大畑 I—2 遺跡の住居跡の密度は、大畑 I 遺跡のそれよりも高いものである。古墳時代の集落が、

IV まとめ

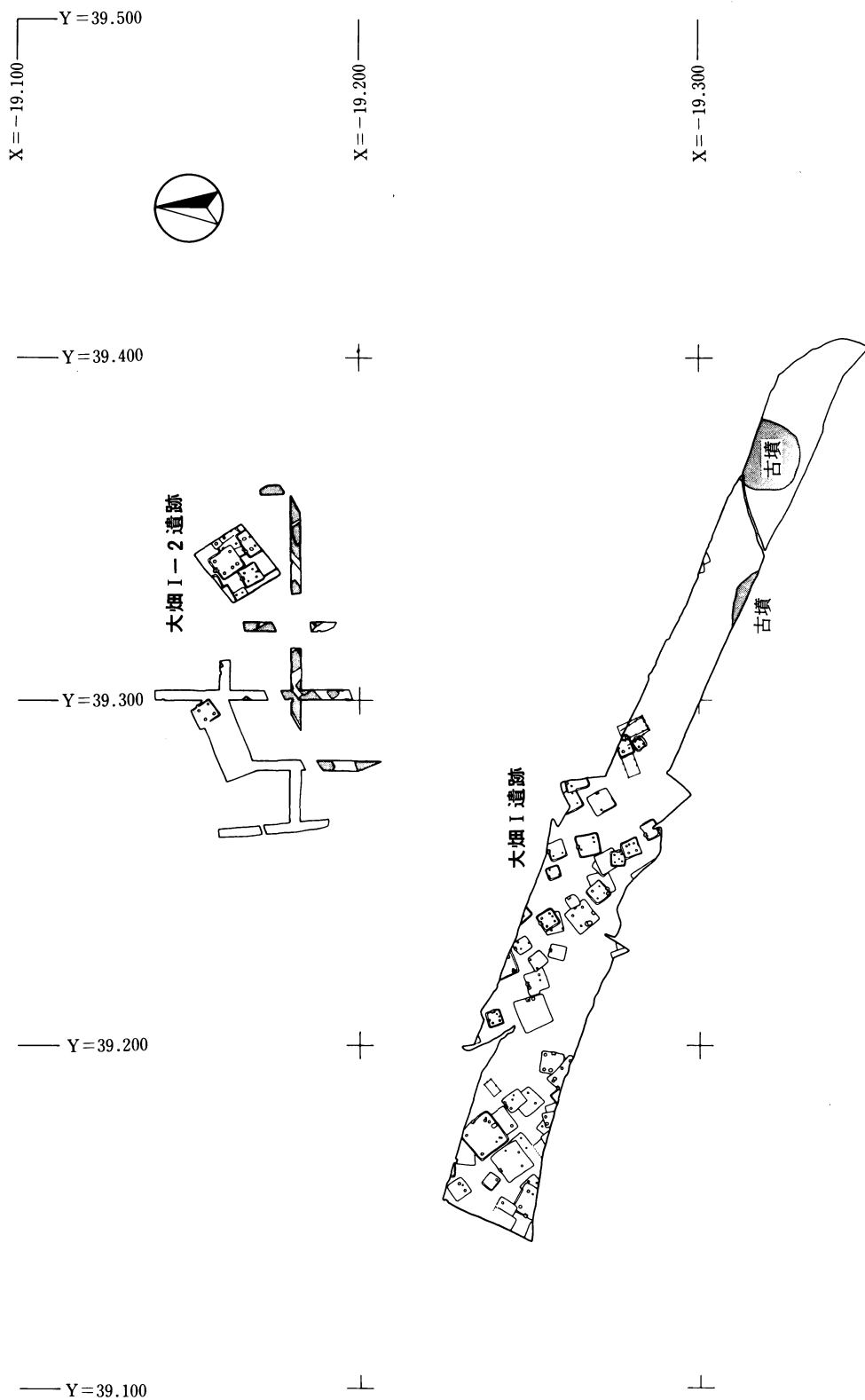
竜角寺古墳群の立地する台地の西端部に展開していたことは、大畑 I 遺跡で明らかになっていた。しかし、大畑 I 遺跡の南側はゆるやかな谷が形成されており、集落の中心的部分は北側に広がるのではないかと考えていた。大畑 I—2 遺跡の遺構検出状況はそれを実証するものである。

古墳時代の遺物は土師器、須恵器、鉄器、石製品、土製品が出土している。須恵器は僅かで、土師器の出土量も決して多いとはいえないが、住居跡の切り合いを考えると土器編年の上で少なからず有効となるであろう。鉄器は506・509・514号跡で出土している。特に506号跡から鎌2点、刀子2点、それと器種不明の小破片1点を含め合計5点が出土したことは注目される。そのほか509号跡で刀子2点、514号跡で鉄鎌1点である。石製品は506号跡で有孔円板と丸玉が各1点、507号跡で有孔円板1点が出土している。土製品は勾玉、土玉、紡錘車である。土製勾玉は501・510号跡で1点ずつ、506号跡で2点の計4点が出土した。土玉は506～512号跡とグリッドから出土しており、大・小の二種類が認められる。

古墳時代の住居跡は、506号跡などを最後に全く姿を消してしまう。それに代わる遺構が掘立柱建物跡である。確認した掘立柱建物跡は、B地点で8棟、トレンチ内で11棟である。調査区が狭いため建物の規模が判明したのは2棟のみである。その2棟は3間×2間の605号跡と、5間×(2間)の613号跡である。建物跡には数回の建て替えが認められる。B地点で検出した8棟のうち、5棟と2棟が重複しており、トレンチ内でも4棟と3棟の切り合い関係が認められた。大畑 I 遺跡でも5期の建て替えが確認されて、かなりの建て替えが行なわれたことが明らかになっている。しかしその規模について、大畑 I 遺跡と I—2 遺跡を比較すると、傾向として I—2 遺跡には大形の建物跡が無く、柱穴の掘り方にしても小規模であることが異なる点としてあげられる。A地点には建物跡の存在が認められず、第45図にみるように大畑 I 遺跡の西端部も同じように掘立柱建物跡が検出されていない。また、トレンチ内の掘立柱建物群以西も同様に意識的に建物が構築されなかったことが窺われる。こうしたことは、I—2 遺跡内の掘立柱建物群が大畑 I 遺跡と一体であることを示すものである。

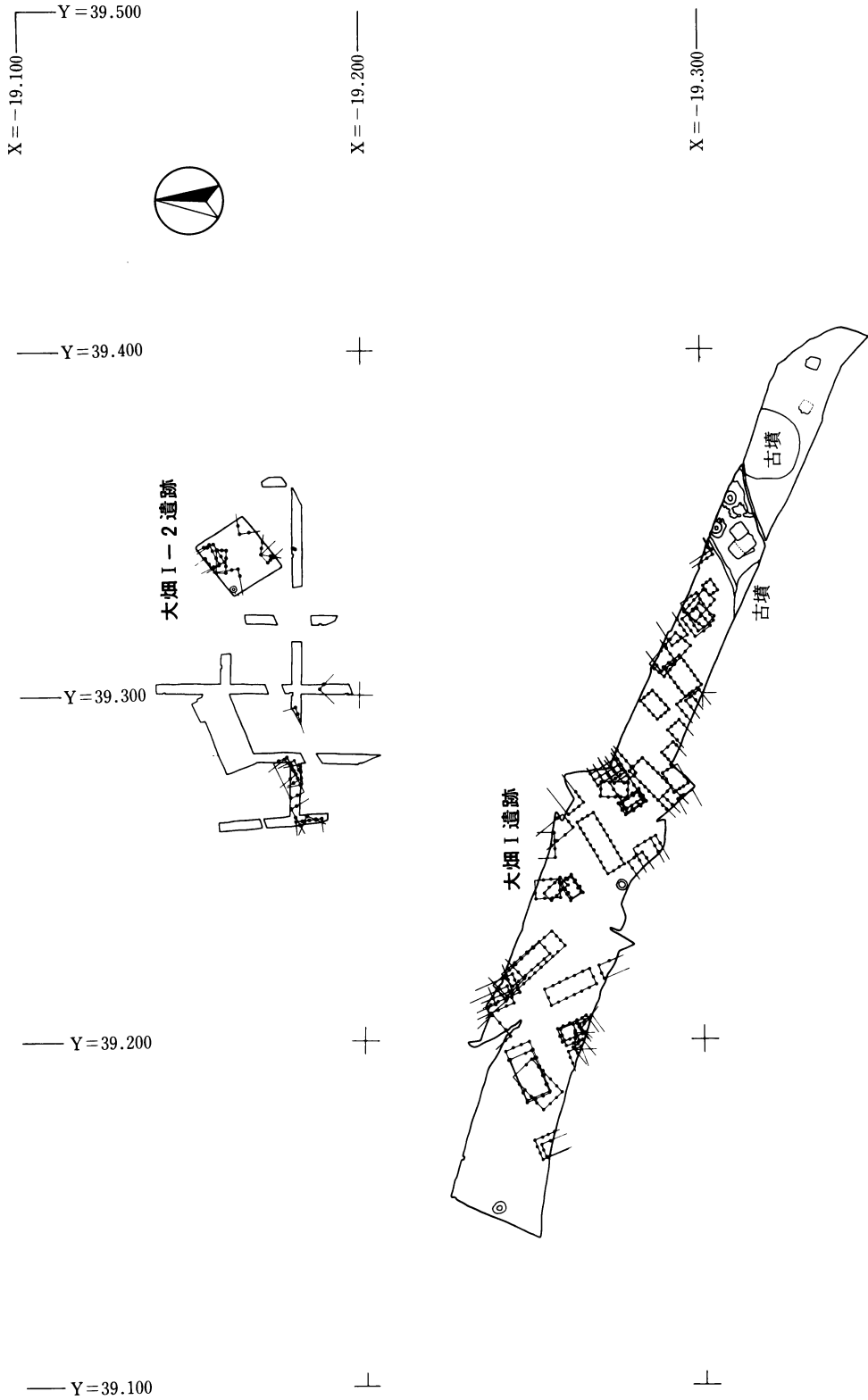
これだけの規模を有する掘立柱建物群が検出されるのは、地方においては郡衙以外には考えられないことである。今回の調査でこの大畑 I と I—2 遺跡の性格を郡衙推定地として裏付けする資料が出土した。B地点で出土した「厨」と書かれた2点の墨書土器である。この土器がB地点で使用されていたとは断定できないが、近くに郡衙に置かれていた厨屋、あるいは厨家が存在する可能性を暗示している。しかし調査範囲の狭さのため、政庁も未確認であるし、また郡衙域も不明である。今後はこれらの問題点を究明していくことが大きな課題である。

以上栄町大畑 I—2 遺跡の発掘調査によって得られた成果と課題について簡単に述べ、まとめたい。



第44図 古墳時代遺構配置図 (1/2,000)

IV まとめ



第45図 奈良・平安時代遺構配置図 (1/2,000)

付 出土土器観察表

凡例

1. 本表は、本文中に実測図を示したすべての土器について、その所見を簡単にまとめたものである。
2. 遺存状態については、特に部位を記していない場合は図示したところの遺存度を示す。
3. 口径・器高・底径の単位はそれぞれcmで、()は復元した数値、〈 〉は現存器高を示し、測定のできないところは—とした。

挿図番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	1. a:胎土 2. 器形の特徴 3. 調整そのほか	b:焼成	c:色調
第19図 501—1	杯	口縁部の 1/4の み欠損	10.8	1. a:細砂粒を含む 2. 丸底で稜が作り出され、口縁部は内傾して立ち上がる。 3. 外面体部ヘラケズリ後ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	b:良	c:外面淡茶褐色・内面黒褐色
			4.4			
			—			
			10.1			
			4.1			
2	杯	1/4	—	1. a:細かい雲母を多く含む 2. 丸底で稜が作り出され、口縁部は短く内傾して立ち上がる。 3. 口縁部ヨコナデ。体部は外面ヘラケズリ後ヘラナデ。内面ナデ。	b:普通	c:黄褐色
			10.1			
			4.1			
			—			
			10.1			
3	杯	口縁部の 一部 を欠損	9.6	1. a:細砂粒、雲母を多く含む 2. 半球状の体部から口縁部は僅かに内傾して立ち上がる。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後軽いミガキ。内面軽いミガキ。	b:良	c:暗褐色
			4.4			
			—			
			8.8			
			3.3			
4	杯	口縁部の 一部 を欠損	—	1. a:細砂粒を多く含む 2. 偏平気味の底部から内彎して、口縁部は稜から短く内傾する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後軽いミガキ。内面ナデ。	b:やや不良	c:暗褐色
			8.8			
			3.3			
			—			
			8.8			
5	杯	1/2	11.3	1. a:砂粒を多く含む粗な状態 2. 体部は全体に半球状の丸味をもつ。稜は作られない。 3. 体部外面ヘラケズリ後ナデ。内面ヨコナデ後赤彩。	b:やや不良	c:黄褐色・内面赤彩
			3.9			
			—			
			9.8			
			〈4.7〉			
6	碗	1/4	—	1. a:砂粒を多く含む 2. 半球状の体部から口縁部も弱い稜から内彎する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ともナデ。	b:普通	c:淡茶褐色
			9.8			
			〈4.7〉			
			—			
			9.8			
第20図 503—1	杯	1/2	10.8	1. a:砂粒を多く含む 2. 口縁部は半球状の体部からそのまま内彎気味に立ち上がる。 3. 口縁部ヨコナデ。体部は外面ヘラミガキ、内面ナデ。	b:やや不良	c:暗褐色
			3.9			
			—			
			(15.8)			
			(4.5)			
2	杯	1/4	—	1. a:雲母・スコリアを含む 2. 体部は大きく開きながら内彎し、口縁部は直立する。 3. 外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面全体にヘラミガキ。	b:普通	c:外面赤褐色・内面淡灰褐色
			(15.8)			
			(4.5)			
			—			
			(15.8)			
3	鉢	1/8	〈6.1〉	1. a:雲母を多く含む 2. 口縁部はゆるやかに外反し、体部との境に弱い稜を作る。 3. 口縁部外面ヨコナデ、そのほかはヘラミガキ。	b:普通	c:暗褐色
			—			
			—			
			(17.8)			
			〈13.7〉			
4	鉢	1/4	—	1. a:砂粒を多く含む 2. 体部はゆるやかに内彎しながら立ち上がる。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	b:やや不良	c:暗茶褐色
			(17.8)			
			〈13.7〉			
			(8.2)			
			(17.8)			
5	甕	1/8	—	1. a:緻密 2. 口縁部は端部で内彎し尖り気味となる。 3. 波状文が施文される。	b:堅緻	c:暗灰色
			—			
			—			
			(13.7)			
			—			

付 出土土器観察表

挿図番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	1. a:胎土 b:焼成 c:色調 2. 器形の特徴 3. 調整そのほか
第21図 505-1	杯	¼	(13.7) 5.2 —	1. a:砂粒を多く含む b:普通 c:赤褐色 2. 半球状の体部から口縁部は直立気味に立ち上がる。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ともナデを施し、全体に赤彩。
2	杯	ほぼ 完形	13.3 5.9 —	1. a:砂粒を多く含む b:やや不良 c:淡茶褐色 2. 全体に丸味をもち、口縁部も僅かに内彎する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。
3	手捏	½	(4.7) <4.0> 4.6	1. a:砂粒を多く含む b:普通 c:赤褐色 2. 平底から強く折れて、体部から口縁部は直立する。 3. 全面にナデ。
4	杯	口縁部 ½欠損	(7.3) <5.7> —	1. a:砂粒を多く含む b:普通 c:黄褐色 2. 丸底で体部は深く、口縁部は直立する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ともヘラケズリ。
5	高杯	裾部¼ 欠損	15.2 10.6 (10.4)	1. a:雲母・砂を含む b:やや不良 c:赤茶褐色・断面黄褐色 2. 杯部口縁部はゆるく長く外反。裾部は水平方向に開く。 3. 口縁部ヨコナデ。杯内面底部ヘラケズリ。赤彩。
6	高杯	¼	(15.0) <7.7> —	1. a:砂・スコリアを含む b:普通 c:赤茶褐色・断面茶褐色 2. 杯部は下半で内彎し、中位からゆるやかに外反する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ナデで赤彩を加える。
7	高杯	⅔	— <6.8> 9.2	1. a:精選 b:普通 c:茶褐色 2. 接合部から開きながら下降し、裾は短く開く。 3. ヘラケズリ後ヘラミガキを施し赤彩する。
8	甕	口縁部 全周	20.5 <10.7> —	1. a:砂を多く含む b:普通 c:赤褐色 2. 口縁部は頸部からゆるやかに外反して立ち上がる。 3. 口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。
9	甕	⅓	— — —	1. a:砂を多く含む b:不良 c:暗茶褐色 2. 球形の胴部で最大径を中位に設ける。 3. 胴部上半・内面ヘラナデ。そのほかヘラケズリ。
10	甕	⅔	15.5 25.6 7.4	1. a:砂を多く含む b:普通 c:赤褐色 2. 球状胴で頸部で内傾し、口縁部はゆるく外反。 3. 口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。
第23図 506-1	杯	⅓	(11.4) — —	1. a:白色の細粒を多く含む b:堅緻 c:灰色 2. 体部は丸味をもち、受部は張り出し内傾して立ち上がる。 3. 体部下半、回転ヘラケズリ。
2	杯	完形	10.6 4.2 —	1. a:雲母を多く含む b:良 c:暗褐色 2. 丸底で稜が作り出され、口縁部は僅かに内傾する。 3. 全体にヘラミガキ。
3	杯	完形	10.6 4.0 —	1. a:雲母を多く含む b:普通 c:茶褐色 2. 丸底で稜が作り出され、口縁部は短く直立する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ヘラミガキ。
4	杯	⅓	(11.6) — —	1. a:砂を多く含む b:不良 c:暗茶褐色 2. 丸底で稜が張り出し、口縁部は短く直立する。 3. 全体にヘラミガキ。
5	杯	完形	10.2 4.8 —	1. a:雲母を多く含む b:普通 c:黒褐色 2. 丸底半球状で稜が張り出し、口縁部は内傾する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ、内面ナデ。

挿図番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	1. a:胎土 2. 器形の特徴 3. 調整そのほか	b:焼成	c:色調
第23図 506-6	杯	⅔	(11.0) (4.1) —	1. a:スコリアを多く含む 2. 器形の特徴 3. 調整そのほか	b:良好	c:暗茶褐色
7	杯	⅓	11.4 <4.3> —	1. a:砂を多く含む 2. 半球状の体部で弱い稜から口縁部は短く外反する。 3. 口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヘラミガキ。	b:不良	c:暗褐色
8	杯	⅓	(15.0) (4.1) —	1. a:雲母を含む 2. 体部は全体にゆるやかに内彎しながら開く。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ともヘラナデ。	b:普通	c:暗褐色
9	杯	⅓	(17.0) — —	1. a:砂・雲母を含む 2. 口縁部は丸味のある稜から内傾して立ち上がる。 3. 全体にヘラミガキ。	b:普通	c:暗茶褐色
10	杯	⅓	(10.0) (4.1) —	1. a:スコリアを多く含む 2. 平底に近い底部から体部は僅かに内彎して立ち上がる。 3. 外面ナデ。内面ヘラミガキ。	b:普通	c:暗茶褐色
11	杯	⅓	(10.7) (4.8) —	1. a:スコリアを多く含む 2. 平底で体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は稜から内傾する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ、内面ナデ。	b:不良	c:暗褐色
12	蓋	⅓	(11.4) — —	1. a:白色粒を多く含む 2. 天井部は半球状で、体部と受口の境に浅い沈線が付く。 3. 天井部回転ヘラケズリ。	b:堅緻	c:灰色
13	壺	⅓	(7.0) <6.9> —	1. a:精選 2. 球状の胸部で肩部に段状の稜が付き口縁部は短く直立する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ、内面ナデ。	b:普通	c:茶褐色
14	甕	⅓	(22.3) <30.9> —	1. a:石英・長石粒を多く含む 2. 胸部中位に張りをもち、口縁部はゆるく外反し端部はつまみ上げられる。 3. 口縁部ヨコナデ。胸部外面下半ヘラケズリ。内面ナデ。	b:普通	c:黄褐色・暗茶褐色
第26図 507-1	杯	完形	11.3 3.9 —	1. a:精選 2. 偏平気味の丸底で稜が張り出し、口縁部は内傾して立ち上がる。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ヘラミガキ。	b:良	c:暗茶褐色
2	杯	完形	11.7 3.8 —	1. a:緻密 2. 底部は偏平気味に開き、中位で内彎し口縁部は稜から内傾する。 3. 全体にヘラミガキ。	b:良	c:茶褐色
3	杯	⅓	(13.6) — —	1. a:雲母を多く含む 2. 体部はゆるやかに内彎して開き、口縁部は稜から内傾する。 3. 口縁部、体部内面ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ。	b:普通	c:茶褐色
4	杯	⅓	(13.3) — —	1. a:雲母を多く含む 2. 体部は内彎し、稜が張り出し口縁部は内傾して立ち上がる。 3. 全体にヘラミガキ。	b:普通	c:暗褐色
5	杯	完形	13.5 4.1 —	1. a:緻密 2. 全体にゆるやかに内彎し、口縁部は短く直立する。 3. 体部外面ヘラミガキ。内面ヨコナデ後ヘラミガキ。	b:良	c:茶褐色
6	杯	底部損	13.0 <3.6> —	1. a:スコリアを多く含む 2. 全体にゆるやかに内彎し、口唇端部が尖り気味に直立する。 3. 口縁部外面がヨコナデでそのほかはヘラミガキ。	b:良	c:黄褐色

付 出土土器観察表

挿図番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	1. a:胎土 b:焼成 c:色調 2. 器形の特徴 3. 調整そのほか
第26図 507-7	杯	1/4	(13.5) — —	1. a:雲母を多く含む b:普通 c:茶褐色 2. 全体にゆるやかに内彎しながら開き口縁部もそのまま。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ、内面ナデ。
8	鉢	1/4	(16.5) — —	1. a:砂を多く含む b:不良 c:黒褐色 2. 体部は直線的に開き、口縁部は僅かに折れて立ち上がる。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ヘラナデ。
9	甕	胴部上 半 1/2	13.2 16.8 6.0	1. a:砂を多く含む b:不良 c:暗茶褐色 2. 胴上半部に張りを有し、口縁部は僅かに外反して開く。 3. 口縁部ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面ナデ。
第27図 508-1	杯	2/5	(13.0) — —	1. a:スコリアを含む b:良 c:茶褐色 2. 体部との境に弱い稜を作り、口縁部は僅かに内彎する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ、内面ナデ。赤彩。
2	杯	1/6	(12.2) — —	1. a:雲母を含む b:普通 c:淡茶褐色 2. 体部から口縁部まで全体に内彎する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ともナデを施し赤彩する。
3	杯	1/5	(14.3) — —	1. a:白色微細粒を多く含む b:良 c:茶褐色 2. 体部は僅かに内彎しながら開き、口縁部は内側に稜が生じる。 3. 口縁部外面ヨコナデ。体部外面、内面全体ヘラミガキ。
4	高杯	杯部2/5 欠損	(14.9) <9.4> 9.7	1. a:雲母を多く含む b:普通 c:赤茶褐色・断面茶褐色 2. 杯部口縁部は長く外反し、脚部は短く下降し、裾は水平方向に開く。 3. 口縁部ヘラナデ。体部外内面ともナデを施し赤彩。
5	高杯	1/4	(17.8) — —	1. a:雲母を多く含む b:普通 c:赤茶褐色・断面茶褐色 2. 体部はゆるやかに開き、口縁部は長く開いて立ち上がる。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ともヘラミガキ後赤彩。
6	高杯	1/4	(15.4) — —	1. a:雲母を多く含む b:良 c:赤茶褐色・断面暗茶褐色 2. 全体に内彎しながら開き、口縁部は短く内傾する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ともヘラミガキ後赤彩。
7	高杯	1/5	— <4.1> (10.0)	1. a:砂を多く含む b:普通 c:赤褐色 2. 脚部は僅かに開きながら下降し、裾は水平方向に開く。 3. 裾部外面ヨコナデ。そのほかにナデを施し、外面に赤彩。
8	鉢	完形	13.0 6.8 4.4	1. a:精選 b:普通 c:赤茶褐色 2. 体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は直立気味に開く。 3. 口縁部ナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ナデで赤彩。
9	鉢	完形	15.4 9.7 —	1. a:スコリア・雲母を多く含む b:普通 c:暗赤褐色 2. 丸底半球状の体部で、口縁部は弱い稜を作って内傾する。 3. 口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。
10	甕	1/4	— — —	1. a:雲母を多く含む b:普通 c:茶褐色 2. 肩部に強い張りを持ち、頸部は直立する。 3. 全体にナデ調整。
第28図 509-1	鉢	3/4	21.2 10.25 8.4	1. a:砂・スコリアを含む b:良 c:明茶褐色 2. 安定した底部から体部は僅かに内彎し、口縁部は水平方向に開く。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ。
第29図 510-1	杯	1/2	15.6 — —	1. a:雲母を多く含む b:良 c:茶褐色 2. 偏平気味の丸底で、強い稜から口縁部は長く外反して開く。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ヘラケズリ後ナデ。

挿図番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	1. a:胎土 2. 器形の特徴 3. 調整そのほか	b:焼成	c:色調
第29図 510-2	鉢	完形	7.5 5.3 4.7	1. a:砂を多く含む 2. 体部は直線的に立ち上がり、稜から口縁部は短く外反する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ともヘラナデ。	b:良	c:赤褐色
3	甕	完形	20.2 30.5 9.5	1. a:長石・石英粒を多く含む 2. 胴部は最大径を中位にもつ球胴で、口縁部は大きく外反する。 3. 口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラミガキ、内面ナデ。	b:やや不良	c:茶褐色
第30図 511-1	杯	完形	11.2 4.4 —	1. a:雲母を多く含む 2. 偏平気味の丸底で、体部中位で内彎し、口縁部は稜から僅かに内傾する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ、下端ヘラケズリ、内面ナデ。	b:良	c:茶褐色
2	杯	口縁部 欠損	— <4.0> —	1. a:雲母を多く含む 2. 底部から体部にかけて全体に内彎し、稜が作り出される。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	b:良	c:茶褐色
第31図 512-1	杯	1/2	(10.8) — —	1. a:雲母を多く含む 2. 体部は全体にゆるやかに内彎し、稜から口縁部は直立する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ。	b:良	c:暗褐色
第32図 513-1	高杯	1/4	— — (10.2)	1. a:砂を多く含む 2. 脚部は全体に「ハ」の字状に開き、裾部はあまり開かない。 3. 外面ヘラミガキ。脚内面ナデ。	b:良	c:赤褐色
2	高杯	1/4	— — 9.8	1. a:砂を多く含む 2. 脚部は開きながら下降し、裾部は短く水平方向に開く。 3. 外面ヘラケズリ後ヘラミガキを施し赤彩。内面ナデ。	b:良	c:赤褐色
3	鉢	1/2	— — —	1. a:砂を多く含む 2. 体部は下端に丸味をもち、しだいに開きながら立ち上がる。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外内面ともナデ。	b:良	c:茶褐色
第33図 514-1	杯	口縁部 欠損	— <3.8> —	1. a:雲母を多く含む 2. 底部から体部は全体に内彎し、口縁部との境に稜を作らない。 3. 体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	b:良	c:茶褐色
2	高杯	脚部 のみ	— — —	1. a:雲母を多く含む 2. 脚部はあまり開かず下降する。 3. 外面ヘラケズリ後ナデを施し赤彩。脚部内面ヘラナデ。	b:良	c:赤茶褐色・断面淡褐色
3	鉢	1/2	(10.2) 5.8 4.1	1. a:雲母を多く含む 2. 木葉痕を残す平底から、体部はゆるやかに内彎して立ち上がる。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ。内面ナデ。	b:良	c:茶褐色
4	甕	1/2	(12.0) — —	1. a:砂を多く含む 2. 肩部に段状の稜が作り出され、口縁部は急激に外反する。 3. 口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラナデ。	b:不良	c:黒褐色
第34図 D501-1	杯	1/2	(12.1) — —	1. a:雲母・スコリアを含む 2. 体部と口縁部の境に稜が作られ、口縁部は僅かに内傾して立ち上がる。 3. 体部内面から口縁部ヘラミガキ。体部外面ヘラケズリ後ナデ。	b:良	c:暗茶褐色
2	杯	1/2	15.6 4.8 8.2	1. a:雲母を多く含む 2. 体部下半で丸味をもち、口縁部は肥厚して僅かに外反する。 3. 体部下端及び底部周辺回転ヘラケズリ。底部中央無調整。	b:良	c:暗茶褐色
3	杯	1/2	(14.8) — —	1. a:雲母を多く含む 2. 体部は開きながら立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。 3. 体部ヘラミガキ。内面黒色処理。	b:良	c:茶褐色

付 出土土器観察表

挿図番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	1. a:胎土 b:焼成 c:色調 2. 器形の特徴 3. 調整そのほか
第34図 D501-4	蓋	1/2	— — —	1. a:雲母を多く含む b:良 c:灰色 2. 天井部は水平方向に開き、中央に疑宝珠形つまみが付く。 3. つまみ周辺の天井部外面回転ヘラケズリ。
5	甕	1/2	(30.1) — —	1. a:雲母を多く含む b:不良 c:暗灰褐色 2. 口縁部は強く外反し、端部は内面に折り返され平端面をつくる。 3. 口縁部ヨコナデ。胴部外面平行叩き、内面ヘラナデ。
6	甕	破片	— — —	1. a:長石粒を多く含む b:堅緻 c:黒灰色 2. 長くゆるやかに外反し、口縁端部は折り返される。 3. 2条の沈線間に燃糸圧痕の列点文を施す。
7	甕	破片	— — —	1. a:精選 b:堅緻 c:青灰色 2. 口縁部は折り返され、端部は内傾して尖り気味となる。 3. 平行沈線間に斜方向の連続した短沈線文を施す。
8	甕	1/2	(26.2) — —	1. a:雲母を多量に含む b:普通 c:暗灰褐色 2. 胴部上半に張りを有し、口縁部は大きく外反して開き端部を折る。 3. 口縁部ヨコナデ。胴部外面平行叩き、内面ナデ。
第35図 土師器-1	杯	1/4	(11.0) — —	1. a:細砂粒を含む b:良 c:黒色 2. 丸底で体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部は内傾する。 3. 口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部最終的にヘラミガキ。
2	杯	1/4	(11.0) — —	1. a:雲母を多く含む b:やや不良 c:暗黄褐色 2. 体部はゆるく内彎し、弱い稜から口縁部は僅かに内傾する。 3. 全体に最終的にヘラミガキ。
3	杯	1/4	(13.0) — —	1. a:雲母を多く含む b:良 c:茶褐色 2. 底部から体部は全体に内彎し、稜から口縁部は内傾する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ミガキ。
4	杯	1/4	(10.0) — —	1. a:雲母を多く含む b:やや良 c:灰褐色 2. 底部から体部は全体に内彎し、稜から口縁部は直立する。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ。
5	杯	1/2	15.0 <5.9> —	1. a:雲母を多く含む b:やや不良 c:暗赤褐色 2. 半球状の体部から口縁部はゆるやかに外反して開く。 3. 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。
6	杯	完形	13.0 3.4 —	1. a:スコリアを多く含む b:やや良 c:茶褐色 2. 半球状の体部で口縁部もそのまま開く。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ。
7	杯	3/5	14.8 <5.9> 5.4	1. a:精選 b:良 c:茶褐色 2. 不安定な底部から体部は僅かに内彎しながら開き、口縁端部で直立。 3. 口縁部ヨコナデ後ミガキ。体部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ミガキ。
8	杯	1/4	(14.8) (4.5) —	1. a:雲母を多く含む b:良 c:茶褐色 2. 底部は僅かに曲面となり、体部下半で内彎しそのまま立ち上がる。 3. 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後軽いミガキ、内面ナデ。
9	杯	1/2	12.5 (3.4) 7.1	1. a:砂を多く含む b:普通 c:黄褐色 2. 平底から体部は僅かに内彎して立ち上がり、口縁端部がつままれる。 3. 外面全体にヘラケズリ後荒いミガキ。内面全体にヘラミガキ。
10	杯	1/4	(11.2) (3.6) (8.6)	1. a:スコリアを含む b:良 c:明茶褐色 2. 僅かに曲面となる底部から、体部は開きながら浅く立ち上がる。 3. 外面全体にヘラケズリ後荒いミガキ。内面全体にヘラミガキ。

挿図番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	1. a:胎土 b:焼成 c:色調 2. 器形の特徴 3. 調整そのほか
第35図 土師器—11	杯	完形	12.1 3.7 7.0	1. a:砂を多く含む b:良 c:赤褐色 2. 体部下端の稜から体部は僅かに内彎しながら立ち上がる。 3. 外面体部ヘラケズリ後ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。
12	杯	⅓	(12.5) (3.5) (7.8)	1. a:スコリアを含む b:良 c:暗黄褐色 2. 上げ底気味の底部から体部はほんの僅かに内彎して立ち上がる。 3. 外面底部ヘラケズリ、体部ヘラケズリ後ミガキ。内面ミガキ。
13	杯	⅓	(14.7) (5.9) (10.9)	1. a:スコリアを含む b:良 c:明茶褐色 2. 口径に比して底径も大きく、体部は深めに内彎して立ち上がる。 3. 体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ。内面全体にヘラミガキ。
14	杯	¼	(13.2) (3.6) (9.5)	1. a:スコリアを含む b:良 c:赤茶褐色 2. 底部は若干曲面となり、体部は浅く直線的に立ち上がる。 3. 底部全面手もちヘラケズリ。内外面赤彩。ロクロ調整。
15	杯	⅔	(12.8) (3.6) (7.0)	1. a:砂を多く含む b:良 c:淡茶褐色 2. 体部は中位で内彎し、口唇部はやや肥厚する。 3. 底部全面及び体部下端手もちヘラケズリ。ロクロ調整。
16	杯	⅔	(12.5) (3.5) (7.0)	1. a:スコリアを含む b:普通 c:茶褐色 2. 体部下半に丸味を有し、中位から直線的に開く。 3. ロクロ調整。油煙の付着あり。
17	杯	½	12.3 (3.5) (6.5)	1. a:スコリアを含む b:良 c:淡茶褐色 2. 体部は中位で僅かに内彎し、そこから直線的に開く。 3. 底部回転糸切り後全体に手もちヘラケズリ。
18	杯	口縁部 ⅓欠損	11.5 3.9 6.7	1. a:雲母を多く含む b:良 c:黒褐色 2. 体部は中位から直線的に開き、口縁端部が短く外反する。 3. 底部回転糸切り後無調整。体部下端手もちヘラケズリ。ロクロ調整。
19	杯	⅓	(11.8) (3.8) (8.1)	1. a:雲母を多く含む b:やや不良 c:暗黄褐色 2. 口径に比して底径も大きく、体部は中位で内彎して立ち上がる。 3. 底部中央回転糸切り後無調整。底部周辺回転ヘラケズリ。
20	杯	⅔	12.2 3.9 7.0	1. a:雲母を多く含む b:良 c:茶褐色 2. 体部下半に丸味を有し、そこから直線的に開き口縁部が僅かに外反する。 3. 底部回転糸切り後無調整。体部下端手もちヘラケズリ。ロクロ調整。
21	杯	体部⅓	(12.2) (4.0) 5.8	1. a:雲母を多く含む b:良 c:淡褐色 2. 口径に比して底径が小さく、体部は開きながら立ち上がる。 3. 底部全面及び体部下端回転ヘラケズリ。
22	杯	¼	(18.2) (5.3) (8.3)	1. a:スコリア・白色細粒を多く含む b:良 c:茶褐色 2. 体部は中位から直線的に開き、口縁端部が僅かに外反する。 3. 底部中央回転糸切り無調整。底部周辺及び体部下端手もちヘラケズリ。
23	手捏	⅓	(6.1) (2.1) —	1. a:砂を多く含む b:良 c:淡褐色 2. 器厚が全体に厚く、全体に丸味をもって開く。 3. 全体に指頭によるナデ。
第36図 土師器—24	甕	⅓	(10.6) (32.6) (6.6)	1. a:石英・長石粒を多く含む b:普通 c:茶褐色 2. 胴部最大径を上位に置き、口縁部は急激に外反する。 3. 口縁部ヨコナデ。胴部外面下半細かいヘラケズリ。内面ナデ。
25	甕	⅓	(22.2) — —	1. a:石英・長石・雲母を多く含む b:普通 c:茶褐色 2. 口縁部は急激に外反し、端部はつまみ上げられる。 3. 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデで外面はナデを加える。

付 出土土器観察表

挿図番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	1. a:胎土 b:焼成 c:色調 2. 器形の特徴 3. 調整そのほか
第36図 土師器—26	甕	破片	— — —	1. a:砂を多く含む b:やや不良 c:暗褐色 2. 口縁部はゆるやかに外反。突起が1個肩部に遺存する。 3. 外面ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。
第37図 須恵器—1	杯	⅛	(9.5) (4.5) —	1. a:長石細粒を含む b:堅緻 c:暗灰色 2. 口縁部は内傾し、端部は凹状となる。受部は水平に張り出す。 3. 底部回転ヘラケズリ。
2	杯	⅔	14.2 4.3 7.4	1. a:雲母を多く含む b:不良 c:灰褐色 2. 内面のおさえが比較的強く、体部は僅かに内彎して立ち上がる。 3. 回転糸切り後体部下端及び底部全面手もちヘラケズリ。
3	杯	¼	(14.0) (4.2) (8.2)	1. a:雲母を多く含む b:やや不良 c:灰色 2. 体部は直線的に立ち上がり、ロクロ目がはっきり付く。 3. 底部回転糸切り後体部下端及び底部全面手もちヘラケズリ。
4	杯	⅓	(13.4) (3.5) (8.0)	1. a:雲母を多く含む b:良 c:淡灰色 2. 体部は浅く、直線的に開きながら立ち上がる。 2. 底部回転糸切り後体部下端及び底部全面手もちヘラケズリ。
5	杯	¼	(13.2) (3.5) (8.0)	1. a:雲母を多く含む b:やや良 c:灰色 2. 体部は直線的に開きながら立ち上がり、口唇部が肥厚する。 3. 底部回転糸切り後体部下端及び底部全面手もちヘラケズリ。
6	杯	⅓	(13.8) (3.9) (7.5)	1. a:石英・長石粒を多く含む b:堅緻 c:暗灰色 2. 体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。 3. 底部回転糸切り後体部下端及び底部全面手もちヘラケズリ。
7	杯	⅓	(13.8) (3.9) (8.0)	1. a:石英・長石粒を多く含む b:良 c:暗灰色 2. 体部は直線的に開き、口縁部はゆるやかに外反する。 3. 体部下端及び底部全面手もちヘラケズリ。
8	杯	⅓	(12.8) (3.8) (8.3)	1. a:石英・長石粒を多く含む b:良 c:青灰色 2. 底部は若干曲面となり、体部は直線的に開く。 3. 底部全面手もちヘラケズリ。
9	杯	¼	(14.4) (4.2) (8.7)	1. a:砂を多く含む b:やや良 c:灰白色 2. 体部内面のおさえは強く、直線的に開き口唇部が肥厚する。 3. 底部回転糸切り後全面回転ヘラケズリ。
10	杯	⅓	(14.5) (4.5) (9.1)	1. a:精選 b:良 c:淡灰色 2. 体部はロクロ目が弱く直線的に開き、口縁部はゆるやかに外反する。 3. 体部下端及び底部全面回転ヘラケズリ。
11	蓋	⅓	(8.4) — —	1. a:白色細粒を含む b:良 c:青灰色 2. 天井部はゆるやかに丸味をもち、かえりを作り出す。 3. ロクロ調整。
12	蓋	⅔	— — —	1. a:砂を含む b:堅緻 c:青灰色 2. 天井中央部は比較的偏平で、擬宝珠形のつまみが付く。 3. 天井中央部周辺回転ヘラケズリ。
13	蓋	⅔	16.5 2.6 —	1. a:雲母を多く含む b:良 c:灰色 2. 天井部は大きく偏平となり、身受け部は下に折り曲げられる。 3. 天井部つまみ周辺回転ヘラケズリ。
14	蓋	天井部 のみ	— <2.8> —	1. a:石英・長石粒を多く含む b:普通 c:灰黒色 2. 天井部は中央で窪み気味となり、開いて途中から丸味をもつ。 3. 天井部つまみ周辺回転ヘラケズリ。

挿図番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	1. a:胎土 b:焼成 c:色調 2. 器形の特徴 3. 調整そのほか
第37図 須恵器一15	蓋	½	— — —	1. a:砂を多く含む b:やや良 c:灰白色 2. 天井部は小さく平坦部を作り、ヘラケズリによる稜を強く残す。 3. 天井部つまみ周辺回転ヘラケズリ。
16	蓋	¾	— — —	1. a:長石・石英・雲母を多く含む b:不良 c:灰褐色 2. 天井部中央は窪み気味となり、扁平なつまみが付く。 3. 天井部つまみ周辺回転ヘラケズリ。
17	瓶	½	(11.3) — —	1. a:精選 b:堅緻 c:灰褐色 2. 口縁部は大きく外反して開き、口唇部はつまみ上げられ尖る。 3. ロクロ調整。
第38図 墨書一1	杯	完形	14.3 4.3 9.5	1. a:スコリアを含む b:良 c:灰褐色 2. 口径に対して底径も大きく、全体に器厚が厚くごつい感がある。 3. 体部下端及び底部全面回転ヘラケズリ。底部その後ナデ。
2	杯	½	— — 8.4	1. a:雲母を多く含む b:良 c:淡灰褐色 2. 体部下半のロクロ目は弱く、60度前後の角度で立ち上がる。 3. 体部下端及び底部全面手もちヘラケズリ。
3	杯	½	(12.0) (3.4) (8.2)	1. a:砂を多く含む b:良 c:黄褐色 2. 底部はゆるやかな曲面となり、体部は僅かに内彎して立ち上がる。 3. 外面体部及び底部ヘラケズリ。内面ナデの後ミガキ。
4	杯	¼	(11.2) (4.4) (6.4)	1. a:砂・スコリアを多く含む b:良 c:黄褐色 2. 底部は曲面となり、体部は僅かに内彎し口縁部は直立する。 3. 体部外面ヘラナデ、内面及び口縁部ヨコナデ。
5	杯	完形	(11.2) (4.1) (6.6)	1. a:雲母・スコリアを含む b:大変良好 c:明茶褐色 2. 口径に対して底径も大きく、口縁部がほんの僅か外反する。 3. 体部下端及び底部周辺回転ヘラケズリ。底部中央無調整。
6	杯	½	— — 6.0	1. a:精選 b:良 c:黄白色 2. やや上げ底気味となる。 3. 体部下端及び底部全面手もちヘラケズリ。底部その後ナデ。
7	杯	破片	— — —	1. a:砂を多く含む b:良 c:黄白色 2. 体部は僅かに内彎し、口縁部はゆるやかに外反する。 3. ロクロ調整。

写 真 图 版

竜角寺

向台遺跡

大畑遺跡

みそ岩屋古墳

岩屋古墳





向台遺跡

大畑 I-2 遺跡

大畑 I 遺跡

大畑遺跡群の航空写真



1

1. 大畑 I-2遺跡の航空写真 (南西上空から)

2. 大畑 I-2遺跡の航空写真 (東上空から)



2

1. 遺跡遠景（北から）



2. A地点全景（南西から）



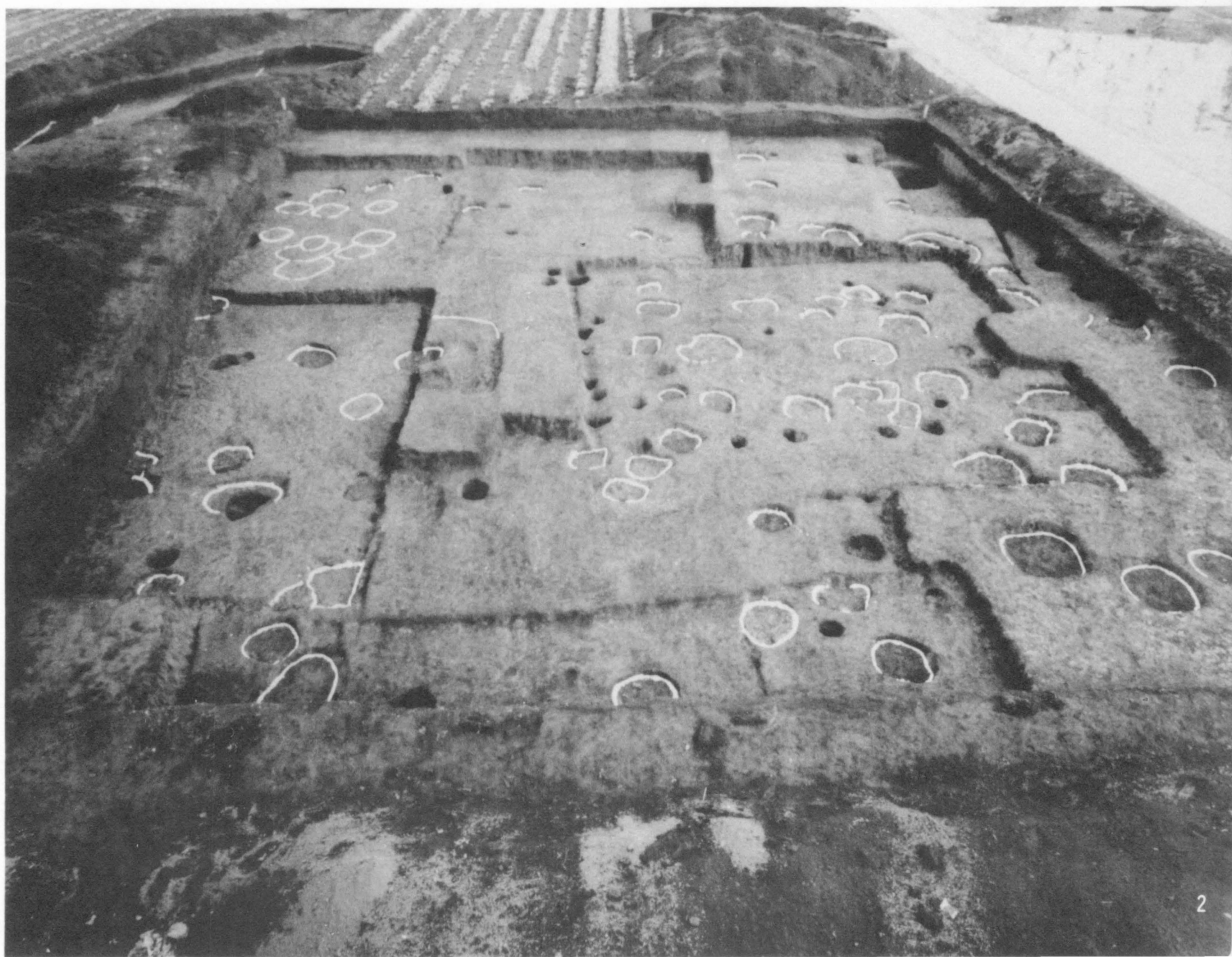
3. 501号跡全景（南東から）





1. B地点全景（北西から）

2. B地点全景（北東から）



1. 503・505号跡全景
(北西から)



2. 506号跡全景(北西から)



3. 512・514号跡全景
(北東から)



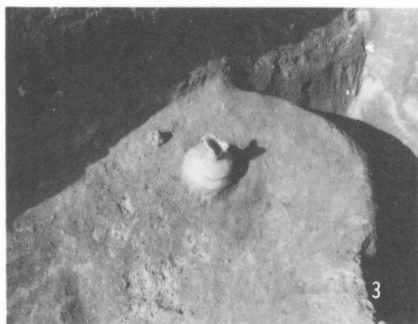
1. D501号跡全景 (西から)



2. 505号跡遺物出土状況
(東から)



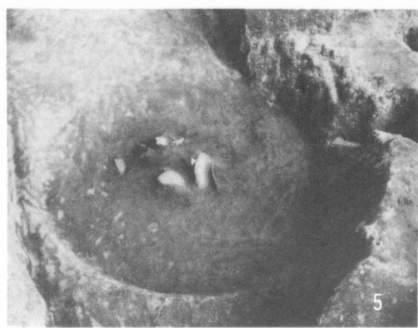
3. 505号跡遺物出土状況
(東から)



4. 506号跡遺物出土状況
(南東から)

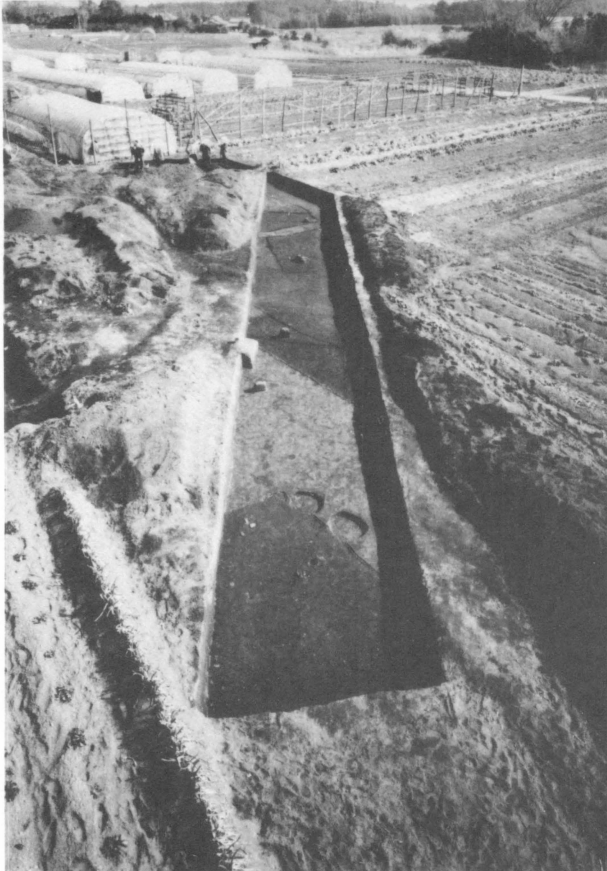


5. D501号跡遺物出土状況
(西から)

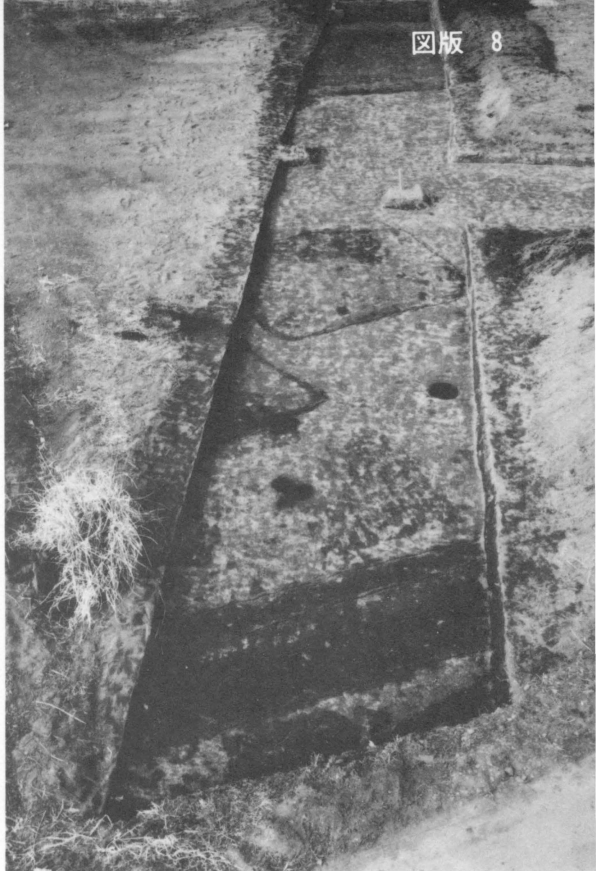


6. 文字瓦出土状況

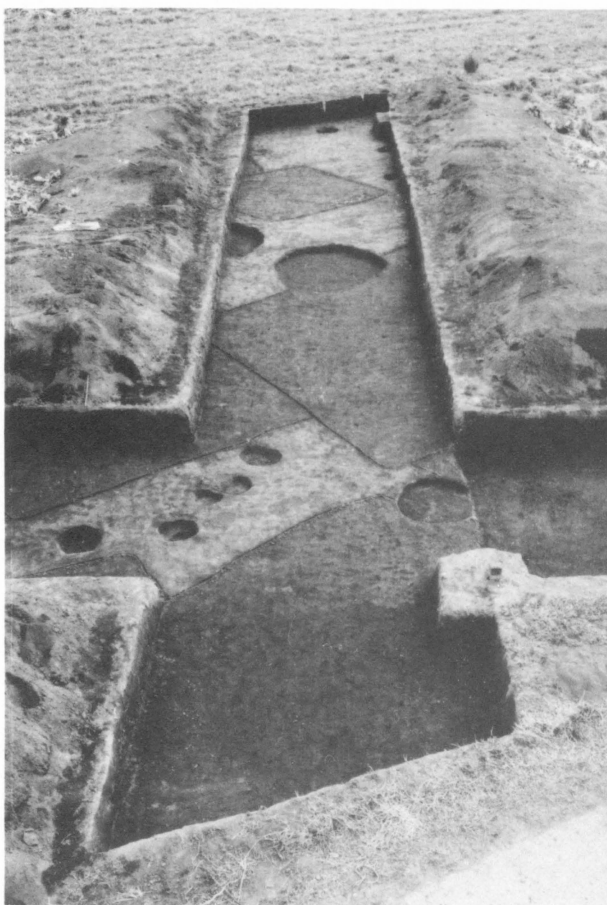




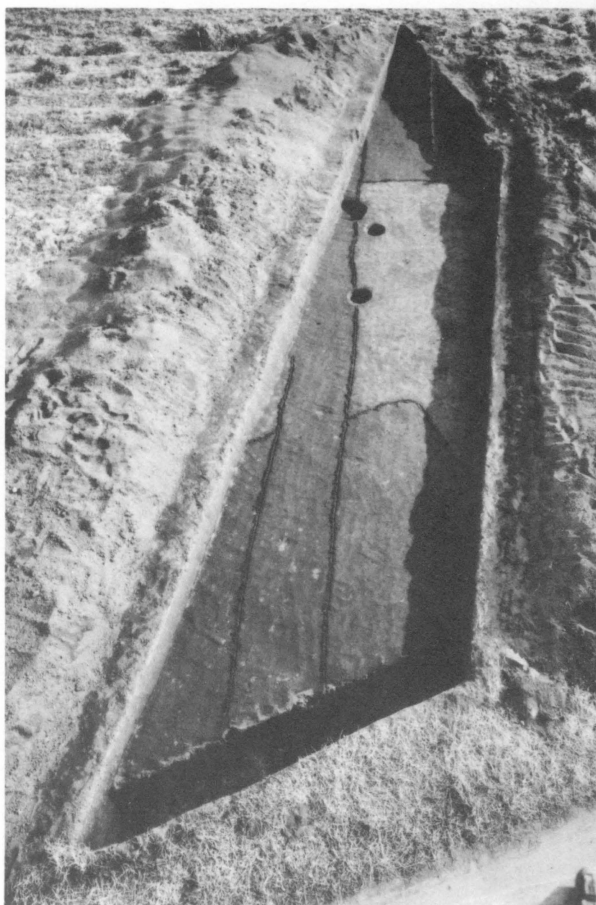
1. Z8-9-Nトレンチ全景 (西から)



2. Y10-Wトレンチ全景 (南から)



3. Z10-Wトレンチ全景 (北から)

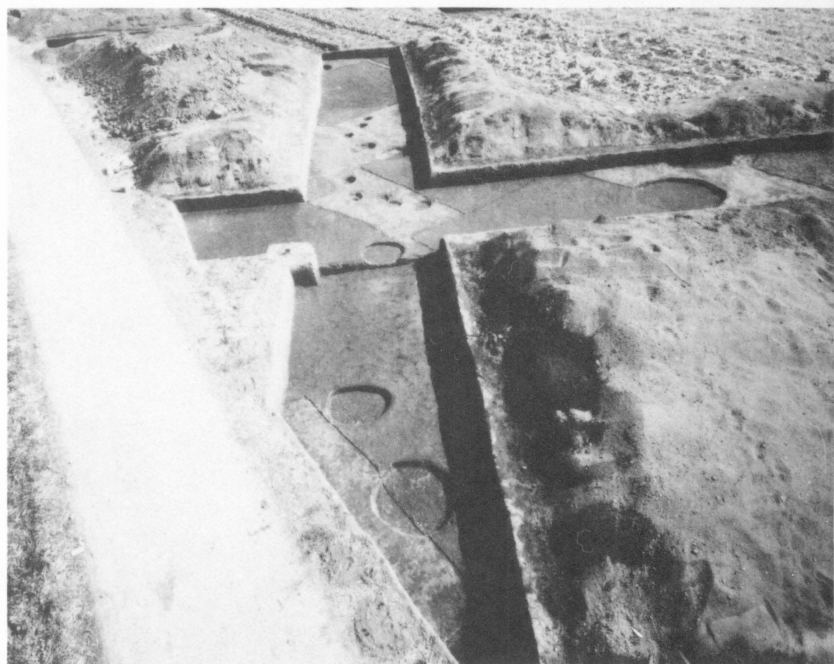


4. Z11-Wトレンチ全景 (北から)

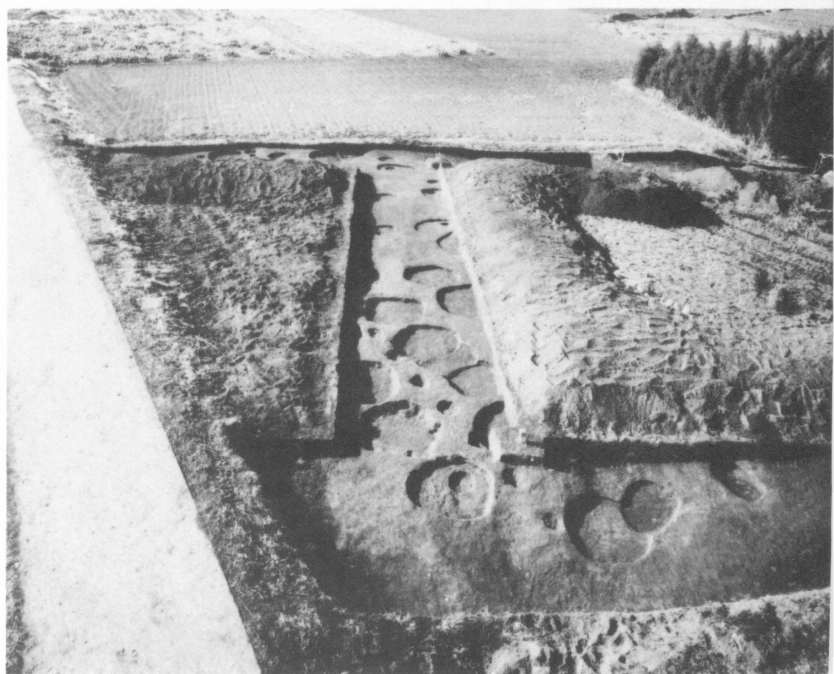
1. Z9-Wトレンチ全景
(南から)

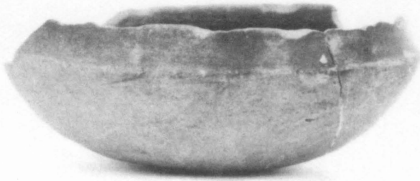


2. Z10・11-Nトレンチ全景
(西から)



3. Z12-Nトレンチ全景
(東から)





501
1



501
2



501
3



501
4



503
1



505
5



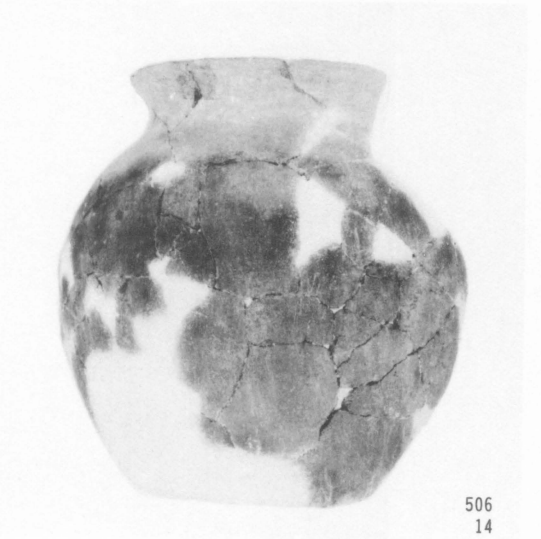
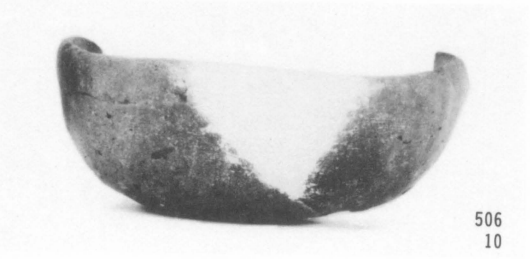
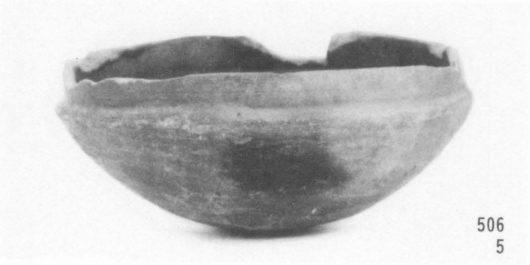
505
3



505
4



505
10





507
6



508
4



508
8



509
1



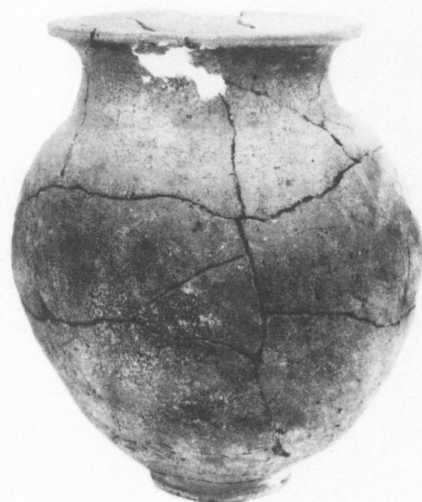
510
1



507
9



508
9



510
3



510
2



511
1



511
2



513
2



514
1



514
3



D501
2



土師器
5



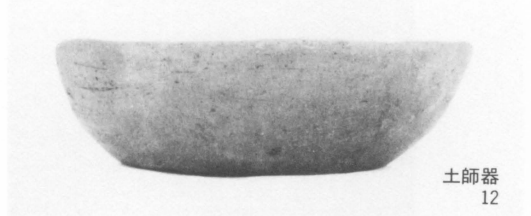
土師器
6



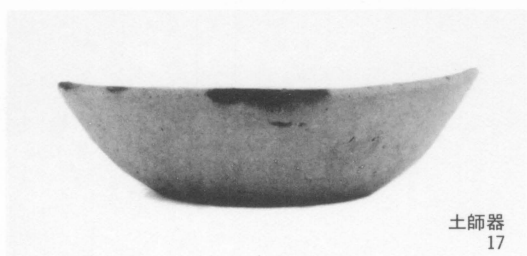
土師器
10



土師器
11



土師器
12



土師器
17



土師器
18



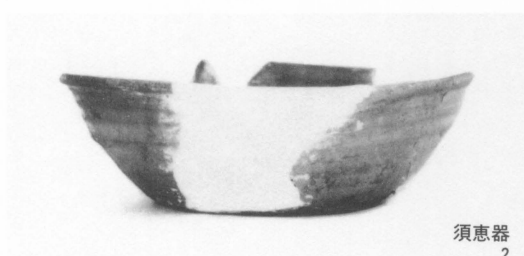
土師器
20



土師器
23



墨書土器
3



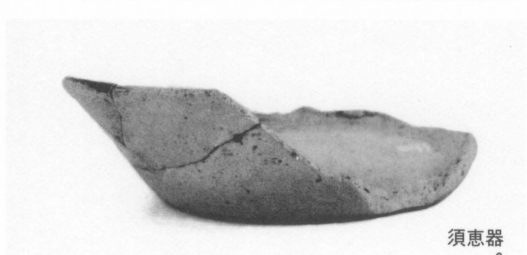
須恵器
2



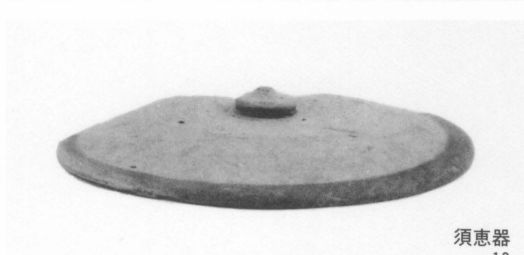
須恵器
3



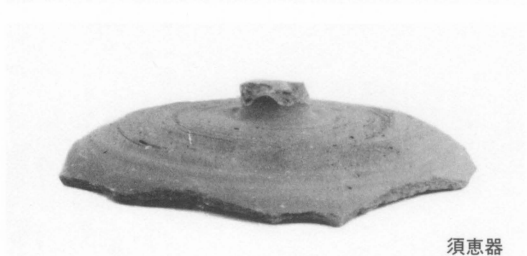
須恵器
6



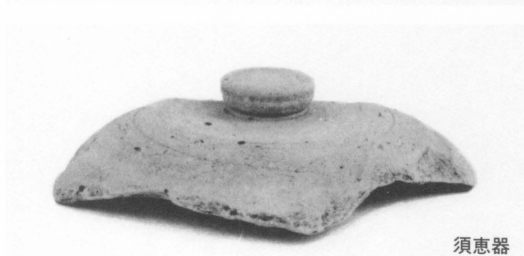
須恵器
9



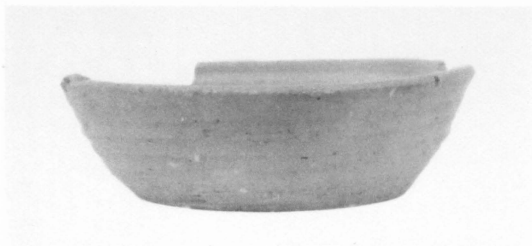
須恵器
13



須恵器
14

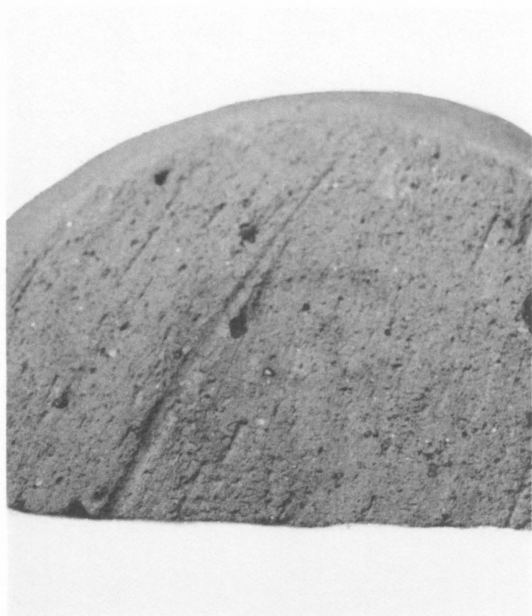


須恵器
15



1. 墨書土器の1「厨」

2. 墨書土器の5「土」



3. 墨書土器の2「厨」

4. 墨書土器の7「口九十」

出土地点

1=Y8-15グリッド

2=Y8-10グリッド

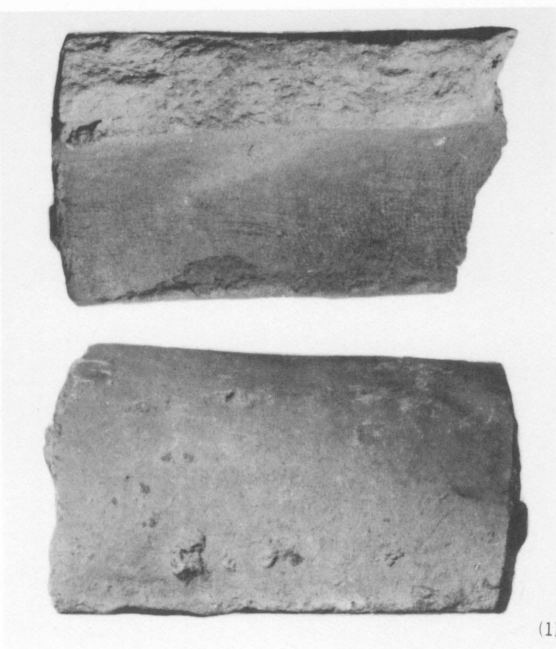
5=X9-16グリッド

7=D501号跡

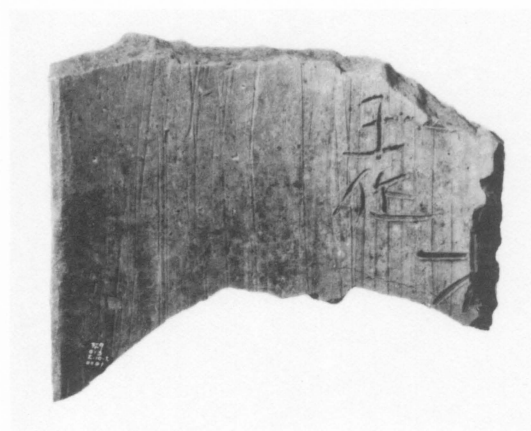
墨書土器



瓦当接合部



(1)



(5)



(6)

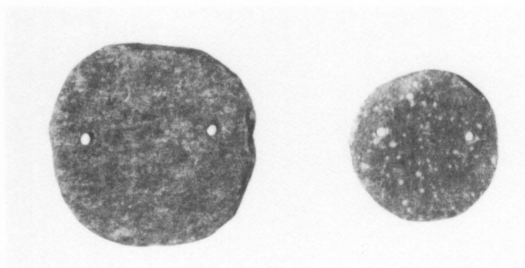
グリッド出土の瓦



丸瓦調整痕 (3)



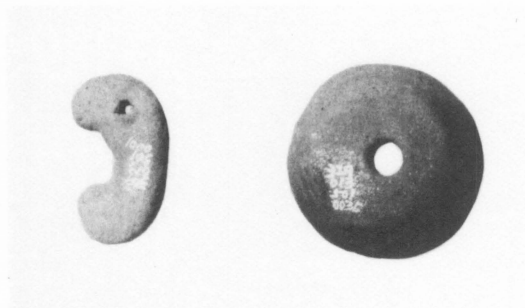
平瓦調整痕 (4)



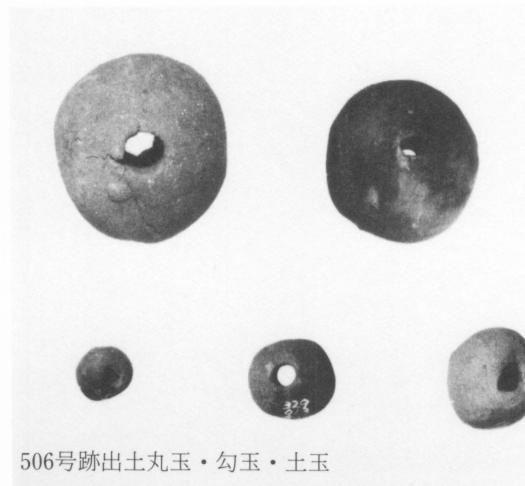
501・507号跡出土有孔円板



506号跡出土砥石



501号跡出土土製品

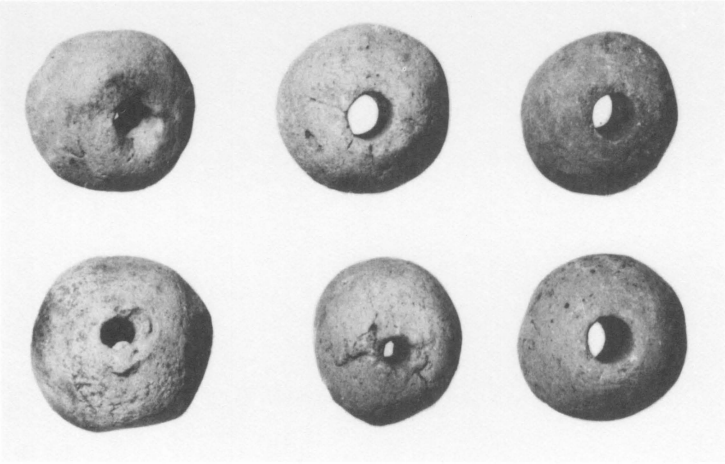


506号跡出土丸玉・勾玉・土玉

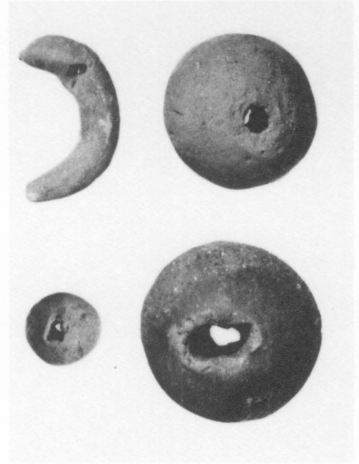


507号跡出土土玉

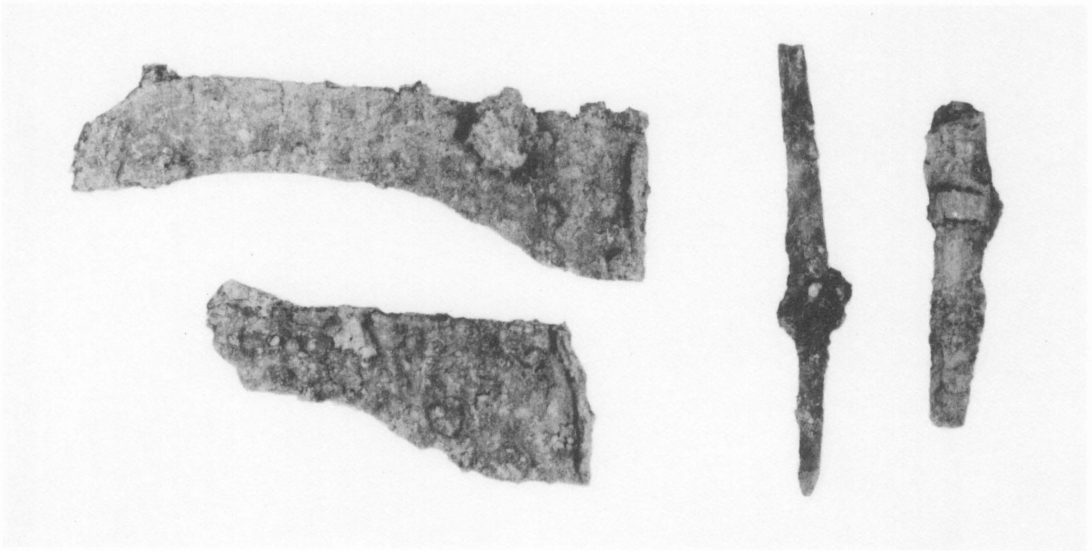
瓦の調整痕, 石製品, 土製品



508号跡出土土玉

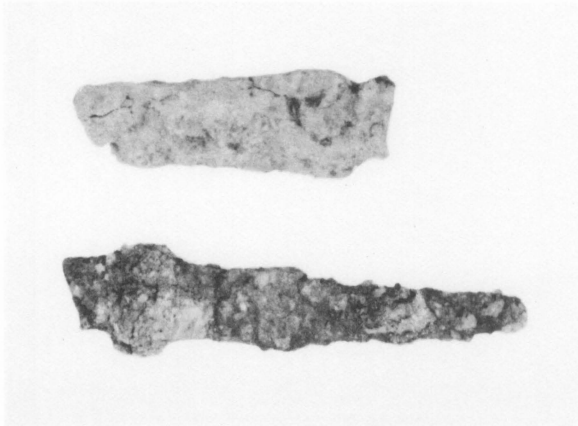


510号跡出土勾玉・土玉



506号跡出土鉄器

509号跡出土鉄器

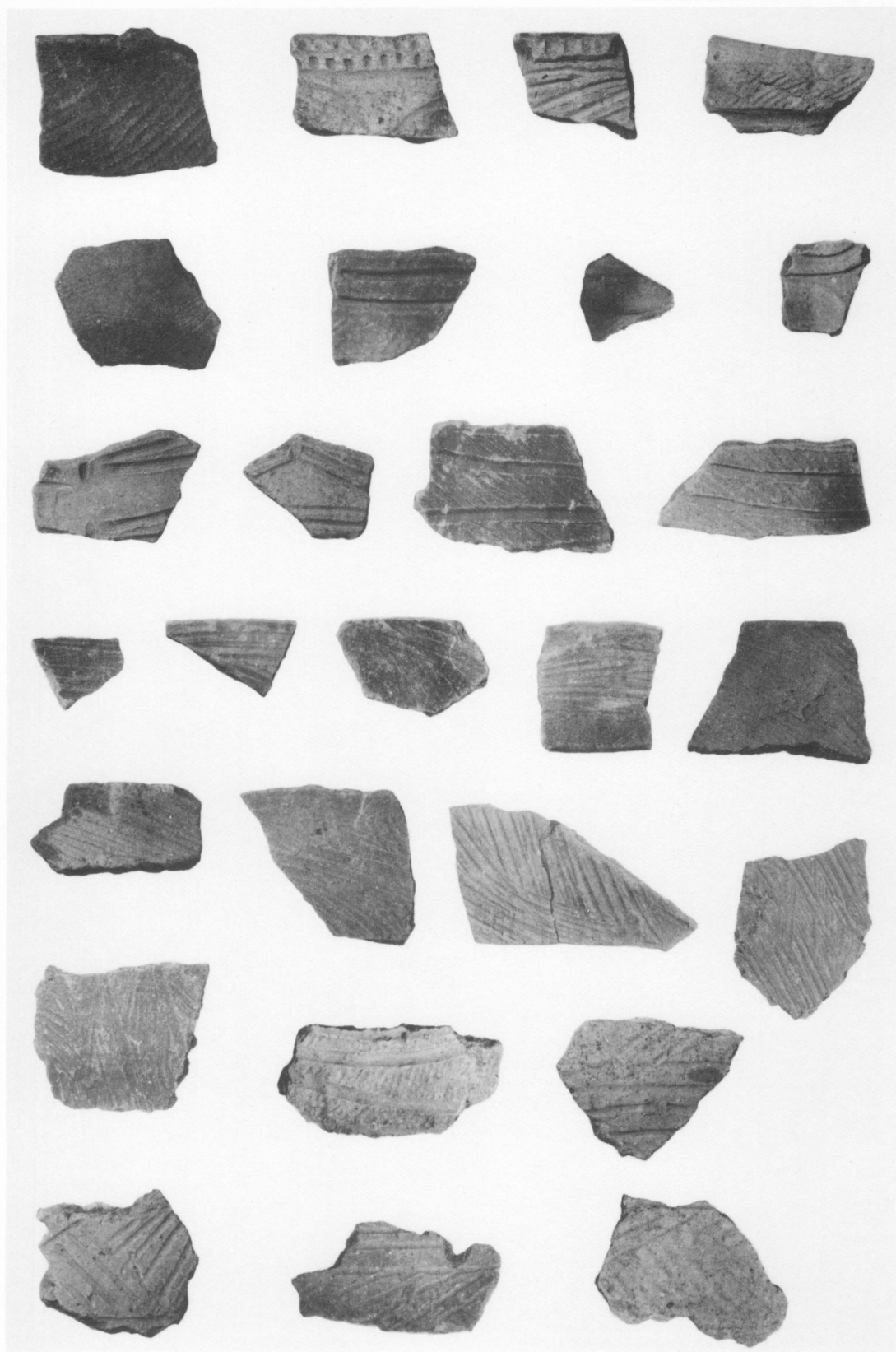


511号跡出土耳環

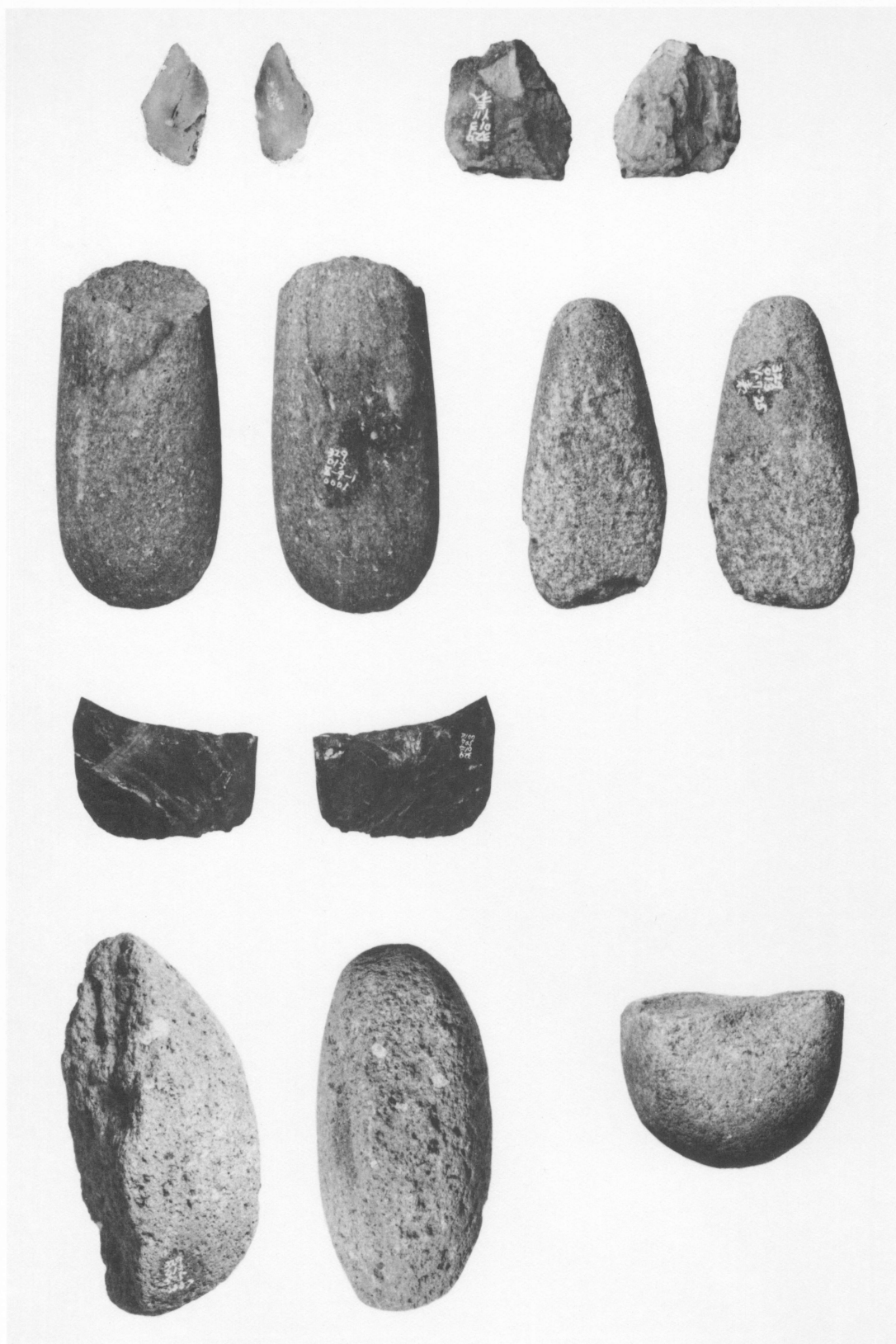


514号跡出土鉄鍬

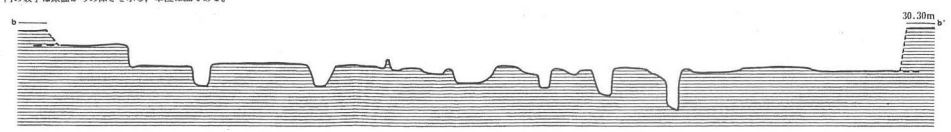
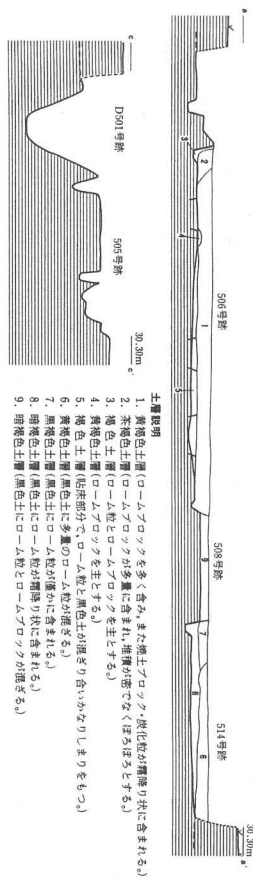
土製品，鉄製品，耳環



繩文式土器・弥生式土器



石器



付図1 B地点検出住居跡実測図

X = -19.100
Y = 39.100

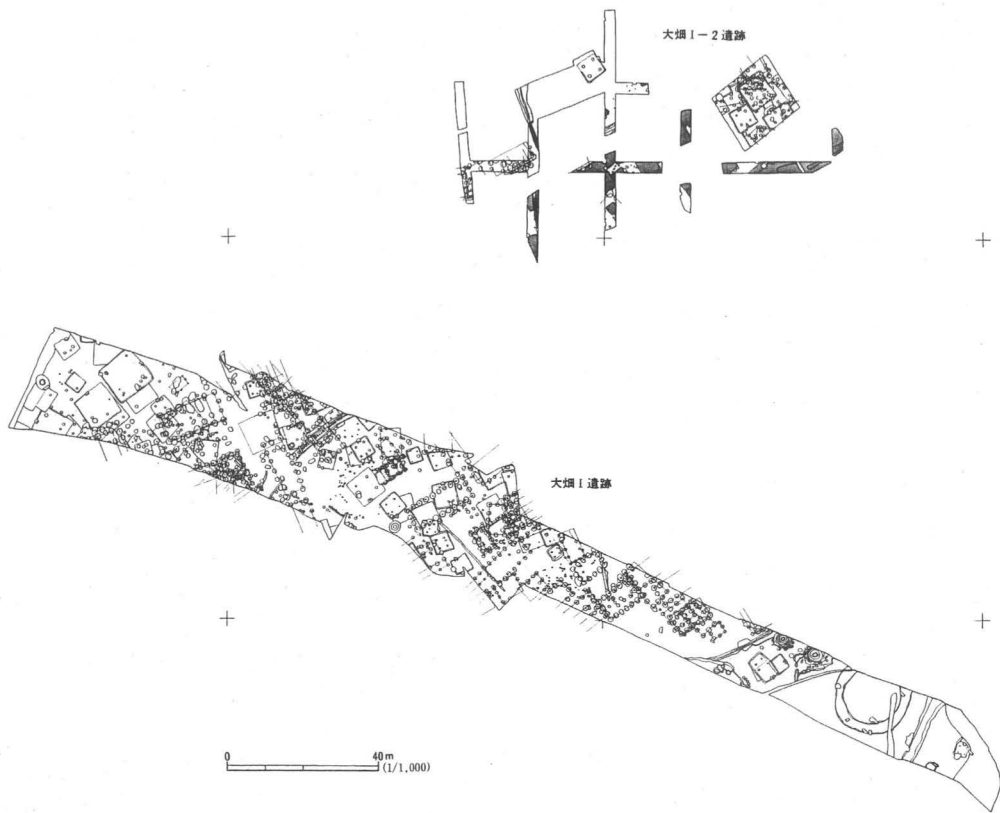
Y = 39.200

Y = 39.300

Y = 39.400

X = -19.200

X = -19.300



付図2 大畑 1 遺跡及び大畑 1-2 遺跡全体図

昭和60年 3月20日 印刷

昭和60年 3月30日 発行

栄町大畑 I - 2 遺跡

県単道路成田安食線埋蔵文化財調査報告書

発行 千葉県土木部

千葉県千葉市市場町 1 - 1

財団法人 千葉県文化財センター

千葉県千葉市葛城 2 - 10 - 1

印刷 株式会社 弘文社

市川市市川南 2 - 7 - 2

『栄町大畑1-2遺跡』正誤表

ページ	箇所	誤	正
18	上から16行目	床面を大部	床面を大分
21	下から2行目	大部破壊	大分破壊
44	下から6行目	9.3cm, 裾径9.5cm	9.4cm, 裾径9.7cm
52	下から5行目	12は完形	11は完形
56	上から5行目	口径14.4cm	口径14.3cm
71	514-3	(底径) —	4.1